

授業コード	13037		
授業科目名	NPO/NGO論(前)		
担当者名	宮垣 元(ミヤガキ ゲン)		
配当年次	学部学科により異なる	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜2限
オフィスアワー	前期火・水曜の12時10分～13時がオフィスアワーですので、自由に来て頂いて結構です。それ以外の時間については、事前にメールで連絡をしてください。		

講義の内容	環境や国際援助、福祉や教育などをはじめ、様々な分野においてNPO(非営利組織)・NGO(非政府組織)が大きな役割を果たしており、その重要性は今後増すことが予想されている。これらの諸活動には、行政や企業に対する独自の有効性が期待されているが、その根拠や可能性は十分明確ではない。本講義の目的は、こうした「未知なる組織」であるNPOの実態を知り、今日の経済社会における意義を理解することにある。前半では、日本のNPOの歴史と実態などを整理しながら基本的知識を得る。後半では、ゲストスピーカーや個人・グループ作業などを通してNPOの設立・運営などの事例を検討し、その組織原理を学ぶ。
到達目標	NPO/NGOの運営ノウハウや制度的知識よりも、これらの活動や組織が、なぜ存在し、どのような有効性や可能性を持つかという点を自ら考え、理解することを目標としたい。
講義方法	1つのテーマについて1～2回程度の講義を行います。講義と平行して、ゲストスピーカーにも来て頂く予定です。また、クラス規模により可能であれば、個人発表、グループワークなどを行いたいと考えています(形態は受講者数により決定します)。具体的な進め方などは、第1回の授業でお話しますので、履修者は必ず第1回目に出席してください。
準備学習	予習は特に必要としないが、講義資料は事前にダウンロードし、講義内容を自らそれに補足しながら学習して欲しいと思います。なお、NPO/NGOの全体を15回の講義ですべて網羅することは困難であるため、講義ではいくつかの重要なポイントに絞って進めます。講義で紹介できない事例については、参考文献なども活用して下さい。
成績評価	数回の中間レポートと期末試験もしくは期末レポート(受講者数により決定)により総合的に行う。発表、グループワーク、ゲストスピーカーなど、授業への参加についても加味する。
講義構成	<ol style="list-style-type: none"> ボランティア元年からNPO・NGOへ(イントロ) <ul style="list-style-type: none"> NPOの概要と関連概念の基本的な考え方 NPO法と社会的基盤、中間支援組織 NPOとは何か <ul style="list-style-type: none"> 理論的背景と「non」の悲劇 社会学におけるNPO 経済学におけるNPO、など NPOの現状 <ul style="list-style-type: none"> NPOの歴史(市民的公益活動の系譜) NPOの現状(NPO法人数の推移、活動分野ほか) NPOと組織(NPOの組織構造) 事例研究 <ul style="list-style-type: none"> ボランティアとNPO ヒューマンサービス分野のNPO まちづくりとNPO、など NPOの設立・運営・評価 <ul style="list-style-type: none"> NPOをつくる NPOをマネジメントする NPOを評価する 情報社会におけるNPOの意義と課題(まとめ)
教科書	教科書は特に指定しない。参考文献・資料などは講義でも随時紹介する。また、必要な資料の配布を行うので、各自ファイルしておくこと。
参考書・資料	<p>宮垣が執筆に関わったものとして以下の三冊を参考書としてあげておきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 宮垣元『ヒューマンサービスと信頼：福祉NPOの理論と実証』慶應義塾大学出版会 平松・鶴飼・宮垣・星『社会ネットワークのリサーチメソッド(仮題)』ミネルヴァ書房 P. F. ドラッカー・G. J. スターン『非営利組織の成果重視マネジメント』ダイヤモンド社 <p>また、講義では直接取り扱いませんが、入門書としては以下をおすすめします。</p> <ul style="list-style-type: none"> 上條茉莉子・椎野修平編『NPO解体新書』公人社 山岡義典編『NPO基礎講座』ぎょうせい 山岡義典編『NPO基礎講座2』ぎょうせい 山岡義典編『NPO実践講座』ぎょうせい 山岡義典編『NPO実践講座2』ぎょうせい 山岡義典編『NPO実践講座3』ぎょうせい

	・谷本寛治・田尾雅夫ほか編『シリーズ・NPO』ミネルヴァ書房
講義関連事項	本講義は文学部「地域連携科目」です。ゲストスピーカーをおよびする際は、受講生以外に地域の方なども聴講が可能です。
担当者から一言	ひとことで言うと「やることの多い授業」です。そのことをよく理解して受講してください。NPOやNGO、ボランティアに関心がある人、参加したい人など、意欲のある人を歓迎します。
ホームページタイトル	codeプロジェクト:甲南大学の地域活動取材活動のページです。実際の活動に関する調査活動に関心のある人は参考にして下さい。
URL	http://www.code.glab.org/

授業コード	13033		
授業科目名	映像文化論(映像文化論I)(後)		
担当者名	田野大輔(タノ ダイスケ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	木曜4限
オフィスアワー	火曜・水曜・木曜の昼休み、および木曜5限。必要な場合はメールで連絡すること。dtano@nifty.com		

講義の内容	情報化社会で暮らす私たちは、毎日大量の広告や宣伝に接しているが、そうした広告や宣伝が私たちにどのような影響を及ぼしているのかを理解するため、テレビショッピングやダイレクトメールの説得術、テレビCMの内容などを分析する。
到達目標	講義を通じて、広告や宣伝の読み解き方を身につけ、それらが私たちに及ぼす影響を理解することが目標である。
講義方法	講義は毎回配布するプリントと、適宜紹介する映像や資料を中心に進める。映像・資料を用いながら、できるだけわかりやすく解説するが、かなり踏み込んだ内容を含んでいるので、積極的な受講態度が望まれる。
準備学習	必要に応じて指示する。
成績評価	期末テスト70点、小レポート30点とし、講義内容の理解度、および問題意識の深さを評価する。
講義構成	(1) イントロダクション (2) メディアとは何か？ (3) ミミズ入りのハンバーガー？：うわさの社会学 (4)～(5) プロジェクトX：ニュースは娯楽である (6)～(7) 2ちゃんねる：情報化社会の現在と未来 (8)～(9) 注意散漫な視聴者：テレビショッピングの説得術 (10)～(11) 封を開けさせる：ダイレクトメールの説得術 (12)～(14) テレビCMを分析してみよう！ (15) まとめ
教科書	使用しない。プリントを配布する。
参考書・資料	アンソニー・プラトカニス／エリオット・アロンソン著『プロパガンダ：広告・政治宣伝のからくりを見抜く』(誠信書房、1998年)

授業コード	13T11		
授業科目名	家族社会学(家族社会学I)(A)(前)		
担当者名	野々山久也(ノノヤマ ヒサヤ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	月曜4限
特記事項	文学部		
オフィスアワー	月・火(12:10～1:00)。そのほか必要があれば、電話078-435-2379やメール:nonoyama@konan-u.ac.jpなどにて予約してください。		
講義の内容	家族社会学は、社会学が研究の対象にする最も基礎的な領域、すなわち家族や結婚や夫婦関係や親子関係		

	などを中心にして、その制度のあり方や集団のダイナミクスや生活スタイルのあり方について研究する分野である。この科目は、「社会学」を学ぼうとする学生諸君ならば、まず初歩的な段階で学習しておきたい科目である。この研究分野の高度な専門的知識に関しては、ここでは学習しない。
到達目標	この講義では、家族社会学に関しての高度な専門知識の学習を到達目標にはしていない。むしろ自分が育ってきた家族が一体、どのような家族であったのか、またこれから自分が形成していく家族がどのような家族であるか、などに関心のある学生諸君、そして家族や結婚について社会的により深い知識をもちたいと思っている学生諸君を対象にして、この授業の履修によって家族一般はもちろんのこと自分の家族の見方や家族との接し方が大きく変わることを到達目標にしている。
講義方法	現代家族について、とくにその集団という側面を中心にして講義形式で進めていく。おおむね1つのテーマを2～3回にわけて、具体的かつ詳細に解説していく。このことは現代家族について学習するとともに、家族社会学の分析方法についても学習していくことになる。具体的な事例や調査結果の提示を講義資料として活用する。
準備学習	My KONANに毎回、掲載される講義関連資料から各自資料をプリントアウトして呈示された資料をもとに前もって授業準備をしていくことが必須である。その他、新聞や雑誌などの家族に関連する情報を確認し、授業内容のテーマとともに家族や友人と議論を行なっていくこと。
成績評価	期末テスト(60分)を中心にして、その他の採点を加味して成績を総合評価する。授業中の私語は、減点対象になる。また授業中に数回のレポート提出を課す(未提出は、理由の如何にかかわらず0点と評価する)。提出は、すべて紙媒体(メールによる添付は不可)によること。提出先は、10号館7階の廊下にあるレポート・ボックスのうちの指示されたボックス番号に提出すること。
講義構成	<ol style="list-style-type: none"> 1 家族社会学の基本概念 2 家族社会学の発展史 3 配偶者選択(恋愛・結婚)の過程 4 結婚と夫婦関係 5 子どもの社会化 <ol style="list-style-type: none"> (1) 核家族の自立化と子育て (2) 子育ての困り込み (3) 家族の遊び力 (4) 父親力の回復 6 家族の危機 7 家族の内部構造 <ol style="list-style-type: none"> (1) 分業構造 (2) 勢力構造 (3) 情緒構造 8 家族システムの視点 9 家族福祉の視点 10 家族の将来—21世紀型家族とは—
教科書	とくに特定の教科書を指定してはいない。授業のすすみ具合にそって、そのつど参考文献などを紹介していく。
参考書・資料	<p>講義資料は、毎回、My KONANの「講義関連資料」に掲載するので、つねに確認すること。なお、一応の参考文献は、以下のとおりである。</p> <p>デヴィッド・チール著(野々山ほか訳)『家族ライフスタイルの社会学』ミネルヴァ書房 野々山久也著『家族の遊び力』ミネルヴァ書房 野々山久也著『現代家族のパラダイム革新』東京大学出版会 野々山久也編著『家族福祉の視点』ミネルヴァ書房 など。</p>
講義関連事項	受講するにあたって持参すべき資料や連絡事項を、MY KONANの講義関連資料の欄に掲載するので、毎回、必ずチェックしてから授業に出席すること。それは授業の予習をしておくということでもある。
担当者から一言	
その他	とくに出席について毎回、点呼するようなことはしないが、登録する以上は、出席は当然の義務である。

授業コード	13T12		
授業科目名	家族社会学(家族社会学I)(B)(前)		
担当者名	安達正嗣(アダチ マサン)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	月曜4限
特記事項	他学部(2年次以上)		

講義の内容	家族社会学における主要な論点を取りあげながら、家族社会学の基本的な概念や考え方を解説して、個人、家族、社会の関係を理解するための能力を養うことを目的としている。本講義では、とくに法学部の学生のみが受講していることを考慮して、たとえば結婚行動や夫婦関係といったトピックスを用意することによって、法律と家族との関連を重視した講義をおこなうことにする。
到達目標	法学を学んでいくなかで、家族を理解することは不可欠である。法学部の学生が法学を学んでいくなかで、家族社会学的な考察をできるようにする。
講義方法	教科書として、野々山久也編著『論点ハンドブック 家族社会学』を用いる。 教科書を解説するだけでなく、新聞や統計資料などといったプリント教材、ビデオ(DVD)やインターネットのホームページなども活用しながら、家族社会学に対する理解が深まるように具体的に講義をおこなう。 なお、講義中に個人をあてて、質問に答えてもらったり、意見を言ってもらったりすることがあるので、その心構えが必要となる。教室の後部に座っている学生を重点的にあてる予定である。
準備学習	教科書である『論点ハンドブック 家族社会学』をあらかじめ読んでおくことを前提として講義をおこなうので、その時間におこなう箇所については予告するので、必ず読んでおくこと。
成績評価	定期試験(100%)。ただし、講義中におこなった質問への答え、あるいは意見を考慮することもある。
講義構成	第1回 オリエンテーション 第2回 家族研究の発端 第3回 家族分析の基礎 第4回 親族と地域社会 ① 第5回 親族と地域社会 ② 第6回 家族変動 ① 第7回 家族変動 ② 第8回 近代家族 ① 第9回 近代家族 ② 第10回 結婚とは何か ① 第11回 結婚とは何か ② 第12回 結婚行動 第13回 夫婦関係 ① 第14回 夫婦関係 ② 第15回 まとめ
教科書	野々山久也編著『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社、2009年(2500円+税)。
参考書・資料	適宜、指示する。
講義関連事項	後期科目「家族社会学Ⅱ(B)(後)」
担当者から一言	家族社会学Ⅰ(B)(前)と家族社会学Ⅱ(B)(後)は連続しており、教科書も同一なので、両方とも受講することが望ましい。 なお、私語をしている学生がいた場合には、何か述べたいことがあると判断して、その人を積極的に指名して質問をしたり意見を聞いたりします。
その他	法学を学んでいくうえで、家族の問題は避けられないと思いますので、関心をもって聴講してください。

授業コード	13W11		
授業科目名	現代家族論(家族社会学Ⅱ)(A)(後)		
担当者名	野々山久也(ノノヤマ ヒサヤ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜2限
特記事項	文学部		
オフィスアワー	月・火(12:10~1:00)。そのほか必要があれば、電話078-435-2379やメール: nonoyama@konan-u.ac.jpなどにて予約してください。		

講義の内容	この科目は、家族社会学Ⅰを履修し終えた学生たちに開講されており、より高度な現代家族社会学についての諸理論の学習を目的としている。本年度は、とくにレファレンス・ブック『論点ハンドブック家族社会学』(世界思想社)をテキストとして活用して講義を進めていく。このテキストは、家族社会学の命題や論争点をそれぞれ4ページにわたって、要領よく解説している。テキストにしたがって学習を進めていく。
到達目標	家族社会学におけるそれぞれの論争に関して何が焦点であって、どんな内容の論争が展開されたのかを詳細に学んでいく。そして、そのような論争が何を意味していたのかを今日的な視点で改めて問い直していく。その

	ことが学習できれば、目標の達成である。																																								
講義方法	必要な項目を1回の講義において4項目(論点)ほどを選択して講義していく。テキストに収録されている論点(項目)は、合計80項目である。全体で14回ほどの講義回数として、1回に4項目であれば、56項目ほど学習できる。できるだけ多くの項目を確実に学習していきたい。そうすることで、ほぼ今日の家族社会学の理論的な全体像を学習することができることになる。																																								
準備学習	この科目は、家族社会学 I をすでに学習してきていることを前提にして授業を進めていく。したがって、すでに家族社会学 I を履修してきていることが条件になる。なお、この科目は、テキストを用いて講義を進めていく。したがって、授業に出席するためには、前もってテキストを読んで出席すると、一段と講義内容の理解が容易になるはずである。																																								
成績評価	期末テスト(60分)を中心にして、その他の採点を加味して成績を総合評価する。授業中の私語は、減点対象になる。また授業中に数回のレポート提出を課す(未提出は、理由の如何にかかわらず0点と評価する)。提出は、すべて紙媒体(メールによる添付は不可)によること。提出先は、10号館7階の廊下にあるレポート・ボックスのうちの指示されたボックス番号に提出すること。																																								
講義構成	<table border="0"> <tr> <td>1 家華族研究の発端</td> <td>21 結婚行動の動向</td> </tr> <tr> <td>2 家族普遍性</td> <td>22 結婚行動の動機</td> </tr> <tr> <td>3 家族の定義づけ</td> <td>23 結婚適齢期</td> </tr> <tr> <td>4 制度としての家族の多様性</td> <td>24 結婚の安定性</td> </tr> <tr> <td>5 集団としての家族の多様性</td> <td>25 夫婦の勢力関係</td> </tr> <tr> <td>6 家族研究の分析方法</td> <td>26 伝統的な夫婦の勢力関係</td> </tr> <tr> <td>7 家族と一般システム理論</td> <td>27 性別役割分業の原型</td> </tr> <tr> <td>8 家族類型の収斂</td> <td>28 子どもの社会化</td> </tr> <tr> <td>9 家族機能の変化</td> <td>29 伝統的な子育て</td> </tr> <tr> <td>10 核家族の自立化</td> <td>30 子どもの基本的社会化</td> </tr> <tr> <td>11 研究単位としての核家族</td> <td>31 階層再生産と家族</td> </tr> <tr> <td>12 夫婦制家族イデオロギー</td> <td>32 ライフコースと家族</td> </tr> <tr> <td>13 近代家族の特性</td> <td>33 生活嗜好と家族ライフスタイル</td> </tr> <tr> <td>14 女性の雇用労働化</td> <td>34 フェミニズムと家族</td> </tr> <tr> <td>15 結婚の定義づけ</td> <td>35 制度としての離婚</td> </tr> <tr> <td>16 結婚の類型化</td> <td>36 離婚行動の抑止要因</td> </tr> <tr> <td>17 伝統的な結婚</td> <td>37 離婚率の変化</td> </tr> <tr> <td>18 制度としての結婚</td> <td>38 再婚後の家族関係</td> </tr> <tr> <td>19 配偶者選択の過程</td> <td>39 老親と世代関係</td> </tr> <tr> <td>20 結婚と家族形成</td> <td>40 高齢者ケアと家族</td> </tr> </table>	1 家華族研究の発端	21 結婚行動の動向	2 家族普遍性	22 結婚行動の動機	3 家族の定義づけ	23 結婚適齢期	4 制度としての家族の多様性	24 結婚の安定性	5 集団としての家族の多様性	25 夫婦の勢力関係	6 家族研究の分析方法	26 伝統的な夫婦の勢力関係	7 家族と一般システム理論	27 性別役割分業の原型	8 家族類型の収斂	28 子どもの社会化	9 家族機能の変化	29 伝統的な子育て	10 核家族の自立化	30 子どもの基本的社会化	11 研究単位としての核家族	31 階層再生産と家族	12 夫婦制家族イデオロギー	32 ライフコースと家族	13 近代家族の特性	33 生活嗜好と家族ライフスタイル	14 女性の雇用労働化	34 フェミニズムと家族	15 結婚の定義づけ	35 制度としての離婚	16 結婚の類型化	36 離婚行動の抑止要因	17 伝統的な結婚	37 離婚率の変化	18 制度としての結婚	38 再婚後の家族関係	19 配偶者選択の過程	39 老親と世代関係	20 結婚と家族形成	40 高齢者ケアと家族
1 家華族研究の発端	21 結婚行動の動向																																								
2 家族普遍性	22 結婚行動の動機																																								
3 家族の定義づけ	23 結婚適齢期																																								
4 制度としての家族の多様性	24 結婚の安定性																																								
5 集団としての家族の多様性	25 夫婦の勢力関係																																								
6 家族研究の分析方法	26 伝統的な夫婦の勢力関係																																								
7 家族と一般システム理論	27 性別役割分業の原型																																								
8 家族類型の収斂	28 子どもの社会化																																								
9 家族機能の変化	29 伝統的な子育て																																								
10 核家族の自立化	30 子どもの基本的社会化																																								
11 研究単位としての核家族	31 階層再生産と家族																																								
12 夫婦制家族イデオロギー	32 ライフコースと家族																																								
13 近代家族の特性	33 生活嗜好と家族ライフスタイル																																								
14 女性の雇用労働化	34 フェミニズムと家族																																								
15 結婚の定義づけ	35 制度としての離婚																																								
16 結婚の類型化	36 離婚行動の抑止要因																																								
17 伝統的な結婚	37 離婚率の変化																																								
18 制度としての結婚	38 再婚後の家族関係																																								
19 配偶者選択の過程	39 老親と世代関係																																								
20 結婚と家族形成	40 高齢者ケアと家族																																								
教科書	野々山久也(編著)『論点ハンドブック家族社会学』世界思想社、2009年																																								

授業コード	13W12		
授業科目名	現代家族論(家族社会学II) (B)(後)		
担当者名	安達正嗣(アダチ マサシ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜4限
特記事項	他学部(2年次以上)		

講義の内容	家族社会学における主要な論点を取りあげながら、家族社会学の基本的な概念や考え方を解説して、個人、家族、社会の関係を理解するための能力を養うことを目的としている。本講義では、とくに法学部の学生のみが受講していることを考慮して、たとえば離婚や家族政策といったトピックスを用意することによって、法律と家族との関連を重視した講義をおこなうことにする。
到達目標	法学を学んでいくなかでは、家族を理解することは不可欠である。法学部の学生が法学を学んでいくなかで、家族社会学的な考察をできるようにする。
講義方法	教科書として、野々山久也編著『論点ハンドブック 家族社会学』を用いる。 教科書を解説するだけではなく、新聞や統計資料などといったプリント教材、ビデオ(DVD)やインターネットのホームページなども活用しながら、家族社会学に対する理解が深まるように具体的に講義をおこなう。 なお、講義中に個人をあてて、質問に答えてもらったり、意見を言ってもらったりすることがあるので、その心構えが必要となる。教室の後部に座っている学生を重点的にあてる予定である。
準備学習	教科書である『論点ハンドブック 家族社会学』をあらかじめ読んでおくことを前提として講義をおこなうので、その時間におこなう箇所については予告するので、必ず読んでおくこと。

成績評価	定期試験(100%)。ただし、講義中におこなった質問への答え、あるいは意見を考慮することもある。
講義構成	第1回 オリエンテーション 第2回 生殖行動 第3回 子育てと子どもの社会化 ① 第4回 子育てと子どもの社会化 ② 第5回 階層と職業 第6回 家族危機 第7回 家族と個人 ① 第8回 家族と個人 ② 第9回 離婚 ① 第10回 離婚 ② 第11回 世代間関係 第12回 家族問題 ① 第13回 家族問題 ② 第14回 家族政策 ① 第15回 家族政策 ②
教科書	野々山久也編著『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社、2009年(2500円+税)。
参考書・資料	適宜、指示する。
講義関連事項	前期科目「家族社会学Ⅰ(B)(前)」
担当者から一言	家族社会学Ⅰ(B)(前)と家族社会学Ⅱ(B)(後)は連続しており、教科書も同一なので、両方とも受講することが望ましい。 なお、私語をしている学生がいた場合には、何か述べたいことがあると判断して、その人を積極的に指名して質問をしたり意見を聞いたりします。
その他	法学を学んでいくうえで、家族の問題は避けられないと思いますので、関心をもって聴講してください。

授業コード	13047		
授業科目名	カルチャー領域特論Ⅰ(前)		
担当者名	竹田京二(タケダ キョウジ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜2限
特記事項	[事前登録]初回講義にてオリエンテーション・面接を実施 初回に出席しなければ受講はできない		

講義の内容	映像の根幹となるシナリオ。 ビデオカメラの操作と撮影の基礎。 インタビュー録音。 ビデオ編集。 フィールドワーク等での記録。
到達目標	シナリオの作成。 映像、音声、コミュニケーション技術を総合的に捉え、ビデオ、オーディオ機器の基本操作を修得する。 シナリオに沿った撮影、録音、編集の方法及び各操作に関する注意点、トラブル対処法などの実践。 パソコンで行うビデオ編集の修得。 フィールドワーク等での記録、発表。
講義方法	ビデオ機材の構造と使用方法の解説。 テキストを参考にして、ビデオ機材の使用実技。 シナリオの構成と作成方法を解説。 基本映像の鑑賞。
準備学習	ビデオ作品として作成したいテーマ(作りたいもの)を確定してください。
成績評価	ビデオ作品およびシナリオ作品の評価。
講義構成	①オリエンテーション 授業の概要と進め方。学内の実習設備等を説明。先輩の優秀作品を鑑賞。 ②映像の歴史 黎明期の映画を鑑賞 ③映像制作の過程と企画

	<p>映像制作の過程を解説。企画の例を挙げる。</p> <p>④シナリオ シナリオは映像の根幹であることを認識。シナリオの構成を講義。</p> <p>⑤絵コンテ 絵コンテを作成する利点と絵コンテによる撮影方法を講義。</p> <p>⑥ノンリニア編集機Ⅰ パソコンで行うビデオ編集の原理。</p> <p>⑦ノンリニア編集機Ⅱ パソコンで行うビデオ編集の実習。</p> <p>⑧ノンリニア編集機Ⅲ 音楽とデジタル写真の読み込み方法を講義。</p> <p>⑨撮影 カメラと三脚の基本操作を解説および実技。</p> <p>⑩レンズ 広角レンズと望遠レンズの特性を解説および実験。</p> <p>⑪録音 マイクロフォンの種類と性質を解説。インタビューの実技。</p> <p>⑫効果音楽 効果音楽の解説と作品鑑賞。</p> <p>⑬DVDの作成</p> <p>⑭PowerPointにビデオ映像をペーストする。</p>
教科書	竹田が作成したテキストを配布します。

授業コード	13041		
授業科目名	環境文化論(前)		
担当者名	乾 清可(イヌイ サヤカ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	土曜3限 土曜4限
特記事項	変則日程で開講するので注意すること		

講義の内容	高度に複雑化した日常生活の中で見えにくくなっている、私達を取り巻くさまざまな環境の問題について考えます。水、住居、食、ゴミ、風景などの身近な主題をてがかりに、日本だけでなくヨーロッパ、アメリカ合衆国、南アメリカ、アフリカの国々の具体的な例を挙げ比較、考察します。
到達目標	人間文化と環境の関係についての理解を深めます。
講義方法	異なる地域や時代の事例が具体的に理解できるよう、ビデオや写真資料などを多く利用し、みなさんとの意見交換を大切にしながら授業を進めていきます。
準備学習	新聞、雑誌、インターネットなどで環境に関連する様々な話題を意識して読み、収集する(6月19日の授業で利用します)。
成績評価	毎回授業の最後に提出してもらった小レポート60%、授業中に行われる課題や宿題40%、発表・その他10%を総合して評価します。
講義構成	<p>01回(5/29) 授業計画の説明ーはじめに</p> <p>02回(5/29) 洗濯方法から見えてくる環境と文化の関係</p> <p>03・04回(6/5) 上下水道の歴史ー水売りから養分の再利用まで</p> <p>05・06回(6/12) 「きれいな」水と「きたない」水ー現代人と水の関係</p> <p>07回(6/19) 土地は誰のものかー湖岸を散歩する権利を求めて:レマン湖の例</p> <p>08回(6/19) 今何が問題になっているのか</p> <p>09回(6/26) 住宅と環境問題ー古い家ほど価値がある:フランスの例</p> <p>10回(6/26) ゴミと人の関係史</p> <p>11回・12回(7/3) 遠い食物と近い食物ー食文化と環境の問題</p> <p>13回(7/10) 水辺風景の歴史とその変化ーセーヌ川岸を例に</p> <p>14回(7/10) 環境と文化まとめ</p>
教科書	使用しません。
参考書・資料	<p>嘉田由紀子『環境社会学』2002年 岩波書店(環境学入門9)</p> <p>鶴見良行『バナナと日本人』1982年 岩波新書</p> <p>村井吉敬『エビと日本人』1988年 岩波新書</p>

	*この他にも本や資料など授業中に逐次紹介します。
講義関連事項	試験や期末レポートがない分、出席と授業への積極的な参加や、出された宿題にどれだけ熱心に取り組むかが評価の大切なポイントになります。
担当者から一言	何気なく過ぎてゆく日常の生活を、異なった視点から見直す良い機会になればと思っています。
その他	質問がある人は授業の後、またはmailでお願いします(アドレスは授業のはじめにお知らせします)。

授業コード	13042		
授業科目名	現代文化論(現代文化論I)(後)		
担当者名	永井純一(ナガイ ジュンイチ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜2限

講義の内容	本講義では現代文化としてポピュラー音楽をとりあげる。20世紀を通じて発展してきたポピュラー音楽は、われわれの日常生活において非常に身近なものであるが、アカデミックな、あるいはジャーナリスティックな視点から注目したとき、「メディア」「社会構造」「民族性」など、さまざまなテーマを見出すことができる。本講義ではそれらに関わるいくつかのトピックを取り上げ、社会学を中心に、音楽を扱った研究を紹介しつつ、広く社会と音楽の関連について考察する。
到達目標	ポピュラー音楽を、単なる楽しみとして終わらせるのではなく、それをきっかけとして、社会を読み解く、何かについて考えるための視点や意識を持つことを最終的な到達目標とする。
講義方法	講義形式。 音源・映像資料を適宜用いる。
準備学習	講義内容に関するテーマや音源について調べておく。
成績評価	期末テストによる評価。
講義構成	第1回 はじめに 第2回 ポピュラー音楽と聴衆 第3回 Jポップ論1 第4回 Jポップ論2 第5回 Jポップ論3 第6回 音楽のデジタル化 第7回 フェスティバル 第8回 サウンドとイメージ(ビデオクリップ) 第9回 音楽の社会的影響 第10回 ブリットポップとクールブリタニア 第11回 ジェンダー、セクシュアリティと音楽 第12回 音楽とアイデンティティ——沖縄音楽 第13回 ジャマイカ・ピース・コンサート 第14回 震災と音楽 第15回 まとめ
教科書	使用しない。
参考書・資料	キース・ニーガス著・安田 昌弘訳『ポピュラー音楽理論入門』(水声社、2004)。 三井徹編訳『ポピュラー・ミュージック・スタディーズ——人社会学の最前線』(音楽之友社、2005) 小川博司『音楽する社会』(勁草書房、1988) ジェイソン・トインビー 著・安田 昌弘 訳『ポピュラー音楽をつくる』(みすず書房、2004)。 その他、講義内で適宜指示する。

授業コード	13051		
授業科目名	現代文化論II(前)		
担当者名	工藤保則(クドウ ヤスノリ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	金曜3限

講義の内容	大学生はさまざまな「現代文化」に関して、強いこだわりを持っていることが多いだろう。が、それはえてして視野の狭いものであったりする。本講義は、受講生が自分の関心の外にある「現代文化」に触れ、それについて考えることを通して、それまでに持っていなかった視点・興味・関心を持つためのきっかけとなることを望むものである。
到達目標	「現代文化」「伝統文化」など身のまわりの「文化」への興味・関心が高まる。
講義方法	講義形式で行う(毎回、映像などを用いる予定である)。
準備学習	授業で示した参考文献に親しむこと。 授業内容の復習。
成績評価	基本的には、期末試験によって評価する(レポート提出とするかもしれない)。「授業への積極的参加」については、加点材料とするつもりである。
講義構成	授業前半は、講師がその1週間で経験した「現代文化トピック」を紹介する。 授業後半は、以下のような話題を各回1つ講じる。(現代文化としての)音楽・雑誌・映画・TV・ラジオ・落語・歌舞伎・狂言・(現代文化作家としての)みうらじゅんの仕事・大田垣晴子の仕事・越前屋俵太の仕事
教科書	教科書は指定しない。
参考書・資料	『質的調査の方法―都市・文化・メディアの感じ方』(工藤・寺岡・宮垣編)法律文化社
その他	遅刻(理由があつて遅刻した場合は、その旨を明確に伝えるように)、私語、携帯電話・メールの使用は厳禁。 他、受講上、適切でない行為については厳しく対応する。 「座っていればなんとかなる」という授業ではないので、「座っていればなんとかなる」授業を望む学生には、向かないと思う。 これを含めた授業の進め方、受講上のルールは1回目の授業において説明をするので、受講希望者は必ず出席をするように(2回目以降の授業においては、そのルールにしたがって授業運営を行う)。

授業コード	13040		
授業科目名	考現学研究(生活文化論I)(前)		
担当者名	阿部真大(アベ マサヒロ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜2限
オフィスアワー	水曜日 昼休み		

講義の内容	「コミュニティケア再考」 現在、地域社会の再生に求められるのは、「規制をかけつつ自立させる」ような秩序の再構想である。それは、これまで「既得権益」と批判されてきたような過度な規制でもなければ、無責任に「起業家精神(アントレプレナーシップ)」をあおる自己責任論でもない。さらに「商店街」である必要もないだろう。それは、超高齢少子化社会を迎える今後の日本社会において、人々のニーズが「モノ」(商店街を支えたのは人々の物質的な豊かさへの欲求であった)から「安心」へと移るなかで、具体的には「コミュニティケアの構想」というかたちをとることになるであろう。 そこで、「規制と自立」をめぐる問題が浮上してくる。その際にもっとも困難な作業となるであろう「中庸の戦略」を見極めるために求められる「社会学的想像力」を養う。
到達目標	決められたテーマに沿って、自分で調査を計画し、実行し、レポートにまとめる力を身につける。
講義方法	実習方式
準備学習	高齢者介護をめぐる社会的な問題について、新聞やニュース等でチェックしておくこと。
成績評価	出席、参加態度、期末レポートから総合的に評価する。
講義構成	1-3 社会保障の基礎 4-6 コミュニティケア調査・設計 7-9 コミュニティケア調査・実施 10-12 コミュニティケア調査・まとめ 13-15 発表と全体のまとめ
教科書	特定の教科書は使用しない。
参考書・資料	必要な文献をその都度指定する。
講義関連事項	講義の内容については進度に応じて若干の変更の可能性あり。

担当者から一言	実習方式です。ただ聞いているだけでなく、自分ならばこの問題に対してどういった提言をするか、考えながら受講してください。その成果が期末レポートでは問われます。
---------	--

授業コード	13U11		
授業科目名	コミュニケーション研究(コミュニケーション研究I) (A)(前)		
担当者名	西橋正泰(ニシハシ マサヒロ)		
配当年次	学部学科により異なる	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	月曜1限
特記事項	文学部		

講義の内容	<p>「ジャーナリズムの世界」</p> <p>私たちは毎日、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌、書籍などのジャーナリズムと接している。そしてそれらが伝える情報によって、意識する、しないにかかわらず、自分自身の生き方、考え方が左右されることすらある。今、私たちが生きている時代を読み解くことは難しい。しかし、さまざまなジャーナリズムが伝える情報から、その一断面を見つめ、考え、その時点での自分なりの疑問や判断をもつことはできる。</p> <p>そして、ジャーナリズムの情報や論調をうのみにするのではなく、主体的に受けとめ、疑問をもち、ともに考える場としたい。</p>
到達目標	いまより、少し意識的にジャーナリズムと接する。良質なジャーナリズムに近づける感覚を身につける。世論操作の対象としての市民から、主体的に考えるための材料をジャーナリズムから得る市民へと成長しよう。
講義方法	<p>毎回冒頭20分間は、最近の新聞記事の中から一つを選び(配布)、読み、疑問を出しあう。残りの70分間は、新聞記事、番組、ジャーナリストの著作などを核にして、その狙い、論点の整理、手法の分析を行い、疑問を出しあう。</p> <p>更に、テストに代わる「伝える側の視点体験」として受講生自身が与えられたテーマについて、人に会って取材し、レポートを提出する。人に会っての取材は必須条件である。</p>
準備学習	新聞を読み、テレビ・ニュースを見るときに、その内容について、「なぜだろう」という疑問をもつ。そして、少し考えてみる。
成績評価	毎回の授業で、どのような疑問をもつか(小用紙に記述)によって30%。テストに代わる「伝える側の視点体験」でテーマをどう深めたか、レポートの内容と説得力によって70%を評価する。レポート提出だけでは単位取得は困難である。
講義構成	<ol style="list-style-type: none"> 1. BSDキュメンタリー(NHK)「封鎖された街に生きて」 2. 人はなぜ争うのか・2010 3. イラク戦争の軌跡 4. 立山良司著「イスラエルとパレスチナ」 5. 高橋和夫著「アメリカとパレスチナ問題」 広河隆一著「パレスチナ」 芝生瑞和著「パレスチナ」 6. ETV特集(NHK)「加藤周一・歴史としての20世紀を語る」 7. 加藤周一著「戦後世代の戦争責任」「どうなる世界、どうする日本」 8. 斎藤茂男さん(元共同通信記者)の仕事(1)「死角からの報告」 9. 斎藤茂男さん(元共同通信記者)の仕事(2)「飽食窮民」 10. 斎藤茂男さん(元共同通信記者)の仕事(3)ジャーナリストとは 11. NHKスペシャル「日中戦争」 12. NHKスペシャル「ドキュメント・太平洋戦争」(1)「大日本帝国のアキレス腱」 13. NHKスペシャル「ドキュメント・太平洋戦争」(2)「敵を知らず己を知らず」 14. NHKスペシャル「ドキュメント・太平洋戦争」(3)「一億玉砕への道」 15. BS特集「"新しい人"になってほしい」大江健三郎から若者たちへ
教科書	なし
参考書・資料	毎回プリントを配布

担当者から一言	時に、その時点でのホットな報道を取り上げたい。また、テストに代わる「伝える側の視点体験」は、与えられたテーマについて、他人の論調の受けうりではなく、あなたらしい視点で取材し、レポートすること。出典を明記せずインターネット、書籍、記事などから引用した場合、採点の対象から除外する。
---------	---

授業コード	13U12		
授業科目名	コミュニケーション研究(コミュニケーション研究I) (B)(前)		
担当者名	小関道幸(オゼキ ミチユキ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	土曜2限
特記事項	他学部		

講義の内容	この授業のキーワードは「ソーシャルプロデューサー」・「ソーシャルメディア」そして「ソーシャルドキュメンタリー」です。 あまり聞きなれない新しい用語ですが、今時代が求めている“ソーシャル”な考え方や感覚を持人達を育成する為のプログラムを展開していきます。 “ソーシャルプロデューサーの元祖”ともいえる坂本龍馬を研究しワークショップで実際の演劇制作を体験してもらう予定です。
到達目標	①今起きているニュースをソーシャルな観点から捉え直す力を養成し、ソーシャルプランナーとして自立していく。 ②マスメディアの情報を一方的に受け取るのではなく、自らの目で現場の課題や解決方法策うい考え抜く力を養う。 ③それぞれの適性に応じて最大のパフォーマンスを成し遂げるソーシャルプレゼン能力を高める。
講義方法	一週間におきたニュースを、ニュース番組や新聞記事を材料にソーシャルプロデュースの観点から解説する。グループディスカッションやグループワーク・発表などの形式をふんだんに盛り込む予定。
準備学習	・TVニュースや新聞報道を常にソーシャルプロデューサーの観点からチェックする。 ・授業で触れた著作物・DVD・映画・テレビ番組などのモニター/視聴に努める。 ・質問事項等あれば事前に用意して積極的に授業参加する。
成績評価	定期試験(60%)、出席確認を兼ねた講義終了時のミニレポート(40%)。 ※但し10回以上出席しなければ成績を評価せず
講義構成	・①(4/10) オリエンテーション「ソーシャルプロデュース論Ⅰ」とは？ 「ソーシャルメディア」とは？ ・②(4/10)～⑤(5/1) TVニュース(報道ステーション等)は何を伝えているのか？ 番組研究(4回予定) ・⑥(5/8)～⑨(5/25) 新聞ジャーナリズムの役割と現状《ソーシャルファクトを追って》(4回予定) ・⑩(6/5)～⑬(7/3) TVドキュメンタリーのソーシャルメッセージ性《作者と作品研究》(4回予定) ・⑭(7/10) ソーシャルメディア論まとめ ・⑮(7/17) 論述テスト(60分)
教科書	未定(授業開始時に紹介予定)
講義関連事項	坂本龍馬研究では、龍馬ミュージカル制作スタッフに実際に参加してもらう予定。

担当者から一言	メディア研究という入口から、日々起きているニュースを縦・横・斜めから分析/解説する。 これからの時代は社会と自分との関係を見つめ直しよりよい社会を創造するソーシャルプロデューサーの時代！ そうした能力を身に付け、自己の感性を磨きあげる技術としてこの授業はある！ 志のある学生諸君の参加を待つ！
---------	---

授業コード	13029		
授業科目名	思想文化論(思想文化論I) (前)		
担当者名	大津真作(オオツ シンサク)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	木曜2限

オフィスアワー	木曜日昼休み
講義の内容	人類の社会形成の哲学的前提と進化論的前提を学ぶ。ホッブズとスピノザ、およびモンテスキューの社会論について論じる。
到達目標	社会が必然的に発生することを理解する力がつく
講義方法	資料配布
準備学習	人類社会の考古学的学習をしておいてほしい
成績評価	レポートと試験
講義構成	1マキアヴェッリの『君主論』 2ホッブズの『リヴァイアサン』 3スピノザの『国家論』 4モンテスキューの『法の精神』
教科書	適宜指定する。教科書『倫理の大転換』(行路社)準備中です。
参考書・資料	マキアヴェッリ、ホッブズ、スピノザ、モンテスキュー等のテキスト
講義関連事項	試験では 1マキアヴェッリの『君主論』2ホッブズの『リヴァイアサン』3スピノザの『国家論』における基本命題が問題になります。彼らの近代的国家観を比較しながら勉強しておいてください。今までのプリントを持ってきてください。
担当者から一言	新しいものの見方を学んでください

授業コード	13030		
授業科目名	市民社会論(思想文化論II)(前)		
担当者名	大津真作(オオツ シンサク)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	金曜4限
オフィスアワー	金曜日昼休み		

講義の内容	現代社会の構造を財政・権力など多様な面から論じる。
到達目標	現代社会の特徴を理解する力がつく
講義方法	資料配布
準備学習	日本の政治システムを学習しておく
成績評価	レポートと試験
講義構成	1封建国家から近代市民国家への移行1 2封建国家から近代市民国家への移行2 原始蓄積 3租税とはなにか 4租税国家の成立 5財政の成立と役割 6社会成長論 7国家の生産論的意義 8国家の再生産論的意義 9社会保障 10労働の義務 11統治の仕組み 12 現代日本の統治機構 13国家の危機 14近代的国家間の諸相
教科書	神野直彦『財政とはなにか』岩波書店。教科書『倫理の大転換』(行路社)準備中です。
担当者から一言	新しいものの見方を学んでください

授業コード	13R21		
授業科目名	社会意識論(社会心理学II)(A)(前)		
担当者名	田野大輔(タノ ダイスケ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	木曜4限
特記事項	文学部(社会学科以外は2年次配当)		
オフィスアワー	火曜・水曜・木曜の昼休み、および木曜5限。必要な場合はメールで連絡すること。dtano@nifty.com		

講義の内容	一個人としては善良な人間でも、集団や組織の一員となると、ときとして残虐な行動に走ることがある。普通の人間をそうした行動に駆り立てるものは何か。そこにはどのような社会的メカニズムが作用しているのか。こうした問題を考えるため、本講義ではいくつかの事例を社会学的に読み解き、権力と暴力をめぐる社会的メカニズムを明らかにする。
到達目標	講義を通じて、普通の人間を非合理で暴力的な行動に駆り立てる社会的メカニズムを理解することが目標である。
講義方法	講義は毎回配布するプリントと、適宜紹介する映像や資料を中心に進める。映像・資料を用いながら、できるだけわかりやすく解説するが、かなり踏み込んだ内容を含んでいるので、積極的な受講態度が望まれる。
準備学習	必要に応じて指示する。
成績評価	期末テスト70点、小レポート30点とし、講義内容の理解度、および問題意識の深さを評価する。
講義構成	(1) イントロダクション (2)～(4) 監獄実験 (5)～(6) ミルグラム実験 (7)～(8) オフィスの大量虐殺者 (9)～(11) 独裁制の社会学 (12)～(13) 群衆の心理 (14)～(15) 自由からの逃走
教科書	使用しない。プリントを配布する。
参考書・資料	スタンレー・ミルグラム『服従の心理』(河出書房新社、2008年) エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』(東京創元社、1965年)

授業コード	13R22		
授業科目名	社会意識論(社会心理学II)(B)(後)		
担当者名	田摩裕祐(タナビキ ユウスケ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜2限
特記事項	他学部(2年次以上)		

講義の内容	社会意識論は、現代社会を生きる人びとの意識・態度・社会的性格を明らかにし、それらがどのようなメカニズムによって規定されているのかについての理解を目的とする学問分野です。社会の様々な領域におけるトピックをとりあげ、これまで行われてきた調査や研究を紹介しながら、幅広い理解をめざします。
到達目標	社会意識論における学術的知見を網羅的に理解し、社会構造・社会変動と人々の意識がどのように関連しているのかについて、論理的に説明する能力を得る。
講義方法	講義構成の項目にかがけたトピックについて講義を行います。教科書は特に指定せず、毎回レジュメを配布します。
準備学習	講義時間中に指示することがあります。
成績評価	原則として、期末試験の成績によって評価を行います。
講義構成	以下の各テーマについて、2～3回程度の講義を行います。 1: 社会意識論の目的・方法 2: 世論とマスメディア: 世論はどのように形成され、どのような力を持つのか。 3: 政治意識と政治文化: 人々の政治参加のかたちは、どのように変化してきたのか。

	4: 階層意識の形成: 社会構造と社会意識は、どのように結びつくのか。
教科書	特に指定しません。参考図書を講義時間中に紹介することがあります。

授業コード	13039		
授業科目名	社会階層論(階層・移動論) (後)		
担当者名	阿部真大(アベ マサヒロ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜2限
オフィスアワー	水曜日 昼休み		

講義の内容	「戦後日本と階層」 「階層」概念と「階級」概念の違い、戦後日本における階層変動と「一億総中流」の自明視、近年の格差をめぐる議論、インセンティブ・ディバイドの問題などを考える。その上で、みずからテーマを決定し、報告書を作成する。
到達目標	決められたテーマに沿って、自分で調べ、レポートにまとめる力を身につける。
講義方法	講義・実習方式
準備学習	格差をめぐる社会的な問題について、新聞やニュース等でチェックしておくこと。
成績評価	出席、参加態度、期末レポートから総合的に評価する。
講義構成	1-3 格差社会の問題 4-6 戦後日本の「中流」再考 7-9 テーマの設定と調査 10-12 報告書をまとめる 13-15 全体のまとめ
教科書	特定の教科書は使用しない。
参考書・資料	必要な文献をその都度指定する。
講義関連事項	講義の内容については進度に応じて若干の変更の可能性あり。
担当者から一言	講義形式+実習方式です。ただ聞いているだけでなく、自分ならばこの問題に対してどういった提言をするか、考えながら受講してください。その成果が期末レポートでは問われます。

授業コード	13N21		
授業科目名	社会学概論(現代社会学II) (A)(後)		
担当者名	野々山久也(ノノヤマ ヒサヤ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜2限
特記事項	文学部(社会学科以外は2年次担当)		
オフィスアワー	月・火(12:10~1:00)。そのほか必要があれば、電話078-435-2379やメール: nonoyama@konan-u.ac.jp などにて予約してください。随時応じます。		

講義の内容	<p>現代社会を理解するための基本的な社会学理論を学習していく。社会学を学んだ学生であれば、少なくとも知っているなければならない基礎知識を完全にマスターすることを目指していく。したがって、「現代社会」とは、どのような社会なのか、「現代社会学」とは、どのような学問なのかをしっかりと学習していく。</p> <p>社会学科に入学した以上、社会学とは何かを、完全にとはいかなくとも、ほぼマスターして卒業したいものである。マックス・ウェーバーとは、デュルケームとは、それぞれどのような学者なのか、タルコット・パーソンズとは、どのような社会学を展開したのか、さらにハバーマスやブルデューらは、その後、どのような理論を展開しているのかを、そして今日、それらの理論は、どのように位置づけられているのかなど、学ぶことは沢山あると言ってよい。納得いくまで、しっかりと追究してみたい。卒業時には、社会学士として自信をもって社会に出ていけるようにしたいものである。</p>
-------	---

到達目標	社会学の基礎知識を学習する。これから学ぶ社会学が何かを方向づける学習をしておく。社会学的志向とは何かを学習する。そして社会学における著名な学者の研究業績をマスターする。
講義方法	講義資料があるかないかを毎回、MY KONANで確認して、あればMY KONANから、講義資料をプリント・アウトして、予習してから授業に参加すること。手元に資料がないと、理解に限度があるはずである。プリントが貯まっていけば、それらはすべて各自の知識になっているということになる。なるべく双方向的な授業を行ないたい。積極的に発言してほしい。参加していて、面白い授業にしたいと思っている。
準備学習	日頃から新聞などを読んでおき、社会現象について関心を高めておく。1回生のうちに社会学と名うったタイトルの文献を必ず1冊は読破しておくこと。毎回、授業に出席する前に、MY KONANを確認して講義資料があれば、必ずプリント・アウトして予習をし、授業に持参すること。
成績評価	期末テスト(60分)を中心にして成績を評価する。期末テストは、授業内容を中心にした論述式のテストである。問題は、大きく2つに分かれていて、前半は、いくつかの小項目の説明を求める問題で、後半は、応用問題である。授業中に簡単なレポートを2～3回ほど課す予定にしている。授業中の私語は、減点の対象になる。
講義構成	オリエンテーション 第1章 親密性と公共性 第2章 相互行為と自己 第3章 社会的秩序と権力 第4章 組織とネットワーク 第5章 メディアとコミュニケーション 第6章 ジェンダーとセクシュアリティ 第7章 文化と再生産 第8章 格差と階層化 第9章 歴史と記憶 第10章 空間と場所 以上は、大体の流れであるが、社会状況の変化などによって、この順番で厳格に進行するとは限らない。進行状況については、授業出席を怠らずに各自に注意してフォロー・アップしてほしい。
教科書	特に指定した「教科書」はない。授業の進行状況に応じて、都度、参考文献を紹介していく。さまざまな文献を参考にしていきたいと思っている。毎日の新聞記事なども、大いに現代社会学的な学習資料になる。新聞には、毎日、目を通してほしい。
参考書・資料	参考資料など、ときには授業中にも配布するが、講義資料のある場合には、MY KONAN から各自にプリント・アウトして授業に出席すること。その他、参考文献などは、授業の進行状況に応じて、その都度、指示していく。授業を欠席すると、進行状況が分からなくなって、落第してしまう可能性がある。授業には欠席しないようにしてほしい。
担当者から一言	授業中の質疑応答を重視したい。質問や意見は、授業中どんどん出してくれることを期待している。双方向的な授業が出来れば、と望んでいる。
その他	今日の話題を材料にして双方向的な講義ができれば、と望んでいる。それには諸君の積極的な参加や発言が求められる。遠慮せずに、意見や考えていることを提示してほしい。

授業コード	13N22		
授業科目名	社会学概論(現代社会学II) (B)(後)		
担当者名	春日井典子(カスガイ ノリコ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜3限
特記事項	経済学部・経営学部(2年次担当)		

オフィスアワー	講義終了後
講義の内容	経済学などの社会科学より歴史の浅い社会学は、近代の成立に呼応して生まれ、近代から現代へという大きな歴史変動の流れのなかで発展してきた社会科学です。 授業では、社会学の歴史の中でこれまで受け継がれ、議論されてきた著名な命題を、社会学史の流れに沿いながら紹介します。
到達目標	社会学の命題を学習することで、「近代から現代へ」という社会変動を再考することを目標とします。 この授業が、社会学以外の社会科学を専攻する皆さんにとって、自分自身の専攻する社会科学を、多少とも新しい角度から見直す手がかりとして役立つことを願います。
講義方法	講義方式で行います。私語は厳禁。
準備学習	前期開講の社会人間学(現代社会学Ⅰ)(B)(前)を受講し、社会学の基本的な「ものの見方」を理解していることが望ましい。
成績評価	持ち込み不可の期末試験(100%)により評価する。
講義構成	以下の命題について講義する。 第1回 社会学学説史 第2回 犯罪の潜在的機能(E・デュルケイム) 第3回 人格崇拜の成立(E・デュルケイム) 第4回 プロテスタンティズムの倫理と資本主義 (M・ウェーバー) 第5回 外集団への敵対と内集団の親和(G・ジンメル) 第6回 自由からの逃走(E・フロム) 第7回 「いき」の構造(丸鬼周造) 第8回 高度産業社会と他人指向型(D・リースマン) 第9回 誇示的消費(T・B・ヴェブレン) 第10回 アイデンティティとモラトリアム (E・H・エリクソン) 第11回 女性の交換と近親婚の禁止(C・レヴィ=ストロース) 第12回 狂気の閉じ込めと監視(M・フーコー) 第13回 世界の複雑性と自己準拠システム(N・ルーマン) 第14回 まとめ 第15回 試験
教科書	作田啓一・井上俊編『命題コレクション 社会学』筑摩書房 1986
参考書・資料	作田啓一・井上俊編『命題コレクション 社会学』筑摩書房 1986のなかで、授業で取り上げる部分は印刷して配布する。その他、必要に応じて随時資料を配付する。

担当者から一言	毎年受講生の多い科目です。大教室での講義となることが予想されます。授業中の私語を厳禁します。
---------	--

授業コード	13N23		
授業科目名	社会学概論(現代社会学Ⅱ)(C)(後)		
担当者名	速水奈名子(ハヤミ ナナコ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜4限
特記事項	法学部(2年次配当)		

講義の内容	本講義の前半では、古典/現代社会学理論を紹介していく。具体的には、ウェーバー(近代化論)、デュルケム(道徳論)、パーソンズ(システム論)、ジンメル・G.H.ミード(相互行為論)、ゴッフマン(ドラマ論・フレーム論)、ブルデュー(場の理論)そしてリッツァー(マクドナルド化論)らによる理論を検討する。後半では、それらを踏まえつつ、現代社会における諸問題を分析していく。ここでは主に、価値の多様化が進んだポスト近代社会における、ジェンダー問題そして消費文化の浸透に関する問題に焦点を当てた考察を行ってみたい。
到達目標	社会学理論の基礎を身につけること、そして現代社会の諸現象をそれをもとに分析する視野を養うことが目指される。
講義方法	各テーマに沿って講義を行う。イメージを提示するために、DVDやプロジェクターを使用する場合もある。
準備学習	以下に記した参考書・資料に加えて、授業内では、それぞれの理論家の主要著書を紹介するので、それらも各

	自分で検討しておくこと。
成績評価	授業態度・小テスト(40%)、そして定期試験(60%)を通じて評価する。
講義構成	0. イントロダクション 1. 社会学とは何か 2. ウェーバー:近代化論 3. デュルケム: 道徳論 4. ジンメル・G.H.ミード: 相互行為論 5. パーソンズ: システム論 6. ゴッフマン: ドラマ論・フレーム論 7. ブルデュー: 構造化論 8. リッツァー: マクドナルド化論 9. 近代/ポスト近代 10. グローバリゼーション 11. 価値の多様性と現代社会 12. ジェンダーと現代社会 13. 消費文化と現代社会 14. まとめ
教科書	授業のたびにこちらで作成したレジュメを配布する。
参考書・資料	リッツァー・G、『古典社会学』(2000). 中野正大・宝月誠編、『シカゴ学派の社会学』(2003). 大野道邦・油井清光・竹中克久編、『身体社会学』(2005). ターナー・B. S.、『古典社会学』(1999).

担当者から一言	社会学理論を学ぶことを通じて、自らが生きる今を客観的に分析する視点を養いましょう。
---------	---

授業コード	13017		
授業科目名	社会人口論(社会人口論I) (前)		
担当者名	中里英樹(ナカザト ヒデキ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	金曜2限
オフィスアワー	金曜昼休み。火・水・金曜日のその他の時間も、メール等での予約を随時受け付けます。		

講義の内容	<p>人口学(人口論)という学問分野があります。人口、つまり人の数を扱うだけで一つの学問分野になるのだろうかという疑問に思われるかもしれませんが、人の数、特に年齢層ごとの人の数というのは社会にとって非常に重要な意味を持ちます。そのことは、「少子化」や「高齢化」が大きな社会問題として新聞やテレビで取りあげられていることからわかるでしょう。</p> <p>人口学の研究対象は人口の大きさや年齢構成だけではなく、ある地域における人口の大きさや年齢構成は、いくつかの要素が絡み合って決まります。最も直接的な要因である出生・死亡・移動、出生に大きな影響を与える結婚や、これらとすべてと密接な関わりを持つ家族(世帯)も、人口学が扱う中心的な対象となります。</p> <p>ところがこれらの人口現象は、相互に関連しあっており、さらに社会・文化・政治・経済など広い意味での社会現象とも密接に関連しています。たとえば、高齢化・少子化・晩婚化は、衛生・医療環境、産業構造、教育観、結婚・育児観の変化によってもたらされた結果であり、逆に年金制度や労働環境の変化をもたらす原因にもなっています。</p> <p>そこで、この講義は、人口現象を比較可能な形で捉えるための基礎的な指標(平均寿命・出生率・未婚率など)の算出方法を習得すると同時に、これらの人口現象相互、あるいは社会現象との関連について理論的・実証的に考察することを学びます。</p>
到達目標	人口現象を比較可能な形で捉えるための基礎的な指標(平均寿命・出生率・未婚率など)の算出方法を習得すると同時に、これらの人口現象相互、あるいは社会現象との関連について理論的・実証的に考察する力を身につけることを目的としています。
講義方法	1. 配布および提示資料(映像など)に基づく講義。 2. 指標の計算などの実習。 3. 理解状況を確認するための小レポートや小テスト。
準備学習	時間外の課題やテスト準備が求められます
成績評価	授業中の提出物(小テスト・小レポート)40%、最終レポート60%
講義構成	1. 社会人口論とは何か

	2.人口学の研究対象と社会人口論 3. 人口転換理論。 4. 出生率の様々な指標 5. 日本の人口転換(戦前) 6.日本の高齢化の原因 7. 日本の人口転換(戦後) 8. 少子化とその背景
教科書	必要に応じてプリントなどを配布する。
参考書・資料	阿藤 誠『現代人口学--少子高齢社会の基礎知識--』日本評論社、2000年、2700円 山口喜一編著『人口分析入門』古今書院、1997年 清水浩昭編著『日本人口論--高齢化と人口問題』日本放送出版協会、1998年 速水融『歴史人口学で見た日本』文春新書、2001年 鬼頭宏『人口で見る日本史』PHP研究所、2007年 河野稠果『人口学への招待--少子・高齢化はどこまで解明されたか』中公新書、2007年 山田昌弘『少子社会日本--もうひとつの格差のゆくえ』岩波新書、2007年
担当者から一言	毎回の授業が基本的な知識の積み重ねとなりますので、欠席しないように参加してください。指標の算出にはごく基本的な数学(算数)を使うだけです。テーマに関心さえあれば数学が苦手な人でも履修を歓迎します。
ホームページタイトル	MyKonan 講義関連ページ

授業コード	13053		
授業科目名	社会人口論II(後)		
担当者名	中里英樹(ナカザト ヒデキ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	金曜3限
オフィスアワー	金曜昼休み。火・水・金曜日のその他の時間も、メール等での予約を随時受け付けます。		

講義の内容	前半では、人口学の重要トピックのうち、高齢化、家族と世帯、結婚・離婚、移動を学びます。後半では、出生や死亡を含む幅広い人口現象について、異なる国々の間、国内のさまざまな地域の間での状況の違いとその背景について考察します。
到達目標	講義内容を理解し、自ら関心を持った地域の人口現象について適切な情報を入手できるようになること。入手した情報をもとに、分析・解釈を行いレポートを執筆できるようになる。
講義方法	以下の方法を併用しながら授業を進めます。 1. 配布およびプロジェクター提示資料(映像など)に基づく講義。 2. 図書館やインターネットを用いた資料収集。 3. 理解状況を確認するための小レポートや小テスト。
準備学習	最終レポートに必要なデータの収集、レポート執筆など多くの課外学習が必要となります。
成績評価	授業中の提出物(小テスト・小レポート)40%、期末試験またはレポート60%
講義構成	1. 高齢化 2. 家族と世帯の歴史的変容 3. 結婚と離婚 4. 社会変動と人口移動 5. 人口現象の地域性 6. 人口現象の地域性の背景 7. 最終レポート作成指導
教科書	必要に応じてプリントなどを配布する。
参考書・資料	阿藤 誠『現代人口学--少子高齢社会の基礎知識--』日本評論社、2000年、2700円 山口喜一編著『人口分析入門』古今書院、1997年 伊藤達也著『生活の中の人口学』古今書院、1994年 清水浩昭編著『日本人口論--高齢化と人口問題』日本放送出版協会、1998年 速水融『歴史人口学で見た日本』文春新書、2001年 鬼頭宏『人口で見る日本史』PHP研究所、2007年 河野稠果『人口学への招待--少子・高齢化はどこまで解明されたか』中公新書、2007年 山田昌弘『少子社会日本--もうひとつの格差のゆくえ』岩波新書、2007年

講義関連事項	社会人口論Iを先に履修することを推奨します。
担当者から一言	毎回の授業が基本的な知識の積み重ねとなりますので、欠席しないように参加してください。指標の算出にはごく基本的な数学(算数)を使うだけです。テーマに関心さえあれば数学が苦手な人でも履修を歓迎します。
ホームページタイトル	My KONAN授業情報参照

授業コード	13R11		
授業科目名	社会心理学(社会心理学I) (A)(前)		
担当者名	星 敦士(ホシ アツシ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	木曜3限
特記事項	文学部(社会学科以外は2年次担当)		
オフィスアワー	金曜日4限目。それ以外の時間はメールで予約してください。		

講義の内容	社会心理学では、個人が日常生活のなかで何気なく感じていることや考えていること、そして行動を、他者や社会との相互作用を通じて形成されるものと捉えます。この科目では、人々の心の動き、感じ方、考え方、そして振る舞いが社会心理学という枠組みのなかでどのように考えられているのか、またどのような説明ができるのかについて、人と人、人と組織、集団の心理、そして人と社会に関する様々な事例を手がかりに概説します。
到達目標	日常生活における人々の振るまいの背景と個人に還元できない要因について考えることができる。
講義方法	以下の講義構成のようにいくつかの大きなテーマについて、2～3回ずつ理論的な内容とともに実験や調査データなどを提示しながら講義を行います。各時間の最後に、その回の内容に関連したリアクション・ペーパーを記入してもらい、次の回の冒頭にその記入内容を紹介しながら振り返ります。
準備学習	予備知識は特に必要としません。概論なので内容は「広く浅く」になります。よって各論について深く知りたい人、すでに社会心理学についてある程度の知識をもっている人には向きません。
成績評価	平常点(各回の講義時に記入してもらったリアクション・ペーパーの内容)30%と期末試験(論述試験)70%により成績評価を行います。
講義構成	01 イントロダクション(社会学と社会心理学) 02 自己とは何か 03～05 対人関係に関する社会心理学 06～08 組織に関する社会心理学 09～11 集団に関する社会心理学 12～14 社会と個人の関わりに関する社会心理学 15 試験
教科書	使用しません
参考書・資料	池上知子・遠藤由美, 1998, 『グラフィック社会心理学』サイエンス社. 小林裕・飛田操[編著], 2000, 『教科書 社会心理学』北大路書房. 吉田俊和・松原敏浩[編著], 1999, 『社会心理学:個人と集団の理解』ナカニシヤ出版.

授業コード	13R12		
授業科目名	社会心理学(社会心理学I) (B)(前)		
担当者名	田藤裕祐(タナビキ ユウスケ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	月曜2限
特記事項	他学部(2年次以上)		

講義の内容	社会心理学は、社会的な場面における個人の認知、感情、動機づけ、社会的行動についての科学的な解明を目的とする学問です。他者との関係性、相互作用、組織・集団や社会の中での個人などに注目し、理論や学説などの幅広い理解をめざします。
到達目標	社会心理学における主要な学術的知見を網羅的に学び、自らが置かれている社会関係や生活場面に応用して理解することを目指す。

講義方法	講義構成の項目にかがけたトピックについて講義を行います。実際の調査や実験の事例も紹介していくつもりです。教科書は特に指定せず、毎回レジュメを配布します。
準備学習	講義時間中に指示することがあります。
成績評価	原則として、期末試験の成績のみによって評価を行います。
講義構成	以下の各テーマについて、2～3回程度の講義を行います。 受講者の希望によってテーマを変更・追加することもあります。 1: 自己と他者、自己概念 2: 対人コミュニケーション 3: 個人と集団、同調と逸脱 4: 組織と個人、動機付けやリーダーシップ 5: ネットワークとグループ・ダイナミクス 6: 社会システムや規範と社会心理学
教科書	指定の教科書はありません。講義時間中に参考図書を紹介することがあります。

授業コード	13031		
授業科目名	社会人類学(前)		
担当者名	西川麦子(ニシカワ ムギコ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜4限
オフィスアワー	火曜昼休み		

講義の内容	人類学は他者理解、文化の多様性から学ぶ学問であるといわれます。しかし、人類学は対象社会をつねに中立的な立場からとらえてきたわけではありません。近代人類学の確立は、植民地統治、国民国家の形成といった政治的背景における、力関係、思想の潮流と深くかかわっています。この講義では、19世紀から20世紀にかけて人類学が学問領域として成立していくなかで、どのように「他者」を認識、分類し、「異文化」をとらえようとしてきたか、フィールドワークの方法論や民族誌の政治性について検討しながら考えていきます。
到達目標	社会、文化人類学が誕生し展開する政治的背景を学ぶとともに、「調査」という行為やその問題点についても再考できるようになること。
講義方法	教室での講義形式
準備学習	「文化人類学」「多文化共生論」を履修し、文化人類学について学習したうえで社会人類学を履修すると理解しやすくなります。
成績評価	出席(40%)、試験(60%)
講義構成	1. オリエンテーション 2. 「未開」と「文明」の二分法—「未開」のイメージの両義性 3. 肘掛け椅子の人類学者—思想としての進化論 4. 専門的学問としての人類学の確立—フィールドワークと実証主義 5. B・マリノフスキーの方法論—参与観察のパラドックス 6. フィールドワークと民族誌の政治性—他者の分類、統治の技法 7. 国民国家の形成—優生思想と文化相対主義 8. ボアズとアメリカの文化人類学—優生思想への挑戦 9. M・ミードの『サモアの思春期』—反証としてのサモア 10. フィールドワーカーのポジショナリティ—民族誌的「事実」? 11. R・ベネディクトと『菊と刀』—国民性の研究 12. 人類学とエリア・スタディーズ 13. オリエンタリズム批判 14. 内省的アプローチ—文化的他者、自己への意識、対話と翻訳 15. まとめ
教科書	必要に応じて資料を配布する。
参考書・資料	資料配布

授業コード	13044		
授業科目名	社会調査応用演習II(前)		
担当者名	宮田尚子(ミヤタ ナオコ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜2限
特記事項	抽選40名(詳細は時間割別表を参照のこと)		

講義の内容	<p>量的な社会調査データにおける、基礎的な多変量解析の考え方について理解することを目指す。 サンプルデータに関する記述統計量から推測統計をおこなうが、その際、3変数以上の解析を対象とする。重回帰分析、分散分析、因子分析を中心とした基礎的な多変量解析法の理論を学ぶ。同時に、統計パッケージ(SPSS)を使って、実際の量的な社会調査データを分析しながら体験的に学習する。</p> <p>■前年度の内容 (今年度の授業で取りあげる具体的なトピックスは、受講生の意見を聞きながら決める予定である。)</p> <p>【例1】 重回帰分析という方法を使って、「年収は何によって差がつくのか?」という問題に取り組んだ。男女差はどれくらいあるのか、年齢が1歳違うと年収はどれくらい違うのか、雇用形態(正社員か非正規雇用か)の違いはどれくらい年収に影響するのか・・・ということについて考察した。</p> <p>【例2】 若いコーホート(世代)ほど平均結婚年齢が遅いこと。若いコーホートほど高学歴者が多いこと。高学歴者ほど学校卒業時の平均年齢が高く、就職時の平均年齢も高いこと。就職してから結婚する人が多いこと。これら4つの事実をデータで確認した上で、「晩婚化は若いコーホートで高学歴化していることが影響しているではないか?」という問いを立て、重回帰分析で検討した。</p>
到達目標	<p>(1)社会学における基礎的な多変量解析(重回帰分析、分散分析、因子分析)の考え方について理解できる。 (2)統計パッケージ(SPSS)を使って基礎的な多変量解析(重回帰分析、分散分析、因子分析)をおこなうことができる。 (3)計量分析の結果を実社会の現象と関係づけて考察できる。</p>
講義方法	<p>(1)講義 : 教科書や補助教材にのっとり、基礎的な多変量解析の理論について説明する。 (2)演習 : SPSSの操作方法について説明した後、実際にSPSSを用いて統計解析をおこなう。受講生には毎回、宿題を提出してもらい、次の授業時間に講評をおこなう。小レポートは添削して、受講生に返却する。</p>
準備学習	<p>(1)履修条件 : 「社会調査応用演習I」を同時履修している、あるいは履修済みであることが望ましい。しかし、この条件にあてはまらない学生も受講可。 (2)授業時間外における学習 : その日の授業内容の復習となるような小レポートを、毎回課す。小レポートは次の授業の開始時に提出。</p>
成績評価	<p>(1)平常点(出席回数、受講態度) : 15% (2)小レポート : 40% (3)学期末レポート : 45%</p>
講義構成	<p>第1回 はじめに 第2回 社会調査と多変量解析(1) 第3回 社会調査と多変量解析(2) 第4回 相関分析 第5回 分散分析(1) 第6回 分散分析(2) 第7回 単回帰分析 第8回 重回帰分析(1) 第9回 重回帰分析(2) 第10回 重回帰分析(3) 第11回 因子分析 第12回 多変量解析における検定の問題 第13回 社会調査データを読み解く(1) 第14回 社会調査データを読み解く(2) 第15回 まとめ</p>
教科書	- ポーンシュテット&ノーキ(=海野道郎・中村隆 監訳),『社会統計学』ハーベスト社 1990年

	<ul style="list-style-type: none"> - 片瀬一男(編),『社会統計学』放送大学教育振興会 2007年 - 盛山和夫,『社会調査法入門』有斐閣 2004年 - 与謝野有紀,『社会の見方, 測り方——計量社会学への招待』勁草書房 2006年 (初回の授業で、受講者と相談の上、中心的に扱う教科書を定める。)
参考書・資料	<p>(1)参考書：</p> <ul style="list-style-type: none"> - 村瀬洋一ほか(編),『SPSSによる多変量解析』オーム社 - 田栗正章ほか,『やさしい統計入門』講談社 - 玉野和志,『実践社会調査入門』世界思想社 - 山田剛史・村井潤一郎,『よくわかる心理統計』ミネルヴァ書房 (その他必要に応じて授業中に指示する。) <p>(2)補助資料：必要に応じてその都度、配布する。</p> <p>(3)スライド：授業後、PDF形式でMy KONANの授業用サイトにアップロードする予定。</p>
講義関連事項	<p>(1)データを保存できるメディア(USBメモリなど)を毎回持参してください。</p> <p>(2)社会調査士資格取得カリキュラムのE科目に相当します。</p>
担当者から一言	数字を使って、社会で起こっている現象と一緒に考えてみませんか。

授業コード	13A11		
授業科目名	社会調査基礎演習I(1クラス)(前)		
担当者名	中里英樹(ナカザト ヒデキ)、田野大輔(タノ ダイスケ)		
配当年次	1年次	単位数	4
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜3限 火曜4限
特記事項	2005年度以降入学生用 [出席番号指定]社会学科1年次(学籍番号が奇数) 社会学科2年次以上		
オフィスアワー	<p>中里: 金曜昼休み。火・水・金曜のその他の時間も、メール等での予約を随時受け付けます。nakazato@以下は皆さんの大学のアドレスと一緒にです。</p> <p>田野: 火・水・木曜の昼休み、および木曜5限。必要な場合はメールで連絡すること。dtano@nifty.com</p>		

講義の内容	社会学科1年次の最初の必須専門科目として、基礎演習Iでは、大学や授業についての多角的な情報を得て、創造的かつ実践的な大学生活を送るための取り組み方を考えます。
到達目標	この科目の到達目標は、社会学科において専門的な学習、研究をすすめていくうえでの基本的な知識と方法、情報の探し方、論文やレポートの読み方、書き方などを学ぶことです。
講義方法	この科目は、3限目と4限目を通して学習する演習です。パソコン教室において主に少人数のグループに分かれて各自の個別作業やグループ作業をしながら実習していきます。キャンパス内外をはじめ図書館や雑誌館、その他の各種センターに出かけて学習したりもします。2名の教員のほか複数のTA(ティーチング・アシスタント)がみなさんの学習のサポートをします。
準備学習	毎回、課題が出されますので、各自が事前にレポートを作成する必要があります。
成績評価	毎回、出席をとります。出席点を重視しますので、欠席はできません。毎回、課題が出され、これにもとづいてグループワークをしたり、各自がレポートを作成します。最終成績は、出席点とレポート等の総合点で評価されます。
講義構成	<p>I 学習を組み立てる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会学科のカリキュラム — 4年間の学習の組み立て、各学年のスケジュール ・ 「シラバス」を解説する — 「講義」「演習」「ゼミナール」 ・ 学習成果と評価 — 「出席」「試験」「レポート」「論文」 ・ 時間割を組み立てる — 甲南大学 Web Site 活用法 <p>II 学びの窓口を利用する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学部と学科 — 文学部、各学科事務室、研究室、社会調査工房とは？ ・ 窓口相談する — 担当窓口や各種センターを活用する ・ 在学中に「資格」をとる—社会調査士、etc. <p>III 研究と論文の基本を学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「卒業論文」とは？ — 先輩の論文にふれる ・ 研究のテーマ、方法、表現のしかた ・ 情報検索 — アイディアを探す、情報を集める ・ 図書館、サイバーライブラリー、雑誌館などで探索する ・ 文献リストを作る ・ 論文を読む — 構成を把握する ・ 課題レポートを書く — 目的と書式

教科書	教科書は、特に指定しません。
参考書・資料	参考書・資料は、必要に応じて指示します。
担当者から一言	この科目は、社会学科において皆さんが何を、どのように学習していくのかをしっかりと理解して、有意義な大学生活を送ることができるようにするための科目です。そして最終的に「卒業研究」を作成して「社会学士」という学位を取得して卒業するまでに、皆さんがどのように研究活動をすすめていくのかを学ぶ基礎科目です。しっかりと学習してほしいと思います
その他	出席は必須です。毎回、出席を取ります。絶対に遅刻も、欠席もしないようにしてください。

授業コード	13A12		
授業科目名	社会調査基礎演習I (2クラス)(前)		
担当者名	大津真作(オオツ シンサク)、阿部真大(アベ マサヒロ)		
配当年次	1年次	単位数	4
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜3限 火曜4限
特記事項	2005年度以降入学生用 [出席番号指定]社会学科1年次(学籍番号が偶数)		
オフィスアワー	大津・阿部: 火曜の昼休み。予約を随時受け付けます		

講義の内容	社会学科1年次の最初の必須専門科目として、基礎演習 I では、大学や授業についての多角的な情報を得て、創造的かつ実践的な大学生活を送るための取り組み方を考えます。
到達目標	この科目の到達目標は、社会学科において専門的な学習、研究をすすめていくうえでの基本的な知識と方法、情報の探し方、論文やレポートの読み方、書き方などを学ぶことです。
講義方法	この科目は、3限目と4限目を通して学習する演習です。パソコン教室において主に少人数のグループに分かれて各自の個別作業やグループ作業をしながら実習していきます。キャンパス内外をはじめ図書館や雑誌館、その他の各種センターに出かけて学習したりもします。2名の教員のほか複数のTA(ティーチング・アシスタント)がみなさんの学習のサポートをします。
準備学習	毎回、課題が出されますので、各自が事前にレポートを作成する必要があります。
成績評価	毎回、出席をとります。出席点を重視しますので、欠席はできません。毎回、課題が出され、これにもとづいてグループワークをしたり、各自がレポートを作成します。最終成績は、出席点とレポート等の総合点で評価されます。
講義構成	<p>I 学習を組み立てる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会学科のカリキュラム - 4年間の学習の組み立て、各学年のスケジュール ・ 「シラバス」を解読する - 「講義」「演習」「ゼミナール」 ・ 学習成果と評価 - 「出席」「試験」「レポート」「論文」 ・ 時間割を組み立てる - 甲南大学 Web Site 活用法 <p>II 学びの窓口を利用する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学部と学科 - 文学部、各学科事務室、研究室、社会調査工房とは？ ・ 窓口相談する - 担当窓口や各種センターを活用する ・ 在学中に「資格」をとる—社会調査士、etc. <p>III 研究と論文の基本を学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「卒業論文」とは？ - 先輩の論文にふれる ・ 研究のテーマ、方法、表現のしかた ・ 情報検索 - アイディアを探す、情報を集める ・ 図書館、サイバーライブラリー、雑誌館などで探索する ・ 文献リストを作る ・ 論文を読む - 構成を把握する ・ 課題レポートを書く - 目的と書式
教科書	教科書は、特に指定しません。
参考書・資料	参考書・資料は、必要に応じて指示します。

担当者から一言	この科目は、社会学科において皆さんが何を、どのように学習していくのかをしっかりと理解して、有意義な大学生活を送ることができるようにするための科目です。そして最終的に「卒業研究」を作成して「社会学士」という学位を取得して卒業するまでに、皆さんがどのように研究活動をすすめていくのかを学ぶ基礎科目です。しっかりと学習してほしいと思います
その他	出席は必須です。毎回、出席を取ります。絶対に遅刻も、欠席もしないようにしてください。

授業コード	13A21		
授業科目名	社会調査基礎演習II(1クラス)(後)		
担当者名	森田三郎(モリタ サブロウ)、宮田尚子(ミヤタ ナオコ)		
配当年次	1年次	単位数	4
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜3限 火曜4限
特記事項	2005年度以降入学生用 [出席番号指定]社会学科1年次(学籍番号が奇数) 社会学科2年次以上		
オフィスアワー	演習の時間は長いので、その間に教員やTAに遠慮なく相談して下さい。		

講義の内容	社会学や人類学研究に必要な方法・技術である量的および質的社会調査を用い報告書や論文を収集し内容を理解するための基礎知識を学びます。また、その実施方法を具体的に学び、小規模の調査を自ら実施することによって、実際に調査を行なう際の基本的な工程を体験的に理解することを目指します。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・社会調査によって小規模なデータの収集、分析、考察ができる。 ・官庁統計や簡単な調査報告書・質的調査論文を批判的に読める。 ・エクセルや統計パッケージ(SPSS)を使った基本的なデータ処理とプレゼンができる。
講義方法	社会調査演習はパソコン教室と一般教室などでおこなわれるので、各回の演習がどこで行われるのか注意すること。毎回の実習作業に関しては、教員が説明した後、受講生のなすべき作業を教員とTAがサポートします。わからない点はその場で積極的に質問してください。また、作業は個人だけでなくグループでおこなう場合もあるので、必ず毎回出席するようにしてください。
準備学習	テレビや新聞・雑誌、インターネットで見かける「○○に関するアンケート」が、いつ、だれに対して、どのような方法でおこなわれ、どのような結果が示されているのかを注意して見るようにしてください。また日常生活の中でも、自分が目にするもの、人の行動など、身近な周囲に対して、なぜ？という意識を持って観察することを心がけて下さい。
成績評価	毎回の出席を前提とし、各自で作成した調査レポートの提出状況、出来具合が評価の中心となります。
講義構成	<ol style="list-style-type: none"> 1 統計情報の収集と整理 2 統計情報の読み方(1) 記述統計(平均・分散・標準偏差) 3 統計情報の読み方(2) 記述統計(クロス集計表) 4 統計情報の読み方(3) 因果関係と相関関係 5 アンケート法(1) アンケート法とは何か? —— 定量調査の基礎 6 アンケート法(2) アンケート法における仮説と検証の考え方 7 アンケート法(3) 調査項目の検討 8 アンケート法(4) 調査票の作成 —— ワーディングについて 9 アンケート法(5) サンプリングとは? 10 アンケート法(6) 対象者の選定とサンプリングの実習 11 アンケート法(7) 調査の実施(調査票の配布・回収) 12 アンケート法(8) データ入力とエディティング 13 アンケート法(9) 記述統計の算出と解釈1(平均・分散・標準偏差) 14 アンケート法(10) 記述統計の算出と解釈2(クロス集計) 15 アンケート法(11) 記述統計の算出と解釈3(クロス集計(続)) 16 質的調査法(1) 質的調査の基礎 17 質的調査法(2) 質的調査論文の読み方1 18 質的調査法(3) 質的調査論文の読み方2 19 質的調査法(4) 質的調査の実践1 20 質的調査法(5) 質的調査の実践2 21 質的調査法(6) 質的調査の実践3 22 質的調査法(7) 質的調査の実践4 23 質的調査法(8) 質的調査の実践5 24 質的調査法(9) 質的調査の実践6 25 質的調査法(10) 質的調査の実践7 26 質的調査法(11) 質的調査の実践8 27 質的調査法(12) 質的調査の実践9 28 質的調査法(13) 質的調査の実践10 29 質的調査法(14) 質的調査のまとめ方1 30 質的調査法(15) 質的調査のまとめ方2
教科書	教科書は特に指定しません。
参考書・資料	必要に応じて適宜指示します。また、甲南大学文学部社会学科で作成した「社会調査工房オンライン」を参照

	します。さらに、必要な資料については、甲南大学内でのイントラネットを通して、教員が作成したWEBサイトから閲覧、ダウンロード出来るものもあります。
講義関連事項	「社会調査法」を併せて履修すると社会調査やフィールドワークへの理解がより深まります。また「フィールドワーク研究」(2年時担当)、「社会統計学」(2年時担当)、「量的データ解析」(3年次担当)、「社会調査実践研究」(3年次担当)を順次履修すれば、社会調査と技法への理解がますますすすみます。
担当者から一言	この演習は、前・後期を通して社会学科の必修科目です。また、卒業研究の基礎であり、「社会調査士」資格の取得にも必須の内容です。作業はかなり大変ですが、ひととおりの調査法を1年生で学ぶことは貴重な経験となるはずで、1年間で学んだ経験と技術を持って2年生からのゼミに臨みましょう。
その他	質的調査として、ここでは「観察法」を取り上げます。詳しいスケジュールは、下記のWEBページを参照してください。(ただし、学内でしか見えません) http://www.center.konan-u.ac.jp/~saburo/kisoen10/kisoen210.htm
ホームページタイトル	社会調査工房オンライン
URL	http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/index.html

授業コード	13A22		
授業科目名	社会調査基礎演習II(2クラス)(後)		
担当者名	菅 康弘(スガ ヤスヒロ)、高木昌要(タカキ マサメ)		
配当年次	1年次	単位数	4
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜3限 火曜4限
特記事項	2005年度以降入学生用 [出席番号指定]社会学科1年次(学籍番号が偶数)		
オフィスアワー	菅:「 sugar@center.konan-u.ac.jp 」に連絡の上、時間応談。		

講義の内容	社会学や人類学研究に必要な方法・技術である量的および質的社会調査を用い報告書や論文を収集し内容を理解するための基礎知識を学ぶ。また、その実施方法を学び、小規模の調査を自ら実施することによって、実際に調査を行なう際の基本的な行程を体験的に理解することを目指す。
到達目標	量的・質的調査の基礎的な知識を習得し、基本的な技法を身につけること。特に、数字にごまかされがちなデータの読み方や、社会調査の王道であるアンケートの技法や概念の習得、街頭における考現学的調査でのデータ収集法、分析法の習得など。
講義方法	講義＋演習＋実習。 実習では主に少人数のグループに分かれ、データ収集の基本的な方法、調査の企画・設計、実施に至る一連のプロセスを、講義と実践で習得する。一般教室とパソコン教室、図書館およびキャンパス内外が活動の場となり、複数の教員・TAのチームがサポートする。
準備学習	各回の課題を先に提示しておくので、それに応じたテーマ選択や調査項目の選定、具体的なプランなどを明確にしておくこと。課題や資料などは「My Konan」にアップされるので、自宅でも大学でも常にチェックを怠りなく。
成績評価	平常点＋提出物(論文・レポートなど。2つのクールの大課題＋各回の小課題)＋出席回数
講義構成	1 統計情報の収集と整理 官庁統計や調査報告書、データベースの検索と利用 2 統計情報の読み方(1) 記述統計(平均・分散・標準偏差) 3 統計情報の読み方(2) 記述統計(クロス集計) 4 統計情報の読み方(3) 因果関係と相関関係 5 アンケート法(1) アンケート法とは何か? 一定量調査の基礎 6 アンケート法(2) アンケート法における仮説と検証の考え方 7 アンケート法(3) 調査項目の検討 8 アンケート法(4) 調査票の作成 ワーディングについて 9 アンケート法(5) サンプリングとは? 10 アンケート法(6) 対象者の選定とサンプリングの実習 11 アンケート法(7) 調査の実施(調査票の配布・回収) 12 アンケート法(8) データ入力とエディティング 13 アンケート法(9) 記述統計の算出と解釈1(平均・分散・標準偏差) 14 アンケート法(10) 記述統計の算出と解釈2(クロス集計) 15 アンケート法(11) 記述統計の算出と解釈3(クロス集計(続)) 16 質的調査法(1) 質的調査の基礎 17 質的調査法(2) 質的調査論文の読み方1 18 質的調査法(3) 質的調査論文の読み方2 19 質的調査法(4) 質的調査の実践1

	20 質的調査法(5) 質的調査の実践2 21 質的調査法(6) 質的調査の実践3 22 質的調査法(7) 質的調査の実践4 23 質的調査法(8) 質的調査の実践5 24 質的調査法(9) 質的調査の実践6 25 質的調査法(10) 質的調査の実践7 26 質的調査法(11) 質的調査の実践8 27 質的調査法(12) 質的調査の実践9 28 質的調査法(13) 質的調査の実践10 29 質的調査法(14) 質的調査のまとめ方1 30 質的調査法(15) 質的調査のまとめ方2
教科書	使用しない。ただし、甲南大学HPトップ→研究所・センター→情報教育研究センター→Contents→文学と辿り、その中にある「社会調査工房オンライン」を随時参照すること。
参考書・資料	参考資料やサンプル・データを授業中に随時配布する。
講義関連事項	「社会調査法」を併せて履修すると社会調査やフィールドワークへの理解がより深まります。また「フィールドワーク研究」(2年時配当)、「社会統計学」(2年時配当)、「量的データ解析」(3年次配当)、「社会調査実践研究」(3年次配当)を順次履修すれば、社会調査マインドが深化します。
担当者から一言	この演習は、前・後期通して社会学科の必修科目です。また、卒業研究の基礎であり、「社会調査士」資格の取得にも必須の内容です。
その他	毎時間、グループで、あるいは個人で取り組む課題があります。やむなく欠席した時は、必ずその時に出された指示を確認することをお忘れなく。 口コミに頼らず、常に「My Konan」をチェックすること。
ホームページタイトル	「社会調査工房オンライン」 http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/index.html

授業コード	13015		
授業科目名	社会調査法(前)		
担当者名	野々山久也(ノノヤマ ヒサヤ)		
配当年次	学部学科により異なる	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	月曜2限
オフィスアワー	月・火(12:10~1:00)。そのほか必要があれば、電話078-435-2379やメール: nonoyama@konan-u.ac.jpなどにて予約してください。		

講義の内容	社会調査の実施方法を概観し、その意義と実施に当たって注意すべきことを学ぶ。問題意識と社会調査のさまざまな手法をどのように結びつけるかについて、考えられるようになることを目指す。
到達目標	この科目は、社会調査士の資格取得のための必須科目である。到達目標は、資格取得のために不可欠な社会調査の基礎知識、社会調査実施に不可欠な倫理や調査実施のさまざまな技法について学習する。
講義方法	講義と授業内外の課題(レポート作成などの作業)を組み合わせて進める。
準備学習	講義資料などに関して指示にしたがって、前もって予習しておくこと。さらに社会学に関する基礎的な授業を同時に履修すること。加えて、日頃から新聞や雑誌に掲載されている多様な社会調査のデータに注目しておくこと。
成績評価	講義での課題(レポート)の提出状況を50%、そして最終的な学期末試験の成績を50%という配分で、各自の成績を評価をする。
講義構成	1 社会調査とは何か-- 社会調査の意義・用途 2 社会調査成立の背景-- 社会調査の歴史 3 メディアの中の社会調査-- 社会調査の実例(1) 4 調査報告を読む-- 社会調査の実例(2)量的調査 5 調査報告を読む-- 社会調査の実例(3)質的調査 6 問題の発見と先行研究の整理-- 社会調査の準備 7 さまざまな社会調査と手法の選択-- 社会調査の種類 8 質問紙調査の準備-- 量的調査(1) 9 質問紙調査の実施と分析-- 量的調査(2) 10 質問紙調査のまとめ方-- 量的調査(3) 11 フィールドワークの進め方-- 質的調査(1) 12 フィールドワークのまとめ方-- 質的調査(2) 13 調査実施の注意点-- 調査倫理

	14 調査から理論へ 15 まとめ
教科書	特定の教科書は使用しないが、参考文献は適宜、紹介していく。
参考書・資料	B. C. ミラー著(野々山久也ほか訳)『やさしい家族調査の方法』ミネルヴァ書房、1996年 大谷信介他編著『社会調査へのアプローチ(第2版)』ミネルヴァ書房、2005年など
講義関連事項	社会調査士資格取得のための必修科目
その他	My KONAN のクラスプロフィールの授業資料をつねに確認しておくこと。
ホームページタイトル	My KONANの講義関連情報より 社会調査工房オンライン(社会学科共通の調査関連ホームページ)

授業コード	13049		
授業科目名	社会調査法I(後)		
担当者名	岩淵亜希子(イワブチ アキコ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜2限
オフィスアワー	非常勤教員のため、オフィスアワーはありません。講義の前後につかまえてください。		

講義の内容	<p>いわゆるアンケート調査のことを、専門用語では「質問紙調査」とか「調査票調査」とかといいます。学校での進路希望調査や、5年ごとに政府が行なう国勢調査、コンサートやライブでの感想アンケートなど、誰でも1度は、このタイプの調査に答えたことがあるはずです。</p> <p>では、そうした調査は、どのように作られて(仕組まれて)いるのでしょうか？ そうした調査から、たとえばどんなことがわかるのでしょうか？ この講義では、社会調査を計画し、実際に調査を行ってデータを集め、分析に至るまでの一連の流れについて、具体例をあげながら解説します。ちょっと難しいとは思いますが、こんな調査をしたいなら、どんなしかけが必要か、ということと一緒に考えてみませんか。</p> <p>なお、社会調査士資格関連科目ですが、資格を目指していない人でも、調査に関心のある方ならどなたでも歓迎します。</p>
到達目標	質問紙調査の難しさ(と、できれば面白さも)がどこにあるのかを知り、知りたいことをとらえるための手続きを理解すること。またそれによって、アヤシゲな調査や分析結果に反応できるアンテナを磨くこと。
講義方法	講義とコメントカード・練習問題を基本に考えていますが、履修人数が少なければ、「やってみることを増やしたい」と思います。調査がどんなものかを知るには、実際やってみるのが一番です。
準備学習	他の社会調査関連の講義・演習も履修してあると、たくさん出てくる専門用語の「聞いたことある」感が高まってとっつきやすいと思います。が、必須ではありません。 テレビやネットや雑誌や飲食店の、「アンケートっぽいもの」を日ごろ気しておくこと、講義中に「あーアレそうかも！」とひらめく瞬間があつて楽しいかもしれません。が、必須ではありません。
成績評価	定期試験70%、平常点(講義のコメントカードや練習問題)30%を予定。 履修人数が少ない場合は、平常点の割合を増やすかもしれません。その場合は教室で説明します。
講義構成	<ol style="list-style-type: none"> 1 イントロダクション: 社会調査とは? 2 社会調査の種類: 量的調査と質的調査 3 質問紙調査の思想と、調査プロセス 4 調査を企画する: テーマ、仮説、方法 5 調査票の作り方(1) 問題意識の具体化と仮説の設定 6 調査表の作り方(2) 質問と選択肢のワーディングを決める 7 調査表の作り方(3) 質問項目の選定と、調査票の組み立て 8 既存の研究・調査・データの探索と、その重要性 9 調査の実施方法(1) 全数調査・標本調査とサンプリング 10 調査の実施方法(2) 無作為抽出とサンプリングの実際 11 調査の実施方法(3) 調査票の配布・回収の方法と、その特徴 12 調査票の整理とデータ化: エディティング・コーディング・クリーニング 13 データの集計と分析法: 単純集計とクロス集計 14 集計結果の検定: カイ2乗検定と相関係数 15 まとめ: 調査の報告と社会調査のこれから
教科書	とくに指定しません

参考書・資料	講義のなかで紹介します
講義関連事項	社会調査士資格の取得に関連した科目です。資格を目指している人はよくご確認ください。
担当者から一言	調査というのは、基本的に地味～で面倒なものです。なので、講義も地味～でコツコツ系です。華やかさとかありません。登山とか楽しめる人は向いてると思います。そんな講義ですが、よろしく。

授業コード	13V11		
授業科目名	社会統計学(社会調査応用演習I) (1クラス)(前)		
担当者名	星 敦士(ホシ アツシ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	金曜3限
特記事項	<p>クラス分けのための履修希望調査を行うので、履修を希望する学生は以下の方法で調査期間内に申し込んでください。</p> <p>調査期間: 2010年3月29日(月)～4月2日(金)</p> <p>申込方法: 社会学科共同図書室前のボックスに入っている履修希望調査用紙に必要事項を記入して指定されたボックスに入れる。</p> <p>結果発表: 4月5日(月)「My KONAN」の学生連絡にて発表</p> <p>注意事項: 期間内に申し込まなかった場合は今年度の社会統計学(社会調査応用演習 I)は履修できません。</p>		
オフィスアワー	金曜日4限目。それ以外の時間はメールで予約してください。		

講義の内容	社会調査によって得られたデータの客観性を裏付ける確率論の基礎、データの状態を記述する基本統計量、統計的検定の基本的な考え方、推測統計において使用される基本的な分析手法(比率や平均の差の検定、カイ二乗検定、相関係数、単回帰分析など)について演習を行います。
到達目標	社会調査によって収集した統計的データを集計、分析、解釈するために必要となる基礎的な統計学的知識を理解する。
講義方法	各回の内容について解説した後、練習問題を解くなどの演習を行います。
準備学習	確率・統計など数学の基礎知識が必要になることもあります。また分からないことがある時はMy KONANに資料を登録するのでそれらを参考に復習してください。
成績評価	各回の課題提出40%、期末試験60%により成績評価を行う。演習科目なので2/3以上の課題提出を成績評価の前提とする。
講義構成	01 社会調査と統計学 02 母集団と標本 03 基本統計量1: 代表値 04 基本統計量2: 変動の記述 05 確率と確率分布 06 正規分布 07 点推計と区間推計 08 統計的検定の考え方 09 仮説の検定 10 平均の差の検定(t検定) 11 カイ二乗検定 12 離散変数間の連関 13 相関係数・偏相関係数 14 単回帰分析 15 試験
教科書	使用しません。
参考書・資料	Bohrnstedt George W. and David Knoke, 1988, Statistics for Social Data Analysis 2nd. edition, F.E. Peacock Publisher, Inc. (=1992, 海野道郎・中村隆監訳『社会統計学: 社会調査のためのデータ分析入門』(学生版), ハーベスト社.) 向後千春・富永敦子, 2007, 『統計学がわかる: ハンバーガーショップでむりなく学ぶ、やさしく楽しい統計学』技術評論社. 盛山和夫・近藤博之・岩永雅也, 1992, 『社会調査法』放送大学教育振興会. 盛山和夫, 2004, 『社会調査法入門』有斐閣. 鳥居泰彦, 1994, 『はじめての統計学』日本経済新聞社. など

講義関連事項	この授業は社会調査士資格科目のうちD科目(社会調査に必要な統計学に関する科目(推測統計))に該当しません。
その他	授業には電卓を持参してください。
ホームページタイトル	社会調査工房オンライン(「1.アンケート法」の「1-4.データの分析」を参照)
URL	http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/index.html

授業コード	13V12		
授業科目名	社会統計学(社会調査応用演習I)(2クラス)(後)		
担当者名	阿部真大(アベ マサヒロ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜3限
特記事項	<p>クラス分けのための履修希望調査を行うので、履修を希望する学生は以下の方法で調査期間内に申し込んでください。</p> <p>調査期間:2010年3月29日(月)~4月2日(金)</p> <p>申込方法:社会学科共同図書室前のボックスに入っている履修希望調査用紙に必要事項を記入して指定されたボックスに入れる。</p> <p>結果発表:4月6日(月)「My KONAN」の学生連絡にて発表</p> <p>注意事項:期間内に申し込まなかった場合は今年度の社会統計学(社会調査応用演習I)は履修できません。</p>		
オフィスアワー	水曜日 昼休み		

講義の内容	具体的な内容としては、社会調査によって得られたデータの客観性を裏付ける確率論の基礎、データの状態を記述する基本統計量、統計的検定の基本的な考え方、推測統計において使用される基本的な分析手法(比率や平均の差の検定、カイ二乗検定、相関係数、偏相関係数、単回帰分析など)が含まれる。
到達目標	統計的データを集計・分析するために必要となる基礎的な統計学的知識を理解することを目的とする。
講義方法	講義方式
準備学習	様々なテーマの政府統計について、新聞やニュース等でチェックしておくこと。
成績評価	出席、参加態度、期末試験から総合的に評価する。
講義構成	01 社会調査と統計学 02 母集団と標本 03 基本統計量1:代表値 04 基本統計量2:変動の記述 05 確率と確率分布 06 正規分布 07 点推計と区間推計 08 統計的検定の考え方 09 仮説の検定 10 平均の差の検定(t検定) 11 カイ二乗検定 12 離散変数間の連関 13 相関係数 14 偏相関係数 15 単回帰分析
教科書	特定の教科書は使用しない。
参考書・資料	Bohrstedt George W. and David Knoke, 1988, Statistics for Social Data Analysis 2nd. edition, F.E. Peacock Publisher, Inc.(=1992, 海野道郎・中村隆監訳『社会統計学:社会調査のためのデータ分析入門』(学生版),ハーベスト社.) 向後千春・富永敦子, 2007, 『統計学がわかる:ハンバーガーショップでむりなく学ぶ、やさしく楽しい統計学』技術評論社. 盛山和夫・近藤博之・岩永雅也, 1992, 『社会調査法』放送大学教育振興会.

	盛山和夫, 2004, 『社会調査法入門』有斐閣. 鳥居泰彦, 1994, 『はじめての統計学』日本経済新聞社. など
講義関連事項	講義の内容については進度に応じて若干の変更の可能性あり。
担当者から一言	社会調査士資格のための必修科目であるため、社会調査士資格を目指す学生は、この履修が必要となります。

授業コード	13V13		
授業科目名	社会統計学(社会調査応用演習I) (3クラス)(前)		
担当者名	平松 闊(ヒラマツ ヒロシ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	<p>クラス分けのための履修希望調査を行うので、履修を希望する学生は以下の方法で調査期間内に申し込んでください。</p> <p>調査期間: 2010年3月29日(月)～4月2日(金)</p> <p>申込方法: 社会学科共同図書室前のボックスに入っている履修希望調査用紙に必要事項を記入して指定されたボックスに入れる。</p> <p>結果発表: 4月7日(月)「My KONAN」の学生連絡にて発表</p> <p>注意事項: 期間内に申し込まなかった場合は今年度の社会統計学(社会調査応用演習 I)は履修できません。</p>		
講義の内容	統計的データを集計・分析するために必要となる基礎的な統計学的知識を理解することを目的とする。具体的な内容としては、社会調査によって得られたデータの客観性を裏付ける確率論の基礎、データの状態を記述する基本統計量、統計的検定の基本的な考え方、推測統計において使用される基本的な分析手法(比率や平均の差の検定、カイニ乗検定、相関係数、偏相関係数、単回帰分析など)が含まれる。		
到達目標	この授業は、社会調査のための「統計学基礎」の講義・演習であり、確率の基本、基本統計量の計算、統計的検定の基本、さらには、推測統計のための分析の基礎をしっかりと身につける必要がある。そのためには、各回ごとの練習問題をしっかりとこなし、さらには最終回に行われる一定の理解力を測定する「試験」でそのことを証明しなければならない。 さらにこの授業は、「社会調査士」(社会調査士協会)の資格取得のための「必修」の科目である。		
講義方法	講義だけではなく演習的な内容を含むので、ほとんどの回において受講者には例題や練習問題を解くことを課す。		
準備学習	統計学の基礎の科目であるから、基礎的な「数学」についての理解が必要である。それを身につけていない学生には、そのための準備学習が必要である。もちろん、そのための指示、練習問題、解答などで導入学習は初期段階でおこなう。 練習問題は基本的には時間内で行うが、不十分な場合には時間以外での学習を必要とするため、そのための「課題」をだすことがある。		
成績評価	各回の演習内容(例題・練習問題)の提出、出席、期末試験を総合して成績評価を行う。演習は出席して作業を行うことが義務なので、3分の1以上の欠席の場合は、単位が認められない。		
講義構成	01 社会調査と統計学 02 母集団と標本 03 基本統計量1: 代表値 04 基本統計量2: 変動の記述 05 確率と確率分布 06 正規分布 07 点推計と区間推計 08 統計的検定の考え方 09 仮説の検定 10 平均の差の検定(t検定) 11 カイニ乗検定 12 離散変数間の連関 13 相関係数 14 偏相関係数 15 単回帰分析		
教科書	基本的には教科書は使わない。資料配布・講義資料を基本として講義をすすめる。		
参考書・資料	Bohrstedt George W. and David Knoke, 1988, Statistics for Social Data Analysis 2nd. edition, F.E. Peacock		

	<p>Publisher, Inc. (=1992, 海野道郎・中村隆監訳『社会統計学:社会調査のためのデータ分析入門』(学生版), ハーベスト社.)</p> <p>向後千春・富永敦子, 2007, 『統計学がわかる:ハンバーガーショップでむりなく学ぶ、やさしく楽しい統計学』技術評論社.</p> <p>盛山和夫・近藤博之・岩永雅也, 1992, 『社会調査法』放送大学教育振興会.</p> <p>盛山和夫, 2004, 『社会調査法入門』有斐閣.</p> <p>鳥居泰彦, 1994, 『はじめての統計学』日本経済新聞社.</p> <p>上記等を参考書とするが、基本的には、資料配布や講義資料(MY KONAN)を中心に行う。</p>
--	--

担当者から一言	社会調査士のための必修科目であるため、しっかり基本を身につけることが肝要。出席するのが基本。
---------	--

授業コード	13N11		
授業科目名	社会人間学(現代社会学I) (A)(前)		
担当者名	菅 康弘(スガ ヤスヒロ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	金曜3限
特記事項	文学部(社会学科以外は2年次配当)		
オフィスアワー	「sugar@center.konan-u.ac.jp」に連絡の上、時間応談。		

講義の内容	<p>・講義テーマ 文化の呪縛と文化の生成—現代社会における人間と関係性</p> <p>・講義概要 人間を語ることは社会を語ることである。社会を考察することは人間を考察することである。ちなみに「社会を構成する最小単位とは？」と問われたとき、多くは「個人」と答えるだろう。しかしこの回答は物理学モデルに影響されたものである。社会の最小単位とは「関係」である。そして社会における様々な関係性は現代という時の文化の影響下にある。と同時に、関係性のあり方が新たな文化を生成する。 本講義では、社会における「関係」と「文化」との相互作用を、主として言説・交換・欲求・規範の側面から考察し、今日の社会人間学的基盤の一端を明らかにすることを目的とする。</p>
到達目標	社会的規範とは分析対象とするものであって、社会現象を「規範的に」語る道具ではない。欲求とは人間に「自然に」備わったものではなく、社会的に構成されるものである。規範や欲求は言説の中に巧妙に潜んでいる。そうした点を見極め、眼前の社会現象を視るまなざしを獲得すること。
講義方法	<p>まれにCDやDVDを使うが、基本は大変アナログ的なシャベクリー方の講義である。最近流行りのインタラクティブな双方向授業やビジュアル系の講義は、話のリズムが崩れるし妙な間が空くため採用しない。したがってメールやオフィスアワーを積極的に活用し不明な点や率直な感想をどんどん表明してほしい。質問という「語り」を通し視えてくるものは多い。なお質問内容・回答内容はプライバシーに抵触しない範囲で講義において開示・解説し、受講生全員の共有財産とすることをあらかじめご了解頂きたい。ただし匿名のメールは黙殺する。 ちなみに、たまに欠席しても大丈夫なよう講義の進展には配慮しているが、たまに出席するという方には対応していない。アシカラズ...(^_^)</p>
準備学習	試験問題が第2回の講義において発表されるので、常に頭の片隅に置いておくこと。そして、日々見聞きする社会事象に鋭敏にアンテナを張っておくこと。そうしたさりげない頭脳の働きが準備学習であり、それが試験の点数の差になって現れる。
成績評価	<p>期末の試験。 完全な論述形式。複数の問題から1問選択する(2009年度は「複数問から複数選び、統一した論点で回答する」という形にした。今年度も同じやり方をとる可能性がある)。選択した問題に沿い、各自でタイトルを付した上で、論を進めること。いずれの問題も現代社会に生起する現象を題材にしたものである。 評価は、上記の「講義内容」をどの程度理解しているか、「到達目標」にどの程度近づいているかを念頭に、記されたタイトルの明晰さ・的確さ、論述に示された視点、論の説得性を基準とする。合わせて、論述のルールを遵守しているかどうか評価基準となる。</p>
講義構成	<p>01. 2009年度の試験問題を題材に講義の留意点を解説 02. 試験問題の発表と解説から2010年度の講義全体をレビュー 03. 言説群としての文化 04. 言説とレトリック 05. 経済的交換と社会的交換 06. 社会的交換における〈曖昧さ〉の規範 07. 交換言説のトラップ—愛と苦悩の欺瞞性</p>

	08. 怨み、憎しみ、ルサンチマン 09. 自己言及のパラドックス 10. ルサンチマンと価値の逆転—そのアイロニーと意義 11. 目標までの距離と操られる欲求—相対的不満 12. 人を煽る言説群—アノミー社会の中の人間 13. まなざしの閉塞—エゴイズム社会の中の人間 14. アイデンティティの諸相—ボキャブラリーと他者からの認証 15. まとめ—現代社会における意味の希求
教科書	なし
参考書・資料	参考書籍は講義中随時指示するが、以下のものをあらかじめ提示しておく。資料は適宜配布する。 『岩波講座 現代社会学』(全26巻) E. デュルケーム『自殺論』 D. リースマン『孤独な群衆』 F. ニーチェ『道徳の系譜』 P. ブラウ『交換と権力』
講義関連事項	人間という動物の存在を考えるためには、哲学・心理学・倫理学など人間学関連の科目にも共通する視点が多いし、近現代の文学関連の科目も参考となる。「社会」という言葉から観点を限定せず、広く人間や文化を眺めてほしい。

その他	◇欠席・遅刻・早退について ・欠席、早退は自己責任による自己判断にもとづく権利である ・遅刻と私語をしないことは一般的な社会的義務である (うろついたり、チョロチョロ出入りしないのは当然！) よって、遅刻者はコソコソと入室し早退者は堂々と退室すべきなのだが、現状は逆のようである... ◇ケータイについて ・電源を切れ！とはいわない ・バイブ音は周りに漏れないよう配慮すること ・電話に出るなら、荷物をもち二度と教室には戻らないこと ・メール閲覧は講義終了後に(サイト閲覧やゲームなど論外!)
-----	---

授業コード	13N12		
授業科目名	社会人間学(現代社会学I) (B)(前)		
担当者名	春日井典子(カスガイ ノリコ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜3限
特記事項	経済学部・経営学部(2年次配当)		
オフィスアワー	講義終了時		

講義の内容	社会学は、その対象においても方法においてもずいぶん多様性があり、それだけに初めて社会学に接する人は、わかりにくい学問という印象を受けるようです。この授業では、社会学の具体的なイメージを呼び起こすために、社会学の歴史の中でこれまで受け継がれ、議論されてきた著名な命題を挙げていながら、「社会学とは何か」を共に考えていきます。
到達目標	経済学部の2年次以上の学生を対象とした「社会学入門」として、多様な分析や研究の根本にある、社会学の「ものの見方」を理解することを目標とします。 この授業が、皆さんにとって、自分自身を取り巻く人間関係や社会現象を多少とも新しい角度から見直す手がかりとして役立つことを願います。
講義方法	講義形式で行います。
準備学習	復習として、授業で示した命題を、具体的な体験や現象に当てはめて再確認すること。
成績評価	持ち込み不可の定期試験(100%)により評価する。
講義構成	以下の命題について講義する。 第1回 自我の社会性(G・H・ミード) 第2回 人間の攻撃性(K・ローレンツ) 第3回 抑圧と文化の理論(S・フロイト) 第4回 文化としての性差(M・ミード)

	第5回 動機の語彙(C・W・ミルズ) 第6回 自己呈示のドラマツルギー(E・ゴフマン) 第7回 ダブル・バインド(G・ベイトソン) 第8回 ラベリングと逸脱(H・ベッカー) 第9回 予言の自己成就(R・K・マートン) 第10回 欲望の模倣とモデル＝ライバル論(R・ジラール) 第11回 志向のくいちがいと羞恥(M・シェーラー) 第12回 準拠集団と相対的不満(R・K・マートン) 第13回 まとめ 第14回 試験
教科書	作田啓一・井上俊編『命題コレクション 社会学』筑摩書房 1986
参考書・資料	作田啓一・井上俊編『命題コレクション 社会学』筑摩書房 1986のなかで、授業で取り上げる部分は印刷して配布する。その他、必要に応じて随時資料を配付する。
担当者から一言	毎年、受講生の非常に多い科目です。大教室での講義となることが予想されます。授業中の私語を厳禁します。

授業コード	13N13		
授業科目名	社会人間学(現代社会学I) (C)(前)		
担当者名	速水奈名子(ハヤミ ナナコ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜4限
特記事項	法学部(2年次配当)		

講義の内容	本講義の前半では、近代からポスト近代社会への時代の移行に応じて、社会学理論がいかに再構成されてきたのかを確認し、後半ではそれらを活用しながら、現代社会における諸問題を検討する。特に後半では、「身体社会学」に関わる問題を扱っていく。
到達目標	社会学理論の基礎を学ぶこと、そしてそれを通じて、現代社会を客観的に分析する視野を養うことが目指される。
講義方法	各テーマに沿って講義を行う。イメージを提示するために、DVDやプロジェクターを使用する場合もある。
準備学習	以下に提示した参考書・資料を利用すること、そして日常的に新聞やインターネット、テレビなどを通じて現代社会事情を把握することが望ましい。
成績評価	授業態度・小テスト(40%)、そして定期試験(60%)を通して評価する。
講義構成	1.イントロダクション 2.社会学理論とは何か 3.近代と社会学理論 4.ポスト近代と社会学理論I: ミクロ／マクロ理論を越えて 5.ポスト近代と社会学理論 II: 主客二元論を越えて 6.ポスト近代と社会学理論 III: 身体社会学の成立 7.ポスト近代と社会学理論IV: 感情社会学の成立 8.現代社会と社会学理論V: 合理性と非合理性I—マクドナル化論 9.現代社会と社会学理論VI: 合理性と非合理性II—再魔術化論 10.現代社会と社会学理論I: 社会と個人I—制度化された個人主義 11.現代社会と社会学理論II: 社会と個人II—制度の崩壊と個人主義 12.現代社会と社会学理論III: 社会とジェンダーI—フェミニズム運動 13.現代社会と社会学理論IV: 社会とジェンダーII—ジェンダーの多様性 14.まとめ
教科書	授業のたびにこちらで作成したレジュメを配布する。
参考書・資料	新睦人編、『新しい社会学のあゆみ』(2006). リッツァー. G., 『古典社会学』(2000). 大野道邦・油井清光・竹中克久編、『身体の社会学』(2005). ターナー. B. S., 『古典社会学』(1999).
担当者から一言	授業のはじめでは社会学理論の話をしませんが、これらは社会学がどのようなことを分析の対象としているのかを知る上で重要です。堅苦しく考えずに、参加してみてください。

授業コード	13021		
授業科目名	社会ネットワーク論(後)		
担当者名	星 敦士(ホシ アツシ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	木曜3限
オフィスアワー	金曜日4限目。それ以外の時間はメールで予約してください。		

講義の内容	「社会ネットワーク」とは、わかりやすく一言でいえば「つながり」のことです。世の中には実に多くの、そして様々な「つながり」があります。この講義では、「社会ネットワーク」という考え方の特徴とともに、実際に調査してみたら……、という視点も含めて紹介します。
到達目標	「ネットワーク」という考え方を通して社会で起きている様々な出来事をとらえることができるようになればいいですね。
講義方法	以下に示す4つの大きなテーマについて3回程度ずつ講義を行います。実習的な要素も含めたいと思っていますが、その方法やグループワークを取り入れるかどうかは履修者数によって変わるので未定です。
準備学習	「つながり」というキーワードに関心があれば、予備知識は必要ありません。
成績評価	平常点(40%)と期末レポート(60%)を総合して成績評価を行います。
講義構成	01 イントロダクション 02～04 (1) ネットワークの効果を測る 05～07 (2) ネットワーク構造を描きだす 08～10 (3) ネットワークのプロセスをたどる 11～13 (4) メディアとしてのネットワーク 14 まとめ
教科書	平松闊・鶴飼孝造・宮垣元・星敦士, 2010, 『社会ネットワークの研究・メソッド:「つながり」を調査する』ミネルヴァ書房.
参考書・資料	適宜紹介します

授業コード	13018		
授業科目名	社会倫理論(文化社会論)(前)		
担当者名	大津真作(オオツ シンサク)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜2限
オフィスアワー	木曜日昼休み		

講義の内容	人間の行動を根本的に規定する生存への努力を哲学的に解明すること、人間と社会環境との必然的つながりを明らかにすること、人間の社会的本質にもとづいて自然主義的倫理を打ちたてること。自然主義的倫理にもとづいて、現代社会のさまざまな病理を考察すること。
到達目標	現代社会を生き抜く上で基本となる倫理性が身につき、その原理が理解でき、説明できるようになる。
講義方法	資料配布。
準備学習	日本で多発している犯罪事件に関心があることが必須要件です。 人間の精神と身体の関係について基礎的知識を備えること。デカルトの『方法序説』を読むほか、できればダーウインの『種の起源』を紹介した進化論関係の入門書を読んでおいて欲しい。 授業で紹介する映画、書物に親しむ。
成績評価	レポートと試験
講義構成	第1回: 人間の誕生1 誕生の偶然性 第2回: 人間の誕生2 脳髄の発達 第3回: 人間の誕生3 精神の本質 第4回: 人間の誕生4 身体の本質 第5回: 心身関係論1 精神の役割

	第6回: 心身関係論2 身体の生存への努力 第7回: 心身関係論3 身体と環境との相互作用 第8回: 人間の倫理1 欲望について 第9回: 人間の倫理2 感情について 第10回: 人間の倫理3 理性について 第11回: 社会倫理の基礎1 善とはなにか 第12回: 社会倫理の基礎2 善悪二元論について 第13回: 現代社会の倫理的考察1 共同社会について 第14回: 現代社会の倫理的考察2 共同社会について 第15回: 現代社会の倫理的考察3 刑罰と倫理
教科書	資料を配布する。教科書『倫理の大転換』(行路社)準備中です。
担当者から一言	人間論の根本を知って欲しい

授業コード	13038		
授業科目名	集団組織論(集団論・組織論)(前)		
担当者名	若林直樹(ワカバヤシ ナオキ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	月曜2限

講義の内容	<p>ネットワーク組織は、今日のダイナミックに変化する組織の特質を表している。ネットワーク組織とは、独特の仕組みを持つ。それは、人々や集団が、組織内部における縦割りの壁や組織と外との壁によって分断されていながら共通の目標達成を目指している場合に、そうした壁を越える社会ネットワークを展開させることで、水平性、柔軟性そして多元性という特徴を持つ結合関係を媒介にした協働を行うことのできる活動システムである。そして、ネットワーク組織は、理想と現実の入り交じった組織の見方を示している。つまりこれは「ネットワーク」という視点を用いて、現代の企業、政府・自治体、NPOや諸団体が変革されていくべき理想の組織像を表すとともに、ダイナミックに変化している組織の実態をも表している。そして、パートナーシップ、ネットワーク・ガバナンス、知識ネットワークなどという新たな組織のあり方の議論にも展開している。この講義の課題は、社会ネットワークの視角から、「ネットワーク組織」という組織のあり方を検討して、ダイナミックに変化する現代の組織の原理と実態を明らかにしていくことである。</p>
到達目標	<p>①組織を考える諸概念を理解する 企業やNPO、政府などの組織の現代的なあり方を理解する社会学的な基礎概念を理解する。</p> <p>②現代の企業を巡る経営的な概念を理解する。 企業グループ、戦略的提携、官民パートナーシップなどの経営的な概念を理解する。</p> <p>③組織を考える現代的なコンセプトを知る 官僚制組織、組織の学習能力、社会ネットワーク理論、ソーシャル・キャピタルなどの組織を分析する現代の社会学的コンセプトを知る。</p> <p>④現代の組織の動きを知る こうした概念を通じて、現代の先端的な企業や社会的セクターの組織の実体的な動きを知る。</p>
講義方法	<p>①教科書に沿いながら基本的なコンセプトを理解する 教科書の各章を講義中に説明しながら、基本的なコンセプトを理解する</p> <p>②代表的な企業や政府組織の事例を理解する 教科書や授業資料を通じて事例を理解し、そのことについて考察する</p> <p>③パワーポイントを使いながら、要点の整理と図解を行う 授業資料としてパワーポイントを使いながら要点の整理と図解を行う。</p> <p>④中間レポートで実際の事例を考察する データベースを使いながら、実際の企業や政府組織の事例についての雑誌記事を探し、それについて中間レポートを作成する。</p>
準備学習	教科書の各章を読んで予習を行う。そして、授業資料をみながら、講義でのポイントの復習を行う。
成績評価	2回程度のレポート(合計90点)と小テスト(10点)の合計で評価する。
講義構成	第1回 オリエンテーション 第2回 ネットワーク組織の意義 第3回 ネットワーク組織とは何か 第4～5回 ネットワーク組織の形態 第6～7回 組織間ネットワークの形態 第8回 ネットワーク組織で働く

	第9～10回 柔軟な組織原理 第11回 組織デザインの優位性 第12回 社会ネットワーク理論からみた組織像 第13回 組織へのネットワーク効果 第14回 組織のネットワーク分析の意義 第15回 組織のソーシャル・キャピタル
教科書	若林直樹『ネットワーク組織』有斐閣。
参考書・資料	田尾雅夫他編『はじめて学ぶ経営学』ナカニシヤ出版。
講義関連事項	講義資料についてはMy Konan上で、後ほどダウンロードできるようにする。
担当者から一言	今の企業や政府組織のダイナミックで流動的な組織のあり方を理解してください。
その他	授業中は私語を避け、携帯電話を切ること。
ホームページタイトル	京都大学でのHPIは使用しない。My Konan上で授業資料公開に変更。

授業コード	13052		
授業科目名	情報社会学II(後)		
担当者名	岡田朋之(オカダ トモユキ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	木曜4限
オフィスアワー	各時限の終了時をあてる		

講義の内容	情報社会といわれる現代社会をとらえる上で、さまざまなメディアの関与を考慮しないわけにはいかない。しかしその際、メディアそれ自体が文化的・社会的に構成されたものである点を見過している場合が少なくない。本講義では身近な存在でありながらメディアとして意識されにくい携帯電話やPHSなどの「ケータイ」を糸口に、それらをめぐる社会現象や言説を文化的・社会的側面から分析することを通じて現代の情報社会の側面を明らかにする。
到達目標	情報メディアにかかわるごく身近な問題群の背景を理解し、問題解決に向けて取り組むためのイメージーションをやしなう。
講義方法	前半は現代のメディアとコミュニケーションをめぐるさまざまな状況を理解してもらうため、ビデオなどの映像資料や各種サイトを随時紹介する。 講義中はケータイメールを活用して随時受講生からの質問を受けつける。また、4～5回に1回程度、時間内に小エッセイを記入してもらうなど、担当者からの一方的な話の押しつけとならないよう、双方向性をできるだけ取り入れた講義にしていきたい。 さらに、後半の授業の中では少人数のグループを編成し、ワークショップの形式も取り入れながらグループごとに将来のメディア・イメージを構想してもらい、それをもとに個人でレポートを作成、評価の対象とする。
準備学習	適宜指示する。
成績評価	後半におこなうワークショップでのグループの成果と、学期末の個人レポートを中心に評価し、講義時間中に課す小エッセイも加味する。 評価の基準としては、知識量の多寡よりも、講義の中で示した社会学的な捉え方がどの程度理解されているかを重視したい。
講義構成	教科書の各章の内容にしたがって次のようにおこなう 1 ケータイから学ぶということ 2 メディア変容へのアプローチ(その1)～パーソナル化 3 メディア変容へのアプローチ(その2)～マルチメディア化 4 都市空間とメディア 5 ケータイにおけるメディア・コミュニケーションの特性 6 メディアと自己意識 7 メディア利用から見えるジェンダー(その1)～ケータイとジェンダー 8 メディア利用から見えるジェンダー(その2)～ネットとママ友 9 ケータイの流行学 10 メディアとうわさのコミュニケーション論 11 モバイル社会のゆくえ(その1)～「IT革命」とはなんだったのか 12 モバイル社会のゆくえ(その2)～ケータイでつながる人間関係のこれから 13 ワークショップ1:2020年のケータイ生活を考える 14 ワークショップ2:2020年のケータイとサービスを考える

	15 ワークショップ3: 成果の発表と振り返り
教科書	岡田朋之・松田美佐編『ケータイ学入門』有斐閣 2002
参考書・資料	富田英典他著『ポケベル・ケータイ主義!』ジャストシステム 1997 J・E・カツツ&M・オクス『絶え間なき交信～ケータイ文化の誕生』富田英典監訳、NTT出版、2003 松田美佐・岡部大介・伊藤瑞子編 『ケータイのある風景——テクノロジーの日常化を考える——』北大路書房、2006 その他、必要に応じて講義時間内で紹介する。
講義関連事項	「情報社会学I」は本講義とセットで受講すること。
担当者から一言	日常生活でなにげなく接しているメディアを意識的にとらえなおす訓練/トライしてほしい。

授業コード	13035		
授業科目名	情報社会論(情報社会学I) (前)		
担当者名	岡田朋之(オカダ トモユキ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	木曜4限
オフィスアワー	各時限の終了時をあてる		

講義の内容	<p>現代社会は情報化社会ともいわれる。そこから連想されるイメージは、社会のさまざまな領域に情報メディアが深くかかわっている現在の状況であり、また、メディア・テクノロジーがますます生活を変えていくであろうという将来への展望であろう。</p> <p>しかし、これだけ社会生活においてメディアが大きな役割を果たしているにもかかわらず、皆さんはこれまでそうした状況でのものごとの見方や、社会の捉え方を学ぶ機会がほとんどなかったのではなかろうか。</p> <p>本講義では、メディアとコミュニケーション、情報といったものとの関わりを軸に、社会学的な視点から、このような現代の情報化社会を見つめなおすものである。</p>
到達目標	情報化の進んだ現代社会におけるさまざまな問題群の背景を理解し、問題解決に向けて取り組むためのイメージネーションをやしなう。
講義方法	<p>多様化するメディア環境の理解を助ける上で、ビデオなどの映像資料や各種ウェブサイトを随時紹介する。</p> <p>講義中はケータイメールを活用して随時受講生からの質問を受けつける。また、4～5回に1回程度、時間内に小エッセイを記入してもらうなど、担当者からの一方的な話の押しつけとならないよう、双方向性をできるだけ取り入れた講義にしていきたい。</p>
準備学習	とくに必要としない。
成績評価	<p>基本的には期末試験でおこなう。また、講義時間中に求める小エッセイもプラスアルファとして考慮する。</p> <p>評価の基準としては、知識量の多寡よりも、講義の中で示した社会学的な捉え方がどの程度理解されているかを重視したい。</p>
講義構成	<p>以下の内容を予定しているが、新しい重要なトピックを取り上げることなどにより、若干の修正もあり得る。</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 情報政策の流れと「IT革命」について 第3回 メディア史(技術決定論と社会構成主義) 第4回 コンピュータとインターネット 第5回 情報社会を生きる子どもたち(1) 第6回 情報社会を生きる子どもたち(2) 第7回 情報社会と匿名性(1) 第8回 情報社会と匿名性(2) 第9回 マスメディアの流れ 第10回 多メディアの時代と世論形成 第11回 広告コミュニケーションの発展と転回 第12回 (選択テーマ)(1) 第13回 (選択テーマ)(2) 第14回 まとめ</p>
教科書	とくに使用しない。必要に応じて資料を配布する。
参考書・資料	各回のテーマに合わせて参考文献を紹介する。 また、毎回講義レジュメを配布する。
担当者から一言	日常生活でなにげなく接しているメディアを意識的にとらえなおす訓練にトライしてほしい。

授業コード	13026		
授業科目名	生活福祉論(生活福祉学I)(前)		
担当者名	野々山久也(ノノヤマ ヒサヤ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜2限
オフィスアワー	月・火(12:10~1:00)。そのほか必要があれば、電話078-435-2379やメール:nonoyama@konan-u.ac.jpなどにて予約してください。		

講義の内容	<p>現代社会においては「社会福祉」は、基本的な人権とさえ認識されるようになってきた。それは特別なニーズを有する人びと、たとえば、障害者や要介護老人などに対する社会的サービスとしてだけでなく、一般的なニーズを有するすべて人びとの生活福祉として位置づけられる。</p> <p>この講義科目では、社会福祉が生活福祉として認識され、すべての人びとにとって不可欠な社会的サービスとなってきた歴史的な背景をその論理展開の過程として学習していく。社会福祉が、そして生活福祉が1つの制度として確立してきた背景には、紆余曲折した多様な論理の展開過程が見いだされる。その過程を詳細に学習し理解することによって、いま期待されている高福祉が一体、何なのかを究めていくことにしたい。</p>
到達目標	<p>社会福祉の概論をまず学習する。そのうえで今日的な福祉概念である「生活福祉」とは何かを学習する。生活福祉の全体像をマスターすることが到達目標である。</p>
講義方法	<p>講義資料があるかないかを毎回、MY KONANで確認して、あればMY KONANから講義資料をプリントして、予習してから授業に出席すること。なるべく双方向的な授業を行いたいと思っているので、積極的に質問などして発言してほしい。出席していて、面白い授業にしていきたい。</p>
準備学習	<p>新聞などさまざまな情報媒体から福祉関連の情報を注意して理解しておくようにすること。福祉情報は、刻々と変化している。今日的な社会学的研究テーマを見つけるためにも、この作業は重要である。なお、講義に出席する際には、MY KONANに講義関連資料が掲載されていないかを確認し、掲載されている場合には、それをプリントアウトして、その予習をし、授業に持参すること。</p>
成績評価	<p>期末テスト(60分)を中心にして、その他の採点を加味して成績を総合評価する。授業中の私語は、減点の対象になる。また授業中に2~3回のレポート提出を課すこともありうる(未提出は、理由の如何にかかわらず0点と評価する)。</p>
講義構成	<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 社会福祉と生活福祉の概念について 3 Social Welfare とSocial Work 4 社会福祉の論理展開 <ol style="list-style-type: none"> (1) 前近代的論理段階 (2) 相互扶助・慈善事業・博愛事業 (3) 近代的段階への移行 (4) 救貧事業・保護事業 5 福祉論理の拡大 6 イギリスの福祉国家の概念 7 拡大化した論理の自己矛盾 8 福祉論理の限定化 9 専門社会福祉事業の展開 10 生活福祉の論理の展開 11 まとめー実践的な生活福祉ー
教科書	<p>とくに特定の教科書を指定してはいない。授業のすすみ具合にそって、そのつど参考文献などを紹介していく。</p>
参考書・資料	<p>授業の前半には不要であるが、後半になってからは、以下の参考文献の活用を勧めたい。 大阪ボランティア協会(編)『2010福祉小六法』中央法規</p>
講義関連事項	<p>MY KONANに、受講するにあたって持参すべき資料や連絡事項を掲載するので、毎回、必ずチェックしてから授業に出席すること。それは予習ということにもなる。</p>

担当者から一言	<p>社会福祉や生活福祉などという言葉は、すでに誰もが知っている言葉になってきている。しかし本当に正しく使用されているだろうか。ときに政治家であっても、誤解して使用している人が多いように感じる。その論理展開の過程を学ぶことによって、正しい概念をしっかりと学習していきたい。</p>
その他	<p>とくに出席について毎回、点呼するようなことはしないが、登録する以上は、出席は当然の義務である。</p>

授業コード	13050		
授業科目名	生活文化論II(後)		
担当者名	速水奈名子(ハヤミ ナナコ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜5限

講義の内容	本講義では、日本社会における文化的制度、そしてそれが人びとの日常生活に与える影響が、時代とともにいかに変容してきたのか分析していく。講義のはじめでは、社会学的にこれまで「文化」という概念がどのように認識されてきたのか、その定義を確認する。次に、時代別に主にイメージを用いて、日本文化の変容を考察していく。
到達目標	授業を通じて、自らが生きる現代日本社会が、伝統的なそれと異なるといえるものであるのか、またどのような伝統を受け継いでいるのか、客観的に分析する視野を養うことが目指される。
講義方法	各テーマに沿って講義を行う。イメージを提示するために、DVDやプロジェクターを使用する。
準備学習	特に授業前の準備は必要ないが、授業を通じて学んだことを、以下に提示した参考書・資料などを確認することを通じて、自らの中で再確認(復習)することが望ましい。
成績評価	授業態度・小テスト(40%)、そして定期試験(60%)を通して評価する。
講義構成	1.イントロダクション 2.社会学と文化 3.カルチャラル・スタディーズとは何か 4.日本文化を客観的に視る 5.江戸時代の文化制度 6.江戸時代の生活 7. 明治時代の文化制度 8. 明治時代の生活 9. 大正時代の文化制度／生活 10.昭和時代：戦前の文化制度／生活 11.昭和時代：戦後の文化制度 12.昭和時代：戦後の生活 13.現代：平成(ポスト近代)の文化制度 14.現代：平成(ポスト近代)の生活
教科書	授業のたびにこちらで作成したレジュメを配布する。
参考書・資料	大野道邦・小川伸彦編、『文化の社会学』(2009)。
担当者から一言	授業内ではさまざまなイメージを用いて、日本文化の変容を検討します。それを通じて、文化と日常生活における認識構成の関係を検討してみてください。

授業コード	13C02		
授業科目名	ゼミナールI(森田)(前)		
担当者名	森田三郎(モリタ サブロー)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	月曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	電話またはメールにて相談して予約。あるいはゼミの時に予約してください。		

講義の内容	3年生(1年後)になって、自分自身が本当に興味のある研究対象を見つけ、着実に取り組むための準備をします。そのためまずは、「聴く力」、「考える力」、「話す力」、「書く力」を身につけるためのトレーニングを行います。それと同時に、研究対象を身近な関西文化に絞り、1年生で学んだ調査手法を使って、街に出て調査をし、報告書を作成します。そのため、実習的な授業を行います。
到達目標	「聴く力」、「考える力」、「話す力」、「書く力」において、レベルアップすること。
講義方法	メールや教室での直接対話を含む指導教員との綿密なコミュニケーションと事前および経過の相談を前提とした上で、ゼミ生各自の自主的な調査を計画・実施してもらいます。研究成果の作成過程では、各自順番に経過を発表し、相互に建設的なコメントや情報提供を行い、ゼミ生どうし助け合いながら自身が責任を持って行います。教員は、ゼミ生のテーマに応じた個別指導を行います。研究の公表に関しては、前期の最終回に、パワーポ

	イントを使って、全員の成果の発表会を行います。CDCの地域連携プロジェクトの成果として、CDCのWEBページの阪神文化事典の項目として追加され、世界に公開されます。
準備学習	毎回、具体的な課題を出します。
成績評価	調査活動の成果を、集団討議の上、最終的には教員が評価します。評価の基準は、 (1)どの程度オリジナリティがあるか。 (これまでに無かった研究対象、研究する視点、手法などがあつたか) (2)議論が正確であるか。 (テーマに関して、証拠としてあげているデータが正確なものと言えるか) (3)議論が妥当であるか。 (テーマに関して、主張する根拠が、そのテーマに相応しいデータになっているか) (4)自ら動いて、直接データを集めたか。 (自らが直接観察、インタビュー、アンケートなどを実施して集めた資料に基づいた根拠をあげているか。コピーは、最低評価になります)
講義構成	1回目のオリエンテーション時に、各自、取り組むテーマの候補をあげて、その中から、自分が取り組むテーマを決定します。2回目以降は、各自取り組んできた研究(調査)成果を、他のメンバーの中で、順に発表します。発表機会は前期に2回ですが、12月の授業終了時前後の休日に、学年合同ゼミ発表会を開催し、前期と後期に作った報告の中から、一つを選び、パワーポイントを使って、発表してもらいます。発表者以外の人は、コメントをします。全員が、発表者のテーマについて、ディスカッションをします。
教科書	ありません。
参考書・資料	『新琉球 地域文化論グラフィティ』(現代おきなわ若者教養講座/チームT・A地域科学研究室95編、ポーターインク、1996)

授業コード	13C03		
授業科目名	ゼミナールI(大津)(前)		
担当者名	大津真作(オオツ シンサク)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	木曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	木曜日昼休み		

講義の内容	現在の社会問題を調査する。
到達目標	現代社会を理解する力がつく
講義方法	グループに分かれての調査
準備学習	新聞テレビニュースを把握する
成績評価	レポート
講義構成	雇用問題の雑誌記事を解説、討論。人類学のテキストの解説と討論
教科書	雇用問題の雑誌記事、新聞記事
参考書・資料	『労働ダンピング』岩波新書
担当者から一言	出席重視

授業コード	13C04		
授業科目名	ゼミナールI(菅)(前)		
担当者名	菅 康弘(スガ ヤスヒロ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	金曜5限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	こちらが空いていて、そちらが空いていれば、いつでも...		

講義の内容	『菅ゼミ案内'10』に書いてある通り、2回生の間は <ul style="list-style-type: none"> ・外でいろいろなものをみる ・内でいろいろなものを読む ことをモットーとします。 前期「ゼミナール1」では、まず‘でい～ぶ観光’先である沖縄や奄美の知識を肥やしてください。その上で、‘でい～ぶ観光’です。 なお、2年時の間は合わせて、レジュメのまとめ方や表記の方法など、基礎的なことも学んでください。
到達目標	‘場所’ というものを、‘土地’ というものを視るまなざしを養って下さい
講義方法	基本的にゼミ生各自の発表で構成されます。
準備学習	指定された中から、自己の関心に応じた論考を選択する ↓ しっかりと内容を把握し、レジュメにまとめる ↓ 他者の発表もしっかりと把握する ↓ ‘でい～ぶ観光’において、「学ぶ＝遊ぶ」テーマを考える ↓ テーマに即した情報を広くゲットする
成績評価	平常点 & 発表
講義構成	私がまずサンプルの発表をやった後、各自が沖縄についての論考から内容紹介をします。レジュメという要約プリントを人数分作成し、発表します。皆さんは12名の発表から、どこに焦点を当てて‘でい～ぶ観光’に臨むかを考え、帰ってからのレポート作成に生かしてください。 <ul style="list-style-type: none"> ・前半：沖縄・奄美を「読む」 ・後半：‘でい～ぶ観光’にプランを発表する
教科書	テキストは研究室に転がっていますので、各自で好きなものを選ぶ形になりますが、あらかじめいくつかピックアップしておきます。
参考書・資料	研究室に掃いて捨てるほど転がっていますが、各自で徹底的に沖縄・奄美情報を漁ってください。
担当者から一言	ミーハーになってください！！

授業コード	13C05		
授業科目名	ゼミナールI(西川)(前)		
担当者名	西川麦子(ニシカワ ムギコ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	木曜4限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	木曜昼休み		

講義の内容	社会調査の一連のプロセス(構想・企画、調査設計、情報収集、記録、データ整理、報告書作成、発信と通信)を体験的に学ぶことを目的とする。人と場所とに関わりながら調査を行うフィールドワークを実施する。インタビューと、観察やドキュメント収集など、複数の方法を組み合わせ対象を多角的な視点からとらえ、情報を記録し資料として提示し、分析、考察していく。
到達目標	現場から課題を見出し情報を集め、調査記録を作成、整理し、分析、考察を行い、報告書を作成するという一連の調査のプロセスを実践することを目的とする。
講義方法	グループワークでの実習
準備学習	社会調査基礎演習 I・II、社会調査法で学習した社会調査の基礎を復習しておく。
成績評価	出席(準備と調査の実施)、調査報告書作成、報告会でのプレゼンテーション
講義構成	調査のテーマは、「仕事」である。各グループは、これに2つのキーワード(たとえば、仕事・技術・地域)を組み合わせ、何を調査するのか課題を明確に設定していく。事前の情報収集や調査企画の段階で作業仮説をたてるが、調査地での参与観察、取材をとおしてえた情報、資料から実態と問題を把握していくプロセスを重視する。各グループにおいて課題を具体化し、次の手順で調査準備を行う(企画)。(1)関連資料・情報の収集(情報検索、文献収集)とまとめ、(2)調査対象を選定、(3)調査企画書作成(タイトル、キーワード、趣旨説明、調査対象、

	情報収集の方法、記録方法と道具、協力者・団体、日程、費用、作業分担、参考文献・資料一覧など)。(4)現地 の下見と企画再検討。 実際の調査とそのまとめ(実践)は、次の手順で行う(後期)。(1)調査依頼、交渉、機材、道具の準備、(2)現場で の取材、記録(本調査と補足調査)、(3)記録・資料作成(録音の文字化、写真、ドキュメントなどの整理)、(4)報告 書作成。準備(1)~(4)、実践(1)~(4)のプロセスを意識的に行うことによって、調査を具体的な作業の連携とプ ロセスとしてとらえ、企画力と実践力を養う。
教科書	西川麦子『フィールドワーク探求術—気づきのプロセス、伝えるチカラ』ミネルヴァ書房、2010
参考書・資料	「社会調査工房オンライン」(甲南大学社会学科)

授業コード	13C06		
授業科目名	ゼミナールI(中里)(前)		
担当者名	中里英樹(ナカザト ヒデキ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜昼休み。火・水・金曜日のその他の時間も、メール等での予約を随時受け付けます。		

講義の内容	報告とディスカッション、自分の研究テーマの発見、関連資料の探索などの方法を学びつつ、実践する。		
到達目標	論文をまとめ批判的にコメントの出来る力をつける。 口頭報告のおよび質問の技法を身につける。		
講義方法	報告とディスカッション、サイバーライブラリーでの実習を行う。必要に応じて、資料を配布する。		
準備学習	報告にあたって十分な準備が求められます。		
成績評価	出席、報告、授業内での発言、提出課題などを総合的に評価する。		
講義構成	<ul style="list-style-type: none"> ・小人数グループでの自己紹介 ・グループディスカッション ・推薦文献リストにもとづく報告 ・関心のあるテーマについての雑誌記事を複数紹介し、比較・論評する。 		
教科書	テキストは用いず、適宜資料を配付する。		
参考書・資料	受講生の関心に応じて随時紹介する。		

授業コード	13C07		
授業科目名	ゼミナールI(宮垣)(前)		
担当者名	宮垣 元(ミヤガキ ゲン)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	前期火・水曜の12時10分~13時がオフィスアワーですので、この時間は自由に来て頂いて結構です。それ以外 の時間については、メールで事前に連絡をしてください。		

講義の内容	受講生の関心に基づく様々なテーマについての議論を通じて、社会学的想像力の涵養を行う。また、専門的な 研究を進めるにあたりまず必要となる作業を行う。グループディスカッションの方法と進め方、テーマ設定と議論 の組み立て方、研究計画書の作成、先行研究へのアクセスと把握、文献リストの作成と文献購読、プレゼンテー ション・執筆の方法などを段階的に行う。		
到達目標	多様なメンバーが集まっているので、まずお互いの研究関心の共有を行う。このことを通じて、自分の研究関心 について効果的に発表することと、他者の発表に対し意見を述べられるようになることを当面の目標としたい。ゼ ミ全体としては、個々が役割を果たすことで、今後ゼミ内で自由闊達な議論を行う「場の構築」が目標となる。		
講義方法	受講生による発表と議論が中心となる。必要に応じ文献購読も行う。		
準備学習	個人、グループによる発表が主体となるので、そのための毎週の準備(調査、まとめ、プレゼンテーションの準備		

	など)が求められる。
成績評価	毎回の出席を前提とし、発表内容、議論への参加により評価を行う。
講義構成	スケジュールと内容、方法、発表担当などは初回に説明します。
教科書	教科書は特に指定しない。
参考書・資料	参考文献・資料は必要に応じ随時紹介する。
ホームページタイトル	社会調査工房オンライン
URL	http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/

授業コード	13C08		
授業科目名	ゼミナールI(星)(前)		
担当者名	星 敦士(ホシ アツシ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜日4限目。それ以外の時間はメールで予約してください。		

講義の内容	いずれ1人で研究できるようになるための準備運動です。研究法・調査法の基礎も扱いますが、まずは自分の関心を他人に伝えたり、それについて話し合ったりすることに慣れるための時間だと考えてください。		
到達目標	小集団のなかでうまく研究していく術を自分なりに身に付けられればよいのではと思います。		
講義方法	参加者によるプレゼンが中心です。どうやってやるか、という部分は解説します。		
準備学習	何にもありません。		
成績評価	出席、発表内容、ゼミ運営への貢献によって評価します。4回以上欠席した場合は単位評価しません。		
講義構成	グループワーク・文献講読・参加者による発表などです。何をいつやるか、どのように組み合わせっていくかは受講者と相談して決めます。		
教科書	使用しません		
参考書・資料	適宜指示・紹介します		

授業コード	13C09		
授業科目名	ゼミナールI(田野)(前)		
担当者名	田野大輔(タノ ダイスケ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	火曜・水曜・木曜の昼休み、および木曜5限。必要な場合はメールで連絡すること。dtano@nifty.com		

講義の内容	受講生の関心をふまえ、テーマ設定、文献収集、資料分析、論文執筆の方法を指導する。		
到達目標	受講生各々が、テーマ設定、文献収集、資料分析、論文執筆の方法を習得することをめざす。		
講義方法	受講生の研究報告と、それについての討論を中心に進める。		
準備学習	必要に応じて指示する。		
成績評価	研究報告の内容によって評価する。		
講義構成	初回のゼミで報告順を決定し、各回原則2人ずつ研究発表と討論を行う。		
教科書	必要に応じて指示する。		
参考書・資料	必要に応じて指示する。		

担当者から一言	明確な問題意識と綿密な資料調査なしには、すぐれた論文は書けない。そのためには労を惜しまないこと。
---------	--

授業コード	13C10		
授業科目名	ゼミナールI (阿部)(前)		
担当者名	阿部真大(アベ マサヒロ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	水曜日 昼休み		

講義の内容	自由発表ゼミ 各自が発表し、議論することで、みずからの問題関心を発見する。
到達目標	みずからの研究テーマを発見する。
講義方法	ゼミ方式
準備学習	自分の気になるテーマについて、新聞やニュース等でチェックしておくこと。
成績評価	出席、参加態度から総合的に評価する。
講義構成	① 報告者による発表 ② 参加者と報告者との間の質疑応答 ③ 全体討論 ④ まとめ ⑤ 次回の課題の発見
教科書	特定の教科書は使用しない。
参考書・資料	特に指定しない。
講義関連事項	内容については進度に応じて若干の変更の可能性あり。

担当者から一言	自分の問題関心がどこにあり、自分が何を解きたいのか、見つけてください。 その成果をゼミナールIIで発表してもらいます。
---------	--

授業コード	13F02		
授業科目名	ゼミナールII (森田)(後)		
担当者名	森田三郎(モリタ サブロウ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	電話またはメールにて相談して予約。あるいはゼミの時に予約		

講義の内容	次年度におこなう「ゼミ論研究」を実施する実力を養うために、共同調査を実施し、テーマの設定、方法の選択、技法の具体的な使い方、分析と考察の仕方を、具体的に学ぶ。また、「伝える力」についても、その基本を学び、習得する。共通テーマは、「現代日本の食に関する調査研究」とする。
到達目標	具体的な調査能力と、「伝える力」のレベルアップ
講義方法	授業では、受講生の中から司会者を決め、共通テーマである現代日本の食に関する情報を、協力して収集し、ディスカッションを通して、いくつかの問題群に分類する。受講ゼミ生は、それぞれ役割を分担して、全員が何らかの調査研究を受け持ち、調査を開始する。毎回、研究成果を持ち寄り、研究のプロセスを再検討して更に調査を行う。 授業を通して、調査が実施され、共同で最終報告書を作成する「食文化研究プロジェクト」を実施する。
準備学習	毎回、共同テーマに関する資料の探索と分析に関連する課題をだします。
成績評価	出席および共同調査における貢献度を総合的に判断する。
講義構成	はじめに、共同テーマに関して指導教員が説明し、次回からは、ゼミ生自身による調査プロジェクトとして、授

	業が機能するように、指導教員はアドバイザーに徹する。 調査研究は、いくつかの小さな調査研究の積み重ねとなるので、9月から11月末頃にかけてのゼミの時間は、常に、全体の進行状況を見ながら、具体的な小調査の企画およびその練り直しと、小調査の結果の報告と評価を行う場となる。 12月のゼミの時間になると、調査のまとめ、補足調査研究の実施と報告書の作成が、中心となる。
教科書	なし
参考書・資料	それを調べるのも、この授業の目的です。
担当者から一言	受講生のみなさんは、食に関心を持っている方が多いはずで。実際に食べてみるなど、研究を存分に楽しみましょう。

授業コード	13F03		
授業科目名	ゼミナールII (大津)(後)		
担当者名	大津真作(オオツ シンサク)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	木曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	木曜日昼休み		

講義の内容	現在の社会問題を調査する。		
到達目標	現代日本社会を理解する力がつく		
講義方法	グループに分かれての調査		
準備学習	新聞テレビニュースを知る		
成績評価	レポート		
講義構成	雇用問題の雑誌記事を解説、討論。人類学のテキストの解説と討論		
教科書	雇用問題の雑誌記事、新聞記事		
参考書・資料	『労働ダンピング』岩波新書		
担当者から一言	出席重視		

授業コード	13F04		
授業科目名	ゼミナールII (菅)(後)		
担当者名	菅 康弘(スガ ヤスヒロ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	金曜5限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	いつでも、お互いに空いているときに		

講義の内容	『菅ゼミ案内'10』に書きました通り、後期はインドアで読みあさりませう。あなたがたのボキャブリーをどんどん肥やしてください。		
到達目標	前期では「空間を読む眼」を養うことが目標でしたが、引き続きこのまなざしを深化させ、より広く「文化を読む眼」を養って下さい		
講義方法	やはり、私がサンプルで発表した後、あなたたち各自の発表となります。		
準備学習	<ul style="list-style-type: none"> ・‘でい〜ぶ観光’レポートの作成 <li style="text-align: center;">↓ ・自己の関心をみつめながら、配布リストから論考を選択 <li style="text-align: center;">↓ ・選択した論考を熟読し、レジュメにまとめる 		

成績評価	平常点 & 発表
講義構成	1. 'でい〜ぶ観光' レポートの合評会 ↓ 2. 複数論考発表 ・各自がテーマを設定し、 ・複数の論考を選択し、 ・発表レジュメを作成し発表する
教科書	使用しない
参考書・資料	発表のための論考は研究室に多数あります。そこから各自のテーマで選んでください。また、日々接するテレビや雑誌・新聞記事、サイトネタなども発表に織り込んでいただいて結構です。
担当者から一言	外でも、内でもミーハー精神をお忘れなく！ 「精神は筋肉、脳みそは柔らかく！」

授業コード	13F05		
授業科目名	ゼミナールII (西川)(前)		
担当者名	西川麦子(ニシカワ ムギコ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	火曜昼休み		

講義の内容	受講生各自の関心にそった論文を選び、テーマ、構成、内容、方法などについて報告する。論文の読み方、書き方の基本を学ぶ。		
到達目標	論文や本を読みながら、自分の研究テーマを見つける。文献資料などに関する情報検索法、論文の読み方、書き方の基本を習得する。		
講義方法	受講生各自の発表にもとづき議論をすすめる演習形式		
準備学習	社会調査基礎演習で学んだ情報検索法を復習し、図書館を活用し、関心のある文献を探す。		
成績評価	出席、レポート、面接試験		
講義構成	4月は、共通した論文を読み、論文の読み方、書き方の基本を学ぶ。5・6月は、受講生各自が選んだ論文を読み、発表と議論の練習をする。7月は、自分の研究テーマについての基本的な論文の概要をレポートにまとめる。また2、3、4年生合同の研究発表会に参加する。		
教科書	必要に応じて資料を配布する。		

授業コード	13F06		
授業科目名	ゼミナールII (中里)(後)		
担当者名	中里英樹(ナカザト ヒデキ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	水曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜昼休み。火・水・金曜日のその他の時間も、メール等での予約を随時受け付けます。		

講義の内容	報告とディスカッション、自分の研究テーマの発見、関連先行研究の探索などの方法を学びつつ、実践する。また、調査のためのグループを組織し、調査を開始する。		
到達目標	雑誌記事を比較検討できる力をつける。 先行研究を読んで内容をまとめ批判的にコメントの出来る力をつける。 口頭報告のおよび質問の技法を身につける。 グループ作業を円滑に進める力をつける。		

講義方法	報告とディスカッション、社会調査工房(コモンルーム)でのグループミーティングにより進める。
準備学習	各自の発表のほか、グループ調査の分担作業を課外で行う必要がある。
成績評価	出席、報告、授業内での発言、提出課題などを総合的に評価する。
講義構成	・各自の関心のある本(学術書)についての報告。 ・グループ調査開始
教科書	テキストは用いず、適宜資料を配付する。
参考書・資料	受講生の関心に応じて随時紹介する。

授業コード	13F07		
授業科目名	ゼミナールII(宮垣)(集中)		
担当者名	宮垣 元(ミヤガキ ゲン)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	前期火・水曜の12時10分～13時がオフィスアワーですので、この時間は自由に来て頂いて結構です。それ以外の時間については、メールで事前に連絡をしてください。		

講義の内容	受講生の関心に基づく様々なテーマについての議論を通じて、社会学的想像力の涵養を行う。また、専門的な研究を進めるにあたりまず必要となる作業を行う。グループディスカッションの方法と進め方、テーマ設定と議論の組み立て方、研究計画書の作成、先行研究へのアクセスと把握、文献リストの作成と文献購読、プレゼンテーション・執筆の方法などを段階的に行う。
到達目標	お互いの研究関心の共有を踏まえ、多様な意見の中で議論を行えるようになることが目標となる。このことは、自己の意見の主張だけでなく、ひとつのテーマについても様々な異なる視点や考え方があることを理解できるようになることを意味する。ゼミ全体としては、全体で自由闊達な議論を行いながら、ひとつひとつの問題を立ち止まって掘り下げられるようになることを目指す。
講義方法	受講生による発表と議論が中心となる。必要に応じ文献購読も行う。
準備学習	個人、グループによる発表が主体となるので、そのための毎週の準備(調査、まとめ、プレゼンテーションの準備など)が求められる。
成績評価	毎回の出席を前提とし、発表内容、議論への参加により評価を行う。
講義構成	スケジュールと内容、方法、発表担当などは初回に説明します。
教科書	教科書は特に指定しない。
参考書・資料	参考文献・資料は必要に応じ随時紹介する。

ホームページタイトル	社会調査工房オンライン
URL	http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/

授業コード	13F08		
授業科目名	ゼミナールII(星)(後)		
担当者名	星 敦士(ホシ アツシ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	水曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜日4限目。それ以外の時間はメールで予約してください。		

講義の内容	ゼミ I に引き続き1人で研究できるようになるための準備運動です。本を読む時間の比重が少し増えると思います。本の探し方や読み方、まとめ方などを体験しながら終わりの頃には来年以降の個人研究について考えることができればいいですね。
-------	---

到達目標	研究のために読んだ本の内容を紹介するための様々なプレゼンの方法についてひと通り経験できればと思います。
講義方法	参加者によるプレゼンが中心です。どうやってやるか、という部分は解説します。
準備学習	ゼミ生同士仲良くなっておいってください。本を読んだり報告のための資料をつくらたりするのは宿題になるのでバイトやサークルに行き過ぎて苦しならないように！
成績評価	出席、発表内容、ゼミ運営への貢献によって評価します。4回以上欠席した場合は単位評価しません。
講義構成	グループワーク・文献講読・参加者による発表などです。何をいつやるか、どのように組み合わせていくかは受講者と相談して決めます。
教科書	使用しません
参考書・資料	適宜紹介します

授業コード	13F09		
授業科目名	ゼミナールII (田野)(後)		
担当者名	田野大輔(タノ ダイスケ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	水曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	火曜・水曜・木曜の昼休み、および木曜5限。必要な場合はメールで連絡すること。dtano@nifty.com		

講義の内容	受講生の関心をふまえ、テーマ設定、文献収集、資料分析、論文執筆の方法を指導する。
到達目標	受講生各々が、テーマ設定、文献収集、資料分析、論文執筆の方法を習得することをめざす。
講義方法	受講生の研究報告と、それについての討論を中心に進める。
準備学習	必要に応じて指示する。
成績評価	研究報告の内容によって評価する。
講義構成	初回のゼミで報告順を決定し、各回原則2人ずつ研究発表と討論を行う。
教科書	必要に応じて指示する。
参考書・資料	必要に応じて指示する。

担当者から一言	明確な問題意識と綿密な資料調査なしには、すぐれた論文は書けない。そのためには労を惜しまないこと。
---------	--

授業コード	13F10		
授業科目名	ゼミナールII (阿部)(後)		
担当者名	阿部真大(アベ マサヒロ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	水曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	水曜日 昼休み		

講義の内容	自由発表ゼミ 各自が発表し、議論することで、みずからの研究テーマを深める。
到達目標	みずからの研究テーマを深める。
講義方法	ゼミ方式
準備学習	自分の気になるテーマについて、新聞やニュース等でチェックしておくこと。
成績評価	出席、参加態度から総合的に評価する。
講義構成	① 報告者による発表 ② 参加者と報告者との間の質疑応答

	③ 全体討論 ④ まとめ ⑤ 次回の課題の発見
教科書	特定の教科書は使用しない。
参考書・資料	特に指定しない。
講義関連事項	内容については進度に応じて若干の変更の可能性あり。
担当者から一言	ゼミナールⅢに続きます。

授業コード	13J01		
授業科目名	ゼミナールⅢ(野々山)(前)		
担当者名	野々山久也(ノノヤマ ヒサヤ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	月・火(12:10~13:00)。そのほか必要があれば、電話078-435-2379やメール:nonoyama@konan-u.ac.jpなどにて予約してください。		

講義の内容	小集団によるゼミナール形式である。ゼミ・テーマは、「現代家族と生活福祉」としているが、ゼミ参加者の関心にしたがって、研究をすすめることを奨励している。毎回のゼミ発表を中心にして展開されるが、報告時間は、30~40分程度で、まず大きな質疑応答を行ない、そのうえでテーマにしたがったバズセッションを、さらに3~4人のグループに分かれて持つ。15分~20分のバズセッションのあと、元に戻って、グループごとの討議の内容と結論に関する報告を行なう。そのうえで全員で、それを討論しあう。毎回、なかなか騒がしいゼミとなるが、討論を終えた後は、各自が1つの課題をクリアした達成感を抱くことになる。
到達目標	報告予定者が準備してきた個別発表の内容をチェックして質疑応答のうえ、研究発表の問題点や今後を検討すべき方向づけを行なう。ゼミⅢは、2年時に検討してきた各自のテーマをさらに深めて最終的にはゼミ論にまで完成させることを目標とする。
講義方法	講義形式ではない。講義方法については、ゼミナール方式としておく。各自で発表内容を調べてきて、それを報告要旨(A3を2枚程度)にまとめてきて報告する。そのあと、質疑応答の後、小グループに分かれてバズセッションを行う。最終的に、報告のまとめを行う。
準備学習	各自、自らの研究テーマにしたがって関連文献を検索し、それを参考にしながら必要な資料とともにゼミ発表として報告できるように纏めてくる。常に研究テーマに関して新聞やマスメディアなどの情報を収集するべく怠りなく準備していること。
成績評価	ゼミ発表やゼミ出席ならびにレポート提出によって成績を総合的に評価する。
講義構成	開講時に指示する。
教科書	とくに教科書は指定しない。参考文献については、つど指示する。
参考書・資料	つど指示または紹介する。
担当者から一言	無断欠席は一切許しません。

授業コード	13J02		
授業科目名	ゼミナールⅢ(森田)(前)		
担当者名	森田三郎(モリタ サブロウ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	月曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	電話またはメールにて相談して予約。あるいはゼミの時に予約してください。		
講義の内容	卒業研究につながる自主的研究として、ゼミ論研究を行って貰います。この段階での調査研究活動を通して、自主的な勉強の知的な楽しさに触れて欲しいというのが、もう一つの目的です。		

到達目標	ゼミ論中間発表を通して、「企画力」のレベルアップをはかる。
講義方法	受講生が各自、ゼミ論の研究成果を発表し、指導教員を含むゼミメンバー全員がコメントをします。特に、指導教員は研究の方向性、参考文献、適切なフィールド、方法、調査対象の紹介など、多方面にわたって、個別支援をします。
準備学習	毎回、各自のテーマに応じた課題を、個別にだします。
成績評価	出席率、および調査活動の成果としての「ゼミ論研究・中間報告」を、総合的に評価します。 評価の基準は、 (1)どの程度オリジナリティがあるか。 (これまでになかった研究対象、研究する視点、手法などがあつたか) (2)議論が正確であるか。 (テーマに関して、証拠としてあげているデータが正確なものと言えるか) (3)議論が妥当であるか。 (テーマに関して、主張する根拠が、そのテーマに相応しいデータになっているか) (4)自ら動いて、直接データを集めたか。 (自らが直接観察、インタビュー、アンケートなどを実施して集めた資料に基づいた根拠をあげているか。コピーは、最低評価になります) (5)本文で8000字以上あるか。 (6)出席率 (出席は、他のゼミ生に対するコメントに反映しますから、貢献度を表します)
講義構成	ゼミ生全員が各自の研究成果を、その方法も含めて順番に発表します。それに対して、教員および、他のゼミ仲間がコメントをします。発表者は、そのコメントを活かし、さらに研究を深めます。発表は通常の授業の時に、2回。
教科書	ありません
参考書・資料	高橋誠『企画書の書き方が面白いほどわかる本』(1999、中経出版)
担当者から一言	3回生は、大学のゼミ活動で最も集中できる時期です。ここでゼミ論を頑張って、就職活動の時に、胸を張って面白い自主研究をやったといきましょう。頑張れ！！

授業コード	13J03		
授業科目名	ゼミナールIII (大津)(前)		
担当者名	大津真作(オオツ シンサク)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	木曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	木曜日昼休み		

講義の内容	ワーキングプアなど雇用破壊の現状を調査する。司法の現状と裁判員制度を調査する
到達目標	現代日本社会を理解する力がつく
講義方法	偽装請負、二重派遣などをグループに分かれて具体的に調査する。 裁判員制度関連の法律などを調査する
準備学習	関連書物を紹介する。
成績評価	レポート
講義構成	労働者派遣法について、派遣法改正について、雇用破壊の現状について 裁判員制度の内容について、死刑制度について
教科書	『裁判員制度の正体』 『雇用破壊』東洋経済新報社
参考書・資料	『労働ダンピング』岩波新書 『労働関係法規集』労働政策研究機構
講義関連事項	格差社会となった日本の現状と問題点
担当者から一言	社会問題で卒業論文を書いて欲しい。

授業コード	13J04		
授業科目名	ゼミナールIII(菅)(前)		
担当者名	菅 康弘(スガ ヤスヒロ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	お互いに空いている時間。メールで応談		

講義の内容	卒業研究に向けての中間ステップとして、自分なりの『素材』を探求し、まとめること旨とする。
到達目標	文化を語る、社会を視る手法を身につけ、同時に説得的に「語る」作法を習得する。
講義方法	グループ発表と個人発表。語るべき内容、視点、必要なデータ、それらの所在・探索方法などについて適宜アドバイスをする
準備学習	日常、常にアンテナを張り、自分自身のテーマをみつけること。そして、テーマを「語る」ことを念頭に、必要な文献・資料・論考やデータを探しておく
成績評価	平常点。発表内容を主体に、質疑応答なども加味する
講義構成	第3クール 第1回～第6回においては「過去の卒論を読む」クールとし、2～3人のグループに分かれ、これまでのゼミ生の卒論から1部選択し、内容を紹介した後、質疑応答、そして評価すべき点・改善が必要な点などを各自で発表する。 第4クール 第7回～第15回においては、いよいよ各自の自由発表。テーマ選択・研究の形式は各自の自由である。ただし、説得的な語りのスタイルを習得してもらうため、適宜コメントをする。
教科書	使用しない。随時、参考となる文献・記事・サイト・番組などを紹介する。ただ、広い意味では日常のさりげない出来事の連続が「教科書」である。アンテナを張っておくことをお忘れなく！
担当者から一言	常に「ミーハー」であることを忘れずに！

授業コード	13J05		
授業科目名	ゼミナールIII(西川)(前)		
担当者名	西川 麦子(ニシカワ ムギコ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	木曜4限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	木曜昼休み		

講義の内容	社会調査の一連のプロセス(構想・企画、調査設計、情報収集、記録、データ整理、報告書作成、発信と交信)を体験的に学ぶことを目的とする。人と場所に関わりながら調査を行うフィールドワークを実施する。インタビューと、観察やドキュメント収集など、複数の方法を組み合わせ対象を多角的な視点からとらえ、情報を記録し資料として提示し、分析、考察していく。
到達目標	現場から課題を見出し情報を集め、記録を作成・整理し、分析・考察を行い、報告書を作成するという一連の調査プロセスを実践することを目的とする。
講義方法	グループワークによる実習形式をとる。各グループにおいて課題を具体化し、次の手順で調査準備を行う(企画)。(1)関連資料・情報の収集(情報検索、文献収集)とまとめ、(2)調査対象を選定、(3)調査企画書作成(タイトル、キーワード、趣旨説明、調査対象、情報収集の方法、記録方法と道具、協力者・団体、日程、費用、作業分担、参考文献・資料一覧など)。(4)現地の下見と企画再検討。実際の調査とそのまとめ(実践)は、次の手順で行う。(1)調査依頼、交渉、機材、道具の準備、(2)現場での取材、記録(本調査と補足調査)、(3)記録・資料作成(録音の文字化、写真、ドキュメントなどの整理)、(4)報告書作成。準備(1)～(4)、実践(1)～(4)のプロセスを意識的に行うことによって、調査を具体的な作業の連携とプロセスとしてとらえ、企画力と実践力を養う。

準備学習	社会調査基礎演習、社会調査法Ⅰ・Ⅱなど、社会調査関連の科目で学習した、調査法を復習しておく。
成績評価	出席(準備と調査の実施)、調査報告書作成、報告会でのプレゼンテーション
講義構成	<p>1.構成 授業の構成は、2つの段階に分ける。ゼミナールⅢでは、研究テーマから調査企画へと具体化し、実践に向けての準備をすすめる。1つ1つの作業を認識し分担しながら協働作業としてどのように連携させていくかをグループワークのなかで学んでいく。調査のプロセスについての概論講義(4回)、調査設計と予備調査とそのまとめ(8回)、調査企画書作成(2回)と検討会(1回)は、一般教室とパソコン室、図書館など、大学内での活動が中心となる。ゼミナールⅣでは、集中の形式をとり、実際の調査日程の状況に合わせて行うが、次のような内容と時間配分である。現地での調査(5回)、記録作成と資料整理(4回)、補充調査(2回)と報告書作成(3回)、発表会(1回))という構成である。調査は、各グループが選定した調査地を訪問するため学外での活動となる。記録整理、資料作成、報告書作成は、一般教室とパソコン室での作業が中心となる。</p> <p>2. 調査テーマ 調査のテーマは、「仕事」である。各グループは、これに2つのキーワード(たとえば、仕事・技術・地域)を組み合わせ、何を調査するのか課題を明確に設定していく。事前の情報収集や調査企画の段階で作業仮説をたてるが、調査地での参与観察、取材をとおしてえた情報、資料から実態と問題を把握していくプロセスを重視する。</p> <p>3. 調査の範囲/対象 調査地域は、日帰りで取材することができる阪神間とし、取材の対象は、個人の場合もあれば、個人を含む店舗や組織などの場合もある。グループごとに調査テーマを設定し、現場ではインタビューや記録などの作業を分担して行うが、全員がインタビュアーとしての役割を一度は体験する。</p> <p>4. 調査方法、項目 現場を訪問し関係者へのインタビューと、組織や場所についての情報収集(参与観察、資料収集、写真撮影、スケッチなど)を行う。具体的な調査項目は、調査対象の基本的属性にくわえ、各グループ、取材者が設定したテーマに沿う。取材前にインタビューフロー案(調査項目、質問項目、時間配分、チェックポイント)をA4用紙1枚にまとめる。フロー案を作成することによって現場を想定した準備を行うが、現地では、現場の状況におうじて取材内容も展開していく。参与観察をとおして収集する情報をどのように記録するか(写真・ビデオ撮影、スケッチ、空間配置などの図画、ドキュメント収集・管理・整理法)を事前に検討する。</p>
教科書	西川麦子『フィールドワーク探求術—気づきのプロセス、伝えるチカラ』ミネルヴァ書房、2010
参考書・資料	「社会調査工房オンライン」(甲南大学社会学科)
講義関連事項	学生自身は、企画・調査実施・分析・報告書作成、発表会のすべてを担っている。教員とティーチング・アシスタントは調査プロセスの講義や情報収集、記録作成、報告書作成の技術的な指導は行うが、実際の調査においては補助・助言の位置にとどめる。

授業コード	13J06		
授業科目名	ゼミナールⅢ(中里)(前)		
担当者名	中里英樹(ナカザト ヒデキ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜昼休み。火・水・金曜日のその他の時間も、メール等での予約を随時受け付けます。		

講義の内容	報告とディスカッション、自分の研究テーマの発見、関連先行研究の探索などの方法を学びつつ、実践する。また、調査のためのグループを組織し、調査を開始する。
到達目標	論文をまとめ批判的にコメントの出来る力をつける。 口頭報告のおよび質問の技法を身につける。 グループのメンバー同士で分担をしながら調査を進める調整力および責任感を身につける。
講義方法	報告とディスカッション、社会調査工房(コモンルーム)でのグループミーティングにより進める。
準備学習	授業時間外での調査や準備作業が求められる
成績評価	出席、報告、授業内での発言、提出課題などを総合的に評価する。
講義構成	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ調査の実施 ・中間報告 ・報告書の作成 ・最終報告
教科書	テキストは用いず、適宜資料を配付する。

参考書・資料	受講生の関心に応じて随時紹介する。
--------	-------------------

授業コード	13J07		
授業科目名	ゼミナールIII (宮垣)(前)		
担当者名	宮垣 元(ミヤガキ ゲン)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	前期火・水曜の12時10分～13時がオフィスアワーですので、この時間は自由に来て頂いて結構です。それ以外の時間については、メールで事前に連絡をしてください。		

講義の内容	受講生の関心に基づく様々なテーマについての議論を通じて、社会学的想像力の涵養を行う。また、個々人の研究するテーマを定め、専門的な研究としてそれを自ら推進し、発表していく。並行して、ディスカッションの方法と進め方、テーマ設定と議論の組み立て方、研究計画書の作成、先行研究へのアクセスと把握、文献リストの作成と文献購読、プレゼンテーション・執筆の方法などを段階的に行う。
到達目標	個々の研究テーマに基づき、研究構想の発表やそれに必要となるディスカッションを通して、「思いつき」の議論ではなく、根拠や論理性、妥当性を踏まえての議論ができるようになることが目標である。ゼミ全体としては、お互いの研究関心を自分の問題として捉え、互いに切磋琢磨できるような関係となることを目指したい。
講義方法	受講生による発表と議論が中心となる。必要に応じ文献購読も行う。
準備学習	個人、グループによる発表が主体となるので、そのための毎週の準備(調査、まとめ、プレゼンテーションの準備など)が求められる。
成績評価	毎回の出席を前提とし、発表内容、議論への参加により評価を行う。
講義構成	スケジュールと内容、方法、発表担当などは初回に説明します。
教科書	教科書は特に指定しない。
参考書・資料	参考文献・資料は必要に応じ随時紹介する。

ホームページタイトル	社会調査工房オンライン
URL	http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/

授業コード	13J08		
授業科目名	ゼミナールIII (星)(前)		
担当者名	星 敦士(ホシ アツシ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜日4限目。それ以外の時間はメールで予約してください。		

講義の内容	論文を書くために必要な様々なスキルを扱います。まあスキルといっても研究テーマをどうやって見つけるか、本をどうやって探すか、探した本をどうまとめるか、研究方法の選び方など様々な要素がありますが、まずは自分の研究テーマを決めるところまでが中心になると思います。
到達目標	前期の終わり頃には何となくでも「これ」という自分の研究テーマが決まっていたらいいですね！
講義方法	参加者によるプレゼンが中心です。いろいろなスタイルで発表してもらいます。
準備学習	あまり深く考えすぎず、でも積極的に、日常生活のなかでテーマ探しをしてください。一度決めたテーマがポシャっても落ち込まないように。
成績評価	出席、発表内容、ゼミ運営への貢献によって評価します。4回以上欠席した場合は単位評価しません。
講義構成	参加者による発表が中心です。発表内容は各ゼミ生の進捗状況を勘案して決めます。
教科書	使用しません

参考書・資料	適宜紹介します
--------	---------

授業コード	13J09		
授業科目名	ゼミナールIII (田野)(前)		
担当者名	田野大輔(タノ ダイスケ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	火曜・水曜・木曜の昼休み、および木曜5限。必要な場合はメールで連絡すること。dtano@nifty.com		

講義の内容	受講生の関心をふまえ、テーマ設定、文献収集、資料分析、論文執筆の方法を指導する。
到達目標	受講生各々が、テーマ設定、文献収集、資料分析、論文執筆の方法を習得することをめざす。
講義方法	受講生の研究報告と、それについての討論を中心に進める。
準備学習	必要に応じて指示する。
成績評価	研究報告の内容によって評価する。
講義構成	初回のゼミで報告順を決定し、各回原則2人ずつ研究発表と討論を行う。
教科書	必要に応じて指示する。
参考書・資料	必要に応じて指示する。

担当者から一言	明確な問題意識と綿密な資料調査なしには、すぐれた論文は書けない。そのためには労を惜しまないこと。
---------	--

授業コード	13J10		
授業科目名	ゼミナールIII (阿部)(前)		
担当者名	阿部真大(アベ マサヒロ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	水曜日 昼休み		

講義の内容	自由発表ゼミ 各自が発表し、議論することで、みずからの研究テーマを深める。
到達目標	みずからの研究テーマを深める。
講義方法	ゼミ方式
準備学習	自分の気になるテーマについて、新聞やニュース等でチェックしておくこと。
成績評価	出席、参加態度から総合的に評価する。
講義構成	① 報告者による発表 ② 参加者と報告者との間の質疑応答 ③ 全体討論 ④ まとめ ⑤ 次回の課題の発見
教科書	特定の教科書は使用しない。
参考書・資料	特に指定しない。
講義関連事項	内容については進度に応じて若干の変更の可能性あり。

担当者から一言	ゼミナールIVに続きます。
---------	---------------

授業コード	13K01		
授業科目名	ゼミナールⅣ(野々山)(後)		
担当者名	野々山久也(ノノヤマ ヒサヤ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	月・火(12:10~13:00)。そのほかひつようがあれば、電話078-435-2379やメール:nonoyama@konan-u.ac.jpなどにて予約してください。		

講義の内容	小集団によるゼミナール形式である。ゼミ・テーマは、「現代家族と生活福祉」としているが、ゼミ参加者の関心にしたがって、研究をすすめることを奨励している。毎回のゼミ発表を中心にして展開されるが、報告時間は、30~40分程度で、まず大きな質疑応答を行ない、そのうえでテーマにしたがったバズセッションを、さらに3~4人のグループに分かれて持つ。15分~20分のバズセッションのあと、元に戻って、グループごとの討議の内容と結論に関する報告を行なう。あおのうえで全員で、それを討議しあう。毎回、なかなか騒がしいゼミとなるが、討論を終えた後は、各自が1つの課題をクリアした達成感を抱くことになる。
到達目標	報告予定者が準備してきた個別発表の内容をチェックして質疑応答のうえ、研究発表の問題点や今後を検討すべき方向づけを行なう。ゼミⅣは、2年時に検討してきた各自のテーマをさらに深めて最終的にはゼミ論にまで完成させることを目標とする。
講義方法	講義形式ではない。講義方法については、ゼミナール方式としておく。各自で発表内容を調べてきて、それを報告要旨(A3を2枚程度)にまとめてきて報告する。そのあと、質疑応答の後、小グループに分かれてバズセッションを行う。最終的に、報告のまとめを行う。
準備学習	各自、自らの研究テーマにしたがって関連文献を検索し、それを参考にしながら必要な資料とともにゼミ発表として報告できるように纏めてくる。常に研究テーマに関して新聞やマスメディアなどの情報を収集するべく怠りなく準備していること。
成績評価	ゼミ出席とゼミ発表、ゼミでの討論参加、そしてレポートなどによって総合評価する。
講義構成	開講時に指示する。
教科書	とくに教科書は指定しない。参考文献については、つど指示する。
参考書・資料	つど指示していく。

授業コード	13K02		
授業科目名	ゼミナールⅣ(森田)(後)		
担当者名	森田三郎(モリタ サブロウ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜3限
特記事項	自動登録		

講義の内容	卒業研究につながる自主的研究として、ゼミⅢに引き続き、ゼミ論研究を行って貰います。また、時間の効率的な使い方についても学びます。
到達目標	「ゼミ論」を作成する過程を通した、社会的事象の分析力とプレゼン力の向上
講義方法	受講生が各自、ゼミ論の研究成果を発表し、指導教員を含むゼミメンバー全員がコメントをします。特に、指導教員は研究の方向性、参考文献、適切なフィールド、方法、調査対象の紹介など、多方面にわたって、個別支援をします。
準備学習	毎回、各自のレベルと課題に応じた課題を出します。
成績評価	出席、そして調査活動の成果としての「ゼミ論」を、集団討議の上、最終的には教員が評価します。 評価の基準は、 (1)どの程度オリジナリティがあるか。 (これまでに無かった研究対象、研究する視点、手法などがあつたか) (2)議論が正確であるか。

	<p>(テーマに関して、証拠としてあげてるデータが正確なものと言えるか)</p> <p>(3)議論が妥当であるか。</p> <p>(テーマに関して、主張する根拠が、そのテーマに相応しいデータになっているか)</p> <p>(4)自ら動いて、直接データを集めたか。</p> <p>(自らが直接観察、インタビュー、アンケートなどを実施して集めた資料に基づいた根拠をあげているか。コピペは、最低評価になります)</p> <p>(5)本文12000字以上あるか。</p> <p>(6)出席率</p> <p>(出席は、他のゼミ生に対するコメントに反映しますから、貢献度を表します)</p>
講義構成	ゼミ生全員が各自の研究成果を、その方法も含めて順番に発表します。それに対して、教員および、他のゼミ仲間がコメントをします。発表者は、そのコメントを活かし、さらに研究を深めます。発表は通常の授業の時に、2回。12月のゼミ合宿の時には、最終稿を2、3回生のゼミ生もいる前で発表し、コメントを貰います。
教科書	ありません
参考書・資料	個別に紹介します。
担当者から一言	3回生は、大学のゼミ活動で最も集中できる時期です。ここでゼミ論を頑張って、就職活動の時に、胸を張って面白い自主研究をやったといきましょう。頑張れ！！

授業コード	13K03		
授業科目名	ゼミナールⅣ(大津)(後)		
担当者名	大津真作(オオツ シンサク)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	火曜日昼休み		

講義の内容	ワーキングプアなど雇用破壊の現状を調査する。司法の現状と裁判員制度を調査する		
到達目標	現代日本社会を理解する力がつく		
講義方法	偽装請負、二重派遣などをグループに分かれて具体的に調査する。 裁判員制度関連の法律などを調査する		
準備学習	テレビ新聞のニュースを知っておく		
成績評価	レポート		
講義構成	労働者派遣法について、派遣法改正について、雇用破壊の現状について 裁判員制度の内容について、死刑制度について		
教科書	『裁判員制度の正体』 『雇用破壊』東洋経済新報社		
参考書・資料	『労働ダンピング』岩波新書 『労働関係法規集』労働政策研究機構		
講義関連事項	格差社会となった日本の現状と問題点		
担当者から一言	社会問題で卒業論文を書いて欲しい。		

授業コード	13K04		
授業科目名	ゼミナールⅣ(菅)(後)		
担当者名	菅 康弘(スガ ヤスヒロ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	お互いに空いている時間をメールで応談の上		

講義の内容	卒業研究に向けての中間ステップという以上に、卒業研究の方向性を固めるために、自分なりの『素材』を探求し、まとめることとする。
到達目標	「論ずる」ということを習得する。そして、「卒業研究」に至るまで、何を・どのようにすべきかを、明確な形で把握すること。
講義方法	個人発表。語るべき内容、視点、必要なデータ、それらの所在・探索方法などについて適宜アドバイスをする
準備学習	社会に常にアンテナを張り、 ・きちっと自分なりのテーマをもつ ・論ずる内容に応じたデータを取得すること。
成績評価	平常点。発表内容を主体に、質疑応答なども加味する
講義構成	第5クール 引き続き各自の自由発表。前半に1回、後半に1回の計2回発表。卒業研究に向け、道筋を立てる。テーマ選択・研究の形式は各自の自由である。ただし、説得的な語りのスタイルを習得してもらうため、適宜コメントをす
教科書	使用しない。随時、参考となる文献・記事・サイト・番組などを紹介する。ただ、広い意味では日常のさりげない出来事の連続が‘教科書’である。アンテナを張っておくことをお忘れなく！
担当者から一言	常に「ミーハー」であることを忘れずに！

授業コード	13K05		
授業科目名	ゼミナールⅣ(西川)(集中)		
担当者名	西川麦子(ニシカワ ムギコ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	木曜昼休み		

講義の内容	社会調査の一連のプロセス(構想・企画、調査設計、情報収集、記録、データ整理、報告書作成、発信と交信)を体験的に学ぶことを目的とする。人と場所とに関わりながら調査を行うフィールドワークを実施する。インタビューと、観察やドキュメント収集など、複数の方法を組み合わせ対象を多角的な視点からとらえ、情報を記録し資料として提示し、分析、考察していく。
到達目標	現場から課題を見出し情報を集め、記録を作成・整理し、分析・考察を行い、報告書を作成するという一連の調査プロセスを実践することを目的とする。
講義方法	グループワークによる実習形式をとる。各グループにおいて課題を具体化し、次の手順で調査準備を行う(企画)。(1)関連資料・情報の収集(情報検索、文献収集)とまとめ、(2)調査対象を選定、(3)調査企画書作成(タイトル、キーワード、趣旨説明、調査対象、情報収集の方法、記録方法と道具、協力者・団体、日程、費用、作業分担、参考文献・資料一覧など)。(4)現地の下見と企画再検討。実際の調査とそのまとめ(実践)は、次の手順で行う。(1)調査依頼、交渉、機材、道具の準備、(2)現場での取材、記録(本調査と補足調査)、(3)記録・資料作成(録音の文字化、写真、ドキュメントなどの整理)、(4)報告書作成。準備(1)～(4)、実践(1)～(4)のプロセスを意識的に行うことによって、調査を具体的な作業の連携とプロセスとしてとらえ、企画力と実践力を養う。
準備学習	社会調査基礎演習、社会調査法Ⅰ・Ⅱなど、社会調査関連の科目で学習した、調査法を復習しておく。
成績評価	出席(準備と調査の実施)、調査報告書作成、報告会でのプレゼンテーション
講義構成	1.構成 授業の構成は、2つの段階に分ける。ゼミナールⅢでは、研究テーマから調査企画へと具体化し、実践に向けての準備をすすめる。1つ1つの作業を認識し分担しながら協働作業としてどのように連携させていくかをグループワークのなかで学んでいく。調査のプロセスについての概論講義(4回)、調査設計と予備調査とそのまとめ(8回)、調査企画書作成(2回)と検討会(1回)は、一般教室とパソコン室、図書館など、大学内での活動が中心となる。ゼミナールⅣでは、集中の形式をとり、実際の調査日程の状況に合わせて行うが、次のような内容と時間配分である。現地での調査(5回)、記録作成と資料整理(4回)、補充調査(2回)と報告書作成(3回)、発表会(1回))という構成である。調査は、各グループが選定した調査地を訪問するため学外での活動となる。記録整理、資料作成、報告書作成は、一般教室とパソコン室での作業が中心となる。 2. 調査テーマ 調査のテーマは、「仕事」である。各グループは、これに2つのキーワード(たとえば、仕事・技術・地域)を組み合わせ、何を調査するのか課題を明確に設定していく。事前の情報収集や調査企画の段階で作業仮説をたてる

	<p>が、調査地での参与観察、取材をとおしてえた情報、資料から実態と問題を把握していくプロセスを重視する。</p> <p>3. 調査の範囲／対象 調査地域は、日帰りで取材することができる阪神間とし、取材の対象は、個人の場合もあれば、個人を含む店舗や組織などの場合もある。グループごとに調査テーマを設定し、現場ではインタビューや記録などの作業を分担して行うが、全員がインタビューアーとしての役割を一度は体験する。</p> <p>4. 調査方法、項目 現場を訪問し関係者へのインタビューと、組織や場所についての情報収集(参与観察、資料収集、写真撮影、スケッチなど)を行う。具体的な調査項目は、調査対象の基本的属性にくわえ、各グループ、取材者が設定したテーマに沿う。取材前にインタビューフロー案(調査項目、質問項目、時間配分、チェックポイント)をA4用紙1枚にまとめる。フロー案を作成することによって現場を想定した準備を行うが、現地では、現場の状況におうじて取材内容も展開していく。参与観察をとおして収集する情報をどのように記録するか(写真・ビデオ撮影、スケッチ、空間配置などの図画、ドキュメント収集・管理・整理法)を事前に検討する。</p>
教科書	西川麦子『フィールドワーク探求術—気づきのプロセス、伝えるチカラ』ミネルヴァ書房、2010
参考書・資料	「社会調査工房オンライン」(甲南大学社会学科)
講義関連事項	学生自身は、企画・調査実施・分析・報告書作成、発表会のすべてを担っている。教員とティーチング・アシスタントは調査プロセスの講義や情報収集、記録作成、報告書作成の技術的な指導は行うが、実際の調査においては補助・助言の位置にとどめる。

授業コード	13K06		
授業科目名	ゼミナールⅣ(中里)(後)		
担当者名	中里英樹(ナカザト ヒデキ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜昼休み。火・水・金曜日のその他の時間も、メール等での予約を随時受け付けます。		

講義の内容	卒業研究の準備段階として、受講生の研究関心をふまえて、文献収集、調査、論文執筆の方法を指導する。また受講生相互の報告とディスカッションを通じて、多様な問題や考え方に触れ、視野を広げる。		
到達目標	卒業研究のテーマを確定し、適切な先行研究を見つけ、内容を整理する。 研究に必要な調査の企画を立てる。		
講義方法	受講生自身の研究報告とそれに関する議論を中心とする。また必要に応じて、担当教員から必要資料等を配布、提示する。		
準備学習	卒業研究に必要な文献探索、報告準備など、多くの準備学習が求められる。		
成績評価	ゼミ中の報告・発言・提出物(ゼミ論を含む)により評価する		
講義構成	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマの設定に関する解説と報告 ・先行研究の収集に関する解説と報告 ・論文の書き方に関する解説 ・ゼミ論の作成と指導 ・ゼミ論中間報告 		
教科書	テキストは用いず、適宜資料を配付する。		
参考書・資料	受講生の関心に応じて随時紹介する。		

授業コード	13K07		
授業科目名	ゼミナールⅣ(宮垣)(集中)		
担当者名	宮垣 元(ミヤガキ ゲン)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		

オフィスアワー	前期火・水曜の12時10分～13時がオフィスアワーですので、この時間は自由に来て頂いて結構です。それ以外の時間については、メールで事前に連絡をしてください。
講義の内容	受講生の関心に基づく様々なテーマについての議論を通じて、社会学的想像力の涵養を行う。また、個々人の研究するテーマを定め、専門的な研究としてそれを自ら推進し、発表していく。並行して、ディスカッションの方法と進め方、テーマ設定と議論の組み立て方、研究計画書の作成、先行研究へのアクセスと把握、文献リストの作成と文献購読、プレゼンテーション・執筆の方法などを段階的に行う。
到達目標	ゼミナールⅢに引き続き、個々の研究テーマに基づき、研究構想の発表や進捗発表、それに必要となるディスカッションを行う。これまでの議論を通じて、個々の研究成果を、オリジナルのゼミナール論文としてまとめることが目標となる。
講義方法	受講生による発表と議論が中心となる。必要に応じ文献購読も行う。
準備学習	個人、グループによる発表が主体となるので、そのための毎週の準備(調査、まとめ、プレゼンテーションの準備など)が求められる。
成績評価	毎回の出席を前提とし、発表内容、議論への参加により評価を行う。
講義構成	スケジュールと内容、方法、発表担当などは初回に説明します。
教科書	教科書は特に指定しない。
参考書・資料	参考文献・資料は必要に応じ随時紹介する。
ホームページタイトル	社会調査工房オンライン
URL	http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/

授業コード	13K08		
授業科目名	ゼミナールⅣ(阿部)(後)		
担当者名	阿部真大(アベ マサヒロ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	水曜日 昼休み		

講義の内容	自由発表ゼミ 各自が発表し、議論することで、みずからの研究テーマを深める。
到達目標	みずからの研究テーマを深める。
講義方法	ゼミ方式
準備学習	自分の気になるテーマについて、新聞やニュース等でチェックしておくこと。
成績評価	出席、参加態度から総合的に評価する。
講義構成	① 報告者による発表 ② 参加者と報告者との間の質疑応答 ③ 全体討論 ④ まとめ ⑤ 次回の課題の発見
教科書	特定の教科書は使用しない。
参考書・資料	特に指定しない。
講義関連事項	内容については進度に応じて若干の変更の可能性あり。
担当者から一言	ゼミナールⅤへ続きます。

授業コード	13K09
授業科目名	ゼミナールⅣ(星)(後)
担当者名	星 敦士(ホシ アツシ)

配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜日4限目。それ以外の時間はメールで予約してください。		

講義の内容	ゼミⅢに引き続き論文を書くために必要な様々なスキルを扱いますが、個別の研究発表が中心になります。最後に論文という形で研究成果を提出してもらいます。卒業論文を書くための準備運動だと思ってください。
到達目標	論文という形で文章を書くことを経験することです。
講義方法	参加者によるプレゼンが中心です。いろいろなスタイルで発表してもらいます。
準備学習	たとえ研究は1人でやっても、つらくなったり分からないことがあったらゼミ生同士で助け合しましょう(慰め合うだけにならないように……)。
成績評価	出席、発表内容、ゼミ運営への貢献など平常点と、論文の提出によって評価します。4回以上欠席した場合は単位評価しません。
講義構成	参加者による発表が中心です。発表内容は各ゼミ生の進捗状況を勘案して決めます。
教科書	使用しません。
参考書・資料	適宜紹介します。

授業コード	13K10		
授業科目名	ゼミナールⅣ(田野)(後)		
担当者名	田野大輔(タノ ダイスケ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	火曜・水曜・木曜の昼休み、および木曜5限。必要な場合はメールで連絡すること。dtano@nifty.com		

講義の内容	受講生の関心をふまえ、テーマ設定、文献収集、資料分析、論文執筆の方法を指導する。
到達目標	受講生各々が、テーマ設定、文献収集、資料分析、論文執筆の方法を習得することをめざす。
講義方法	受講生の研究報告と、それについての討論を中心に進める。
準備学習	必要に応じて指示する。
成績評価	研究報告の内容によって評価する。
講義構成	初回のゼミで報告順を決定し、各回原則2人ずつ研究発表と討論を行う。
教科書	必要に応じて指示する。
参考書・資料	必要に応じて指示する。

担当者から一言	明確な問題意識と綿密な資料調査なしには、すぐれた論文は書けない。そのためには労を惜しまないこと。
---------	--

授業コード	13L01		
授業科目名	ゼミナールⅤ(野々山)(後)		
担当者名	野々山久也(ノノヤマ ヒサヤ)		
配当年次	4年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜4限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	月・火(12:10~13:00)。そのほか必要があれば、電話078-435-2379やメール:nonoyama@konan-u.ac.jpなどにて予約してください。		

講義の内容	最終ゼミナールということで、これまでゼミナールⅠ～Ⅳまで研究を積み上げてきた各自のテーマに関しての内
-------	--

	容を整理すると共に、各自で自らの仮説を立て、その実証的研究に取り組む。ゼミナールでは、このことを主として追究する形式をとる。実際にフィールドに出て、インタビュー調査を行ったり、アンケート調査を行ったりすることになる。あるいは、図書館などで資料の加工を行なうことになる。そのうえで、各自がそのデータの分析を行ない、ゼミ生のまゝで発表することとおして、内容を深めていく。最終的には、各自で卒業にまとめていくことになる。
到達目標	ゼミナールⅠ～Ⅳまでに積み重ねてきた各自の研究テーマを最終的に体系化することを目標にする。大学4年間の集大成であると言ってもよい。卒業研究(集中講義)と並行して指導も行っていく。最終的目標は、卒業論文にまとめあげることである。
講義方法	ゼミナールでの全体報告の形式や個別指導の形式をとって研究を進めていく。講義ではないので、講義方法という項目では表現しにくい。各自の研究にそった指導を行なっていく。
準備学習	改めて準備学習などということもない。すでにこれまでに蓄積してきた研究をさらに進化させていくためにデータ収集に備えることが重要である。それは様々な社会調査法を活用することでもある。怠りないように。
成績評価	ゼミ出席とゼミ発表、並びにゼミ討論への積極的な参加とレポートにて総合評価する。
講義構成	開講時に指示する。
教科書	とくに教科書は指定しない。参考文献については、つど指示する。
参考書・資料	つど指示していく。
担当者から一言	無断欠席は、一切認めません。

授業コード	13L02		
授業科目名	ゼミナールV(森田)(後)		
担当者名	森田三郎(モリタ サブロウ)		
配当年次	4年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜2限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	電話またはメールにて相談して予約。あるいはゼミの時に予約してください。		

講義の内容	受講生一人一人が、自分のゼミ論を受けて、さらにレベルの高い卒業研究につなげるのもいいし、独自の問題をあたりに設定して頑張るのもいい。自分らしさが一番で、この時点で自分がいちばん気になる問題に取り組む。ただし、それぞれのケースに応じてビデオや写真などの利用を含め、他の人々に、その研究の面白さと重要性が伝わるように書く。
到達目標	社会に通用する分析力とプレゼン力をつけると同時に、もんだ緒を見つけ、分析し、人に伝えることの楽しさを自分のものとする。
講義方法	受講生が各自、卒業研究の研究発表を、指導教員を含むゼミメンバー全員がコメントをします。特に、指導教員は研究の方向性、参考文献、適切なフィールド、方法、調査対象の紹介など、多方面にわたって、個別支援をします。
準備学習	毎回、各自のテーマに応じた課題を出します。
成績評価	出席率、および「卒業研究」におけるゼミでの研究発表内容と応答を、総合的に評価します。 評価の基準は、 (1)どの程度オリジナリティがあるか。 (これまでに無かった研究対象、研究する視点、手法などがあつたか) (2)議論が正確であるか。 (テーマに関して、証拠としてあげているデータが正確なものと言えるか) (3)議論が妥当であるか。 (テーマに関して、主張する根拠が、そのテーマに相応しいデータになっているか) (4)自ら動いて、直接データを集めたか。 (自らが直接観察、インタビュー、アンケートなどを実施して集めた資料に基づいた根拠をあげているか。コピペは、最低評価になります) (5)本文で16000字以上あるか。 (6)出席率 (出席は、他のゼミ生に対するコメントに反映しますから、貢献度を表します)
講義構成	ゼミ生全員が各自の研究発表を、その方法も含めて順番に発表します。それに対して、教員および、他のゼミ仲間がコメントをします。発表者は、そのコメントを活かし、さらに研究を深めます。発表は通常の授業の時に、2回。12月のゼミ合宿の時には、最終稿を2、3回生のゼミ生もいる前で発表し、コメントを貰います。

教科書	なし
担当者から一言	4回生後期は、大学生活の最後の時期です。社会に出てもとまどわない力を十分に養い、自分をもう一段向上させるよう、頑張ってください。

授業コード	13L03		
授業科目名	ゼミナールⅤ(大津)(後)		
担当者名	大津真作(オオツ シンサク)		
配当年次	4年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜4限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	火曜日昼休み		

講義の内容	卒業論文を各自のテーマに沿って書くための指導を行う。		
到達目標	現代日本社会を説明する力がつく		
講義方法	各自の卒業論文の構想と文章に対するコメント		
準備学習	日々のニュースをスクラップして知っておく		
成績評価	卒業論文の完成と諮問		
講義構成	各自への指導		
教科書	『財政とは何か』神野直彦、岩波書店		

担当者から一言	客観的視点とともに批判的視点を忘れないこと
---------	-----------------------

授業コード	13L04		
授業科目名	ゼミナールⅤ(西川)(前)		
担当者名	西川麦子(ニシカワ ムギコ)		
配当年次	4年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	火曜日昼休み		

講義の内容	個人研究の発表と議論。		
到達目標	各自の研究テーマを明確にし、論拠となる資料を分かりやすく提示して分析、考察をまとめ、これにもとづき参加者のあいだでの議論ができること。		
講義方法	演習形式		
準備学習	これまでのゼミナール研究の経緯をふまえ、各自の研究テーマについての概論をまとめ、何に着目し、どのようにアプローチするのか、課題を方法を明確にしておく。		
成績評価	出席、レポート、面接試験		
講義構成	4月は各自の研究計画、テーマについての報告、5月以降は、毎回3名ずつ研究調査の内容を報告、これにもとづいて参加者のあいだでの議論をすすめる。7月は、2回生、3回生のゼミ生と合同で、各自の研究の中間発表会を行う。		
教科書	必要に応じて資料を配布する		

授業コード	13L05		
-------	-------	--	--

授業科目名	ゼミナールV(中里)(後)		
担当者名	中里英樹(ナカザト ヒデキ)		
配当年次	4年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜4限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜昼休み。火・水・金曜日のその他の時間も、メール等での予約を随時受け付けます。		

講義の内容	卒業論文作成にむけて、文献収集、調査、論文執筆の方法を指導する。また論文の質を向上させることができるよう中間報告とディスカッションを通じて、受講生が相互の研究を批判的に検討する。
到達目標	4年間の集大成にふさわしい質の論文を完成させる。 ゼミ生同士が互いに論文の執筆に役立つ助言や批評をできる力をつける。
講義方法	受講生自身の研究報告とそれに関する議論を中心とする。また必要に応じて、担当教員から必要資料等を配布、提示する。
準備学習	各自中間報告および卒論執筆に向けて準備する必要がある。
成績評価	報告・発言を評価する。
講義構成	ゼミ1回につき2人または3人のゼミ生が卒業研究中間報告を行う。一人当たり計2回の卒業研究中間報告を行う。 報告者以外のゼミ生は、質問・コメントを1回のゼミに必ず1回は行う。
教科書	テキストは用いず、適宜資料を配付する。
参考書・資料	講生の論文テーマに応じて随時紹介する。

授業コード	13L06		
授業科目名	ゼミナールV(宮垣)(前)		
担当者名	宮垣 元(ミヤガキ ゲン)		
配当年次	4年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜3限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	前期火・水曜の12時10分～13時がオフィスアワーですので、この時間は自由に来て頂いて結構です。それ以外の時間については、メールで事前に連絡をしてください。		

講義の内容	受講生の関心に基づく様々なテーマについての議論を通じて、社会学的想像力の涵養を行う。また、個々人の研究するテーマを定め、専門的な研究としてそれを自ら推進し、発表していく。並行して、ディスカッションの方法と進め方、テーマ設定と議論の組み立て方、研究計画書の作成、先行研究へのアクセスと把握、文献リストの作成と文献購読、プレゼンテーション・執筆の方法などを段階的に行う。
到達目標	ゼミナール論文を踏まえ、個々の研究テーマを深め、研究構想の発表や進捗発表、それに必要となるディスカッションを行う。このことを通じて、それぞれが専門レベルでの「自分の研究テーマ」を確立できるようになることが目標となる。
講義方法	受講生による発表と議論が中心となる。必要に応じ文献購読も行う。
準備学習	個人、グループによる発表が主体となるので、そのための毎週の準備(調査、まとめ、プレゼンテーションの準備など)が求められる。
成績評価	毎回の出席を前提とし、発表内容、議論への参加により評価を行う。
講義構成	スケジュールと内容、方法、発表担当などは初回に説明します。
教科書	教科書は特に指定しない。
参考書・資料	参考文献・資料は必要に応じ随時紹介する。

ホームページタイトル	社会調査工房オンライン
URL	http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/

授業コード	13L07		
授業科目名	ゼミナールV(星)(後)		
担当者名	星 敦士(ホシ アツシ)		
配当年次	4年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	木曜4限
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜日4限目。それ以外の時間はメールで予約してください。		

講義の内容	卒業論文の進捗状況を発表してもらって、それをみんなで検討します。1人で研究しているとたまに落ち込んだり暗くなったりしますので、ゼミで発表して他の人に慰めてもらってください。検討する側の人は批判することも大事ですができるだけ発表のなかに良い点を見つけてそれを伸ばしてあげましょう。
到達目標	どんなテーマについてでもお互いに意見を出し合えるようになればいいですね。
講義方法	参加者によるプレゼンが中心です。
準備学習	発表する時に「しゃべることがない……」という状態にならないよう日頃から少しずつ研究を進めておいてください。
成績評価	出席、発表内容、ゼミ運営への貢献など平常点と、論文の提出によって評価します。4回以上欠席した場合は単位評価しません、しませんけど……就活とか大変な時は個別に相談してください……。
講義構成	参加者による発表が中心です。発表内容は各ゼミ生の進捗状況を勘案して決めます。
教科書	使用しません
参考書・資料	適宜紹介します

授業コード	13L08		
授業科目名	ゼミナールV(平松)(後)		
担当者名	平松 闊(ヒラマツ ヒロシ)		
配当年次	4年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	自動登録		

講義の内容	卒業研究を書き上げるためのゼミナールです。ここでは、3年生で書き上げた「ゼミ論」を土台にしなが、それぞれ複数の「社会調査」を実施すること、そして自らのテーマを深めるための報告、討論、ディフェンスを毎週繰り返しおこなうことを目的とします。卒論に向けてのゼミナールです。
到達目標	このゼミナールは、卒論の書きあげを目標に据えた毎週の、報告、討論、ディフェンスを行うもので、最終の目標は、各自の卒論の完成です。そのために、毎回みずからの目標を設定し、それに向かったゼミナールをおこない、積み重ねによって、「はじめて書く論文」の書き方を習得することを目指す。
講義方法	基本的には、学生自ら「卒業研究」を完成させるための準備作業をおこない、調べて来たことを報告し、討論し、ディフェンスすることです。さらに、自ら「社会調査」を実施し、それを分析、解釈、考察を行い、それを皆の前で報告し、そのことを通してテーマを進化させ、最終的に「卒業研究」へと仕上げていく。こうした一連の作業がスムーズに進むよう指導する。
準備学習	卒論を書くためのゼミナールでの作業であり、日常的に自らのテーマを意識し、それについて、資料を調べ、調査を実施し、分析したものを報告、討論することを心がけることをしてください。
成績評価	ゼミナールVの最終的な成果は、「卒業研究」に集約されるが、それを完成させるためには日頃の「ゼミナール」で報告、討論、ディフェンスが重要である。こうした日頃の作業の出来がこのゼミナールの評価となる。したがって、きっちり出席して自らの作業を継続的にこなす必要がある。これらをきっちり指導しながら、評価をおこないたい。3分の1以上の欠席の場合は、単位を認めることはできません。
講義構成	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生が自らのテーマを調べてきて、それを報告し、討論し、ディフェンスをおこない、それを他のゼミ生とともにサポートし、指導する。 2. 学生自ら「社会調査」を実施できるよう、サポートすると同時に強力にそれを指導する。 3. 学生が、卒業研究をスムーズにおこなうことができるように、あらゆるサポートをおこなう。

	4. 最終的には、「卒業研究」の完成をみとどける。
教科書	このゼミナールでは、とくに共通した教科書を必要としません。自らのテーマに関する参考文献、資料、調査記録などが「教科書」といえます。
担当者から一言	卒論に向けて、みんなで頑張ろう！！

授業コード	13034		
授業科目名	創作過程論(映像文化論II) (集中)		
担当者名	宜野座菜央見(ギノザ ナオミ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)

講義の内容	この講義では、これまで「当たり前」に受け止めていた映像経験を再考し、「構成されたもの」として認識することを主眼とします。以下の問題を取り上げ、テーマに即して映画作品を視聴しながら、検討していきます。 ①日本の言語文化の中で生活する私たちが、外国のTV番組・映画を視聴する際、どれだけ日本語の「字幕・吹き替え」に依存しているのだろうか？ ②映像作品で伝達される価値観に、あなたはどれだけ影響されているのか、いないのか？ ③映像作品における視覚・音楽・言語の「テクノロジー」は、どのように作用するのだろうか？		
到達目標	見る作業を「曖昧で受け身の行為から、思考を触発させる積極的行為にする」		
講義方法	講師による講義、映像視聴、クラス・ディスカッションを組み合わせながら進めます。		
準備学習	授業プリントの復習と、学生自身のノートの見直し。		
成績評価	学生が毎回出席し、討議に積極的な貢献をすることを重視します。出席(40%)、レポート(60%)。		
講義構成	授業では、クリップとしてさまざまな作品を見る作業と並行して、講義とディスカッションを通じて考察を深めます。 ①アニメーション作品(英語吹き替え版とオリジナルの比較)。セリフに依存しない映画。 ②アメリカ映画とそれ以外の国の映画。 ③劇映画が混在するドキュメンタリー映画。ドキュメンタリーが混在する劇映画。		
教科書	事前購入すべきテキストとして指定するものではありません。 レポート作成のために読むべき文献(論文、本からの抜粋など)は、配布します。		
参考書・資料	クラスで適宜紹介します。		
担当者から一言	講義を聞き、映像を見て、クラスで議論し、自分の言葉を用いてレポートを書く、このような流れになります。		

授業コード	13036		
授業科目名	ソーシャル・キャピタル論(比較社会学) (後)		
担当者名	星 敦士(ホシ アツシ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	金曜3限
オフィスアワー	金曜日4限目。それ以外の時間はメールで予約してください。		

講義の内容	近年、ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)という概念が社会学だけでなく、他の社会科学の諸分野においても広く応用されています。この講義では、社会学を中心にこれまでのソーシャル・キャピタルをめぐる展開と、現代社会を分析するツールとしてソーシャル・キャピタルが応用されている諸種の研究例について解説します。		
到達目標	現在の社会で起きていることをとらえる一つの視点として、あるいは社会の来し方行く末を考えるための枠組みとして「ソーシャル・キャピタル」というキーワードを使えるようになるといいですね。		
講義方法	以下に示した各テーマについて、理屈っぽい話だけに偏らないよう調査データなどを提示しつつ講義を行います(何か良いものがあれば映像も交えたいと思います)。各時間の最後に、その回の内容に関連したリアクション・ペーパーを記入してもらい、次の回の冒頭にその記入内容を紹介しながら振り返ります。		
準備学習	何か事前に勉強しておかないと内容がさっぱり理解できない、というタイプの話ではないので特別な準備学習は必要ありませんが、人と社会に対する関心を何となくでも持っておくということじゃないでしょうか(これは社会学		

	全般において言えると思いますけど)。見えないものに思いをはせるとでもいいですか……。
成績評価	平常点(各回の講義時に記入してもらいうアクション・ペーパーの内容)30%と期末試験(論述試験)70%を総合して成績評価を行います。
講義構成	01 インTRODクシヨン 02～04 ソーシャル・キャピタル概念の歴史的展開 05～07 ソーシャル・キャピタルの光と影 08～10 実証研究における応用 11～13 分析ツールとしてのソーシャル・キャピタル 14 まとめ 15 試験
教科書	使用しません
参考書・資料	適宜紹介します

授業コード	13M11		
授業科目名	卒業研究(野々山)		
担当者名	野々山久也(ノノヤマ ヒサヤ)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	月・火(12:10～13:00)。そのほか必要があれば、電話078-435-2379やメール: nonoyama@konan-u.ac.jpなどにて予約してください。		

講義の内容	卒業研究の指導は、野々山ゼミナール4回生の学生を中心に指導を行なう。教授会など会議のない水曜日の午後2:40～4:10(4限と5限)に集中して指導する予定。
到達目標	卒業研究は、ゼミ生各自がそれぞれの研究テーマにしたがって研究に取り組んでいることから、個別指導が中心になる。したがって、到達目標は、それぞれ個別的ではあるが、目標は、最終的に卒業論文に各自の研究がまとまることである。アンケート調査をするもの、インタビュー調査をするもの、観察法によるデータ収集をするもの、さらにはドキュメント分析法でまとめるもの、それぞれに適した指導を行っていく。
講義方法	講義ではない。個別の集中指導である。
準備学習	各自、それぞれの研究テーマにしたがってさまざまな文献や資料を使って研究を進める。最終的なまとめに向かっている方向づけは、授業にて指導するが、各自の研究テーマにそった資料収集やその分析に関しては、それぞれ各自が指導にしたがって進めていく。
成績評価	卒業研究の提出をもって、成績の評価する。
講義構成	個別の集中指導。
教科書	教科書の指定はない。個別に相談にのる。
参考書・資料	つど個別に指示していく。
講義関連事項	卒業研究の作成には、各自の着実なオリジナル・データが求められるので、手抜かりのないように用意すること。

担当者から一言	新聞の切り抜きなど、常日頃からデータ収集には、手抜かりのないように備えてほしい。
---------	--

授業コード	13M12		
授業科目名	卒業研究(森田)		
担当者名	森田三郎(モリタ サプロウ)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		

オフィスアワー	火曜日の10時半～12時50分をオフィスアワーとします。他の時間でも、メールや電話で直接面談の日にちの相談に応じます。学修相談あるいは生活相談その他、悩みや喜びを話したい方は、遠慮しないで森田研究室までおいでください。
講義の内容	大学生活の集大成である卒業研究を仕上げます。あなたの大学生活を有終の美で飾るために、悔いのない研究をやってください。
到達目標	受講生の個性が生かされた独自性のある卒業研究の作成
講義方法	自主的調査研究をやってください。指導教員は、メール、電話、直接面談にて、相談に応じて、みなさんの調査研究活動をサポートします。
準備学習	問題意識をもって、現場に出ること。街を歩くとときも、なぜ、ここにこれがあるのか。なぜ、あの人はあのような行動をするのか、など。また、新聞記事についても、そのデータの信頼性、妥当性も含めて、考え、判断するように心がけて日常生活を送ること。
成績評価	調査活動の成果を、集団討議の上、最終的には教員が評価します。 評価の基準は、 (1)どの程度オリジナリティがあるか。 (これまでになかった研究対象、研究する視点、手法などがあつたか) (2)議論が正確であるか。 (テーマに関して、証拠としてあげているデータが正確な者と言えるか) (3)議論が妥当であるか。 (テーマに関して、主張する根拠が、そのテーマに相応しいデータになっているか) (4)自ら動いて、直接データを集めたか。 (自らが直接観察、インタビュー、アンケートなどを実施して集めた資料に基づいた根拠をあげているか。コピペは、最低評価になります。コピペで、引用符がなかったら、盗作になります。それは許されない行為であることを、認識しておいてください。)
講義構成	受講生各自による自主的な調査研究活動です。ただし、受講生の皆さんが考えた研究のアイデアから手法、さらに、関連資料の探索、分析、レポートの書き方その他、研究活動のあらゆる段階と側面における相談は、いつでも受け付けます。遠慮しないできてください。
教科書	レポートの書式や参考文献の書き方等に関しては、学んできたはずですが、もう一度、社会調査工房オンライン{ http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/ }にて、確認してください。
参考書・資料	各自のテーマに応じて、個別に紹介します。
担当者から一言	多くの方は、3回生で仕上げたゼミ論のブラッシュアップになりますが、あえて、新たなテーマに挑戦する勇氣ある方がいます。それも良いです。でも、覚悟してください。時間が短い間に卒業研究レベルにまで仕上げるためには、相当なエネルギーと持続的努力が必要です。頑張ってください。しかし、ゼミ論のブラッシュアップをする人も、油断しないでください。最後にだらけたら、やはり、そういう卒業研究になってしまいます。有終の美で飾るためには、それ相応の努力は必要なのです。頑張ってください！！

授業コード	13M13		
授業科目名	卒業研究(大津)		
担当者名	大津真作(オオツ シンサク)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	木曜日昼休み		

講義の内容	現代社会を人類学的に論じた卒業論文の指導。
到達目標	現代日本社会を説明する力がつく
講義方法	卒業論文の指導、学生の発表
準備学習	ゼミナールでの発表の復讐
成績評価	論文の完成と試問
講義構成	論文の書き方、テーマの設定、論文構成の指導
教科書	『財政とは何か』神野直彦、岩波書店

担当者から一言	テーマへの客観的批判的アプローチを身につけて欲しい
---------	---------------------------

授業コード	13M14		
授業科目名	卒業研究(菅)		
担当者名	菅 康弘(スガ ヤスヒロ)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	お互いに空いている時間ならいつでも		

講義の内容	卒業研究の提出に向け、各自のテーマを深化させる。		
到達目標	説得的で、ユニークな視点をもった卒業論文を完成させること。		
講義方法	自由発表		
準備学習	論文を完成させるにあたり、 ・語るためのデータの収集し、 ・語りの視点を明確化させるように常に文化にアンテナを張り、 ・語りのための遵守事項に精通するよう、各種の書き方本を熟読する		
成績評価	完成された卒業研究＋試問での受け答えの内容		
講義構成	各自の発表2回		
教科書	なし		
参考書・資料	各自のテーマに応じ、教員がその都度提示する。		

担当者から一言	卒業研究は各自の「作品」です。おそらく多くの方にとって、「作品」を創る機会は人生にはあまりないはず。納得のいくものを創ってください！
---------	--

授業コード	13M15		
授業科目名	卒業研究(西川)		
担当者名	西川麦子(ニシカワ ムギコ)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	火曜日昼休み		

講義の内容	各自の研究のテーマについて、多角的、戦略的に情報を集め、資料を整理し、構成をきちんと組み立てた論文を作成する。第三者へ何をどのように伝えるのかを意識して、文章、レイアウトを工夫する。		
到達目標	テーマにたいしての概論をまとめるだけでなく、何に着目し、どのような方法で取り組み、何を論拠として、どのような考察を行うのか、論の構成を戦略的に組み立て説得力のある論文に仕上げる。		
講義方法	演習形式		
準備学習	社会調査工房オンラインを参考にして、調査方法や表現の方法を復習しておく。		
成績評価	論文と面接試験		
講義構成	必要に応じて指示する。なお、7月にゼミナール研究、卒業研究中間発表会、12月にゼミナール論文、卒業論文の発表会を他の学年と合同で行う。		
教科書	必要に応じて資料を配布する。		

授業コード	13M16		
-------	-------	--	--

授業科目名	卒業研究(中里)		
担当者名	中里英樹(ナカザト ヒデキ)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	金曜昼休み。火・水・金曜日のその他の時間も、メール等での予約を随時受け付けます。		

講義の内容	卒業論文作成にむけて、受講生の関心を踏まえ、文献収集、調査、論文執筆の方法を指導する。		
到達目標	大学の研究の集大成として相応しいレベルの卒業論文の執筆		
講義方法	ゼミ形式および個別指導による		
準備学習	卒論提出まで多くの課外学習が必要です。		
成績評価	卒業論文および口頭試問によって評価する		
講義構成	個別指導による		
教科書	個別に必読文献を指示する		

授業コード	13M17		
授業科目名	卒業研究(宮垣)		
担当者名	宮垣 元(ミヤガキ ゲン)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	前期火・水曜の12時10分～13時がオフィスアワーですので、この時間は自由に来て頂いて結構です。それ以外の時間については、メールで事前に連絡をしてください。		

講義の内容	受講生の問題関心に基づく様々なテーマについて、それを卒業研究論文としてまとめるまでの指導を行う。テーマ設定と論理的な議論の組み立て方、研究計画書の作成と発表、先行研究へのアクセスと把握整理・自分の研究の位置づけ、文献リストの作成と文献購読、調査計画の立案と実施、分析と執筆の方法などを段階的に行う。		
到達目標	「卒業論文」の完成が最終目標である。卒業論文の完成は、自らの設定したテーマに基づいて、1)社会的背景や先行研究のサーベイ、2)それを踏まえての問題発見、3)議論を行うために必要な調査分析や理論構築、4)論理的で説得的な解釈と結論、などに至る全体のプロセスを、自ら行えるようになることを意味している。		
講義方法	受講生による発表と議論が中心となる。必要に応じ文献購読も行う。		
準備学習	自らの設定したスケジュールに従って、調査、執筆などを各自が行う。授業時間は発表の時間にあてられるため、それ以外の時間に十分な準備が必要となる。		
成績評価	卒業論文および口頭試問により評価する。		
講義構成	スケジュールと内容、方法、発表担当などは初回に説明します。		
教科書	教科書は特に指定しない。		
参考書・資料	参考文献・資料は必要に応じ随時紹介する。執筆方法などは資料を配布。また、オンラインコンテンツ「社会調査工房オンライン」にも執筆に関する解説があるので、参考にしてください。		

授業コード	13M18		
授業科目名	卒業研究(星)		
担当者名	星 敦士(ホシ アツシ)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		

オフィスアワー	金曜日4限目。それ以外の時間はメールで予約してください。
講義の内容	卒業論文を執筆するうえで必要なあらゆるスキルと情報を個別の進捗状況に応じて提供します。
到達目標	卒業論文を提出すること。
講義方法	個人、あるいはグループでの面談が中心です。
準備学習	あまりネガティブに考えない、健康に気をつける、規則正しい生活(十分な睡眠と三食きちんと食べる)、相談できる友達を見つける、といったところでしょうか。
成績評価	卒業論文の内容と口頭試問の結果によって評価します。
講義構成	スケジュールは個別に調整して決めます。
教科書	使用しません
参考書・資料	適宜紹介します

授業コード	13M19		
授業科目名	卒業研究(平松)		
担当者名	平松 闊(ヒラマツ ヒロシ)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		

講義の内容	卒業研究では、4年間の最後の仕上げとして、自らの「作品」を完成させます。2年、3年のゼミナールで、継続して取り組んできた自らの「テーマ」について、さまざまな方法によるアプローチ、そして社会学科では、何よりも「社会調査」(少なくとも2つの方法を使用)を自ら行い、それを分析・解釈し、実証し、最終的には、16000字(400字換算で40枚)以上の論文に仕上げます。
到達目標	2011年1月に提出する「卒業研究(論文形式が主)」が一定の水準に達していることが目標。一定の水準とは、自らのテーマについて、問題関心、これまでの歴史、研究史のサーベイ、さらにはみずからの行った「社会調査」による分析結果とその考察の内容を、16000字(1600字A4紙10枚)以上のボリュームを満たし、それを期限までに提出することである。さらに、それは2名(主査、副査)の試問を受け、それに応答しなければならない。ハードルは低くないが、少なくとも2年からのゼミナールの総仕上げになる。
講義方法	月2回程度の「集合研究会」—学生が各自、自らのテーマについて調べてきたことを報告し、それを討論し、ディフェンスを行いながら、それぞれのテーマの深化を行います。 同時に、学生個人別に教員とのおもに「ネット」を通じて、調査報告等の分析、解釈に関するやりとりを重ねていきます。 特に後期には、合宿による学習会をかさねながら、卒論執筆が基本になります。教員と学生各自とのネットやメールを通じたやりとりによりさらに論文執筆が進んでいきます。 2010年の12月の終わりには、各自の「卒論執筆」が完成するよう指導していきます。
準備学習	2年生からのゼミナール(I～V)での積み重ねが準備学習である。とくに3年での「ゼミ論文」が「卒業研究」の草稿の一部になる。さらに、自らのテーマに関する文献の読み込みと分析は、この卒業研究(論文)を組み立てる段階での基本となる。さらには、自らの言葉で論文を書き上げる能力を準備することは日ごろの「演習」で鍛えられる。
成績評価	2010年1月に提出される「卒業研究論文」を、主査、副査(社会学科のもう1人の教員)による試問により、一定の水準が確保されているかの判断により、「評価」を受けます。この際、社会学科では、学生自ら行った社会調査による1次データ(あるいは1.5次データ)の分析が基本とされています。
講義構成	週2時間のゼミナールという形式はとっていませんが、1年間にわたって「卒業論文」を書き上げるまでの学習、調査、報告、討論、ディフェンス、そして教員とのさまざまな形(たとえばネットやメールを含めた)でのやりとりが、卒業研究の時間を構成します。 さらに「論文執筆」、提出された論文の審査時の試問(主査、副査野2名による)、ディフェンス等は非常に密度の濃いものになっています。
教科書	学生自らのテーマごとに論文を進めるため、共通した教科書はないが、自らのテーマに関係した文献は多数あり、あるとすれば、それぞれのテーマごとの文献が教科書となる。
担当者から一言	卒業研究は、大学生活最後の「仕上げ」の作業です。思い残すことのない自らの

	「作品」を作りましょう。
--	--------------

授業コード	13M20		
授業科目名	卒業研究(田野)		
担当者名	田野大輔(タノ ダイスケ)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	火曜・水曜・木曜の昼休み、および木曜5限。必要な場合はメールで連絡すること。dtano@nifty.com		

講義の内容	受講生の関心をふまえ、テーマ設定、文献収集、資料分析、論文執筆の方法を指導する。
到達目標	受講生各々が、テーマ設定、文献収集、資料分析、論文執筆の方法を習得することをめざす。
講義方法	受講生の研究報告と、それについての討論を中心に進める。
準備学習	必要に応じて指示する。
成績評価	研究報告の内容によって評価する。
講義構成	初回到報告順を決定し、各回研究報告と、それについての討論を中心に進める。
教科書	必要に応じて指示する。
参考書・資料	必要に応じて指示する。

担当者から一言	明確な問題意識と綿密な資料調査なしには、すぐれた論文は書けない。そのためには労を惜しまないこと。
---------	--

授業コード	13M21		
授業科目名	卒業研究(阿部)		
担当者名	阿部真大(アベ マサヒロ)		
配当年次	4年次	単位数	8
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)
特記事項	自動登録		
オフィスアワー	水曜日 昼休み		

講義の内容	個別指導 個別の指導をおこなう。
到達目標	卒業研究の完成。
講義方法	個別指導
準備学習	自分の気になるテーマについて、新聞やニュース等でチェックしておくこと。
成績評価	取り組みの態度から総合的に評価する。
講義構成	個別の集中指導
教科書	特定の教科書は使用しない。
参考書・資料	特に指定しない。
講義関連事項	内容については進度に応じて若干の変更の可能性あり。

担当者から一言	研究の総仕上げに向けて全力で取り組みましょう。
---------	-------------------------

授業コード	13Q21
-------	-------

授業科目名	多文化共生論(文化人類学II) (A)(前)		
担当者名	赤坂 賢(アカサカ マサル)		
配当年次	学部学科により異なる	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜3限
特記事項	文学部		

講義の内容	グローバル化の時代にあつて、近代世界の根幹であつた国民国家(Nation State)が溶解あるいは変形しつつあるといわれる。明確な境界を持った、基本的には国家を構成する共同体が創られる過程で、絶えず境界の外との交流を通してグローバルな世界を生み出されてきた。しかし、ナショナルな境界が「われわれ」というアイデンティティに特権的な地位を与え、外国人という「他者」を生み出してきた。21世紀の不安材料として、「われわれ」と「他者」とを明確に区別し、統合化と差異化の過程がいつそう進展するのか? こうした課題にむけて、多文化共生の実態について検討してゆきたい。
到達目標	日本を知るために、異文化あるいは他国と比較する相対的な思考態度が身につく。
講義方法	講義形式をとるが、多文化主義の実態に対する理解を深めるためにVHSやDVDなどの映像資料を利用してみたい。その折には小さな用紙を配布して、質問・感想・意見・まとめ等の提出をもとめ、次回の講義に生かしたい。
準備学習	世界の動きや日本社会が直面する課題にたいする関心を深めるために、日頃から新聞・テレビ・映画・雑誌などにより情報の入手につとめること。また、授業で示した参考図書に眼を通すこと。
成績評価	定期試験(70%)と、質問・感想等の用紙で示された授業への積極的態(30%)
講義構成	1. 多文化共生について:問題の所在 2. 多文化主義の先進国から学ぶもの 3~5. オーストラリア:白豪主義からの脱却、先住民アボリジニ、ハンソン現象 6~7. カナダ:二言語主義から多言語主義へ、ケベック問題、先住民問題 8~10. アメリカの多様性:メルティング・ポットからサラダ・ボウルへ、アジア系アメリカ人の活躍、アフリカ系アメリカ人と公民権運動 11~12. EUの課題。地域主義、国籍、参政権など 13. エスニック・コミュニティの形成 14. クレオール化(文化の接触・混淆)、ワールド・ミュージック 15. 開かれた日本社会をつくるために
教科書	使用しない

担当者から一言	ニュースを見聞きして感じた疑問を歴史や文化の理解につなげてほしい。
その他	私語の禁止と携帯電話のオフ私語の禁止や携帯電話のオフ 新聞の社会面、国際面など テレビのニュース時評 『はだしの1500マイル』(2002年) S.スピルバーグ監督『アミスタッド』(1988年)

授業コード	13Q22		
授業科目名	多文化共生論(文化人類学II) (B)(後)		
担当者名	渡辺和之(ワタナベ カズユキ)		
配当年次	学部学科により異なる	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	金曜2限
特記事項	他学部(2年次以上)		

講義の内容	文化人類学は、人間を取り巻く社会や文化をフィールドワークによって明らかにする学問である。この講義は、文化人類学の基礎となる諸問題を概説するものである。特に、市場経済が浸透し、国家による政策が進められるなかで、現地の住民がいかなる問題に直面しているのか、各地の事例を紹介してゆく。 後期は特にグローバル化の進行に伴うアイデンティティーをめぐる問題を扱ってゆく。伝統的な社会が近代化
-------	--

	し、伝統の持つ意味が多様化するなかで、人々は「伝統」をめぐるいかに関わり合うのか。具体的には、カースト、民族、伝統、観光、内戦などを例に、変化する社会の文化を考えてゆく。
到達目標	1. 文化や伝統は常に変化することを理解する。「日本文化」はいまや「日本人」だけのものではないし、「日本文化」そのものも周囲との関係のなかで歴史的に創られてきた。 2. 世の中には白黒が簡単につけられない問題があることを理解する。何が正しく、何が間違っているのかを判断するには何か前提が必要である。これは学問でも同じこと。どんな学問も突き詰めると、不確かな前提の上に成り立っており、文化人類学も例外ではない。 3. 「何が正しいか」ではなく、「何を正しい」と人々が考えているのかに注目するのが重要であることを理解する。人々が何にアイデンティティーを求め、周囲の人々とどのように関係するか分析する方が実りある。
講義方法	講義形式でおこなう。ほぼ毎回授業のテーマに関し、小作文を書いてもらう。
準備学習	期間中に調べごとをしてもらうことがある。
成績評価	定期試験で評価する
講義構成	第1回 コスモロジー 第2回 カースト社会 第3回 祭祀と王権 第4回 小乗仏教の拡大と勤勉な労働 第5回 エスニシティ 第6回 伝統の創造 第7回 伝統の解釈をめぐる政治 第8回 観光と植民地統治 第9回 景観論争 第10回 シェルパの20世紀 第11回 グローバル化するインド映画1 第12回 グローバル化するインド映画2 第13回 内戦の拡大と王権 第14回 内戦とグローバル化 第15回 試験
教科書	特に用いない。配布したレジュメにそって講義する。
参考書・資料	石井溥ほか『ヒマラヤの「正倉院」』山川出版社 石井溥ほか『流動するネパール』東京大学出版会 ルイ＝デュモン『ホモヒエラルキクス』みすず書房 関根康正(編)『都市的なものの現在』東京大学出版会 鹿野勝彦『シェルパ:ヒマラヤ高地民族の20世紀』茗溪堂 アパデュライ『さまよえる近代』平凡社など。 映画『ボンベイ』マニ・ラトナム監督。DVD発売コロムビアレコード。 映画『家族の四季』カラン＝ジョーハル監督DVD発売アップリンク 映画『モンスーンツウエディング』ミラナイール監督DVD発売 アミューズ・ビデオ
講義関連事項	通年の授業なので、前期と後期を継続して履修することが望ましい。
担当者から一言	期間中に、最低1回はインド映画を見てもらうつもりでいる。
ホームページタイトル	国立民族学博物館
URL	http://www.minpaku.ac.jp/

授業コード	13022		
授業科目名	都市空間論(後)		
担当者名	菅 康弘(スガ ヤスヒロ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	金曜3限
オフィスアワー	「sugar@center.konan-u.ac.jp」に連絡の上、時間応談。		

講義の内容	タイトル: 都市 vs. 田舎?—都市の多面性とそこに生きる意味 都市—それは上記のような二分法で単純化される空間ではない。都市には常に「都市的なもの」と「反都市的
-------	---

	なもの」が矛盾し合い、齟齬をきたし、調和し合っている。しかし、この複雑性が人を時に不安に陥れ、時に自遊させる。こうした多義性を対象に、本講義では、‘視覚’と‘stranger’という観点から都市と近代、そしてポスト近代における都市的自我と行動・規範を解説する。
到達目標	眼前にある、あなた住み、動いている都市と、都市の都市的部分である‘都市’とを明確に区別すること。具体的な出来事や自分の経験だけを絶対視せず、広く深く文化を観察し、「分析」というまなざしから、自分の生きている世界を突破できるようになること。そして、分析のために使える語彙、すなわちボキャブラリーを増やすこと。
講義方法	まれにCDやDVDを使うが、基本は大変アナログ的なシャベクリー方の講義である。最近流行りのインタラクティブな双方向授業やビジュアル系の講義は、話のリズムが崩れるし妙な間が空くため採用しない。したがってメールやオフィスアワーを積極的に活用し不明な点や率直な感想をどんどん表明してほしい。質問という「語り」を通して視えてくるものは多い。なお質問内容・回答内容はプライバシーに抵触しない範囲で講義において開示・解説し、受講生全員の共有財産とすることをあらかじめご了解頂きたい。ただし匿名のメールは黙殺する。 ちなみに、たまに欠席しても大丈夫なよう講義の進展には配慮しているが、たまに出席するという方には対応していない。アシカラズ...(^_^)
準備学習	試験問題が第2回の講義において発表されるので、常に頭の片隅に置いておくこと。そして、日々見聞きする社会事象に鋭敏にアンテナを張っておくこと。そうしたさりげない頭脳の働きが準備学習であり、それが試験の点数の差になって現れる。
成績評価	期末の試験。 完全な論述形式。複数の問題から1問選択する。選択した問題に沿い、各自でタイトルを付した上で、論を進めること。いずれの問題も都市に生起する現象を題材にしたものである。 評価は、上記の「講義内容」をどの程度理解しているかを念頭に、記されたタイトルの明晰さ・的確さ、論述に示された視点、論の説得性を基準とする。合わせて、論述のルールを遵守しているかどうかも評価基準となる。
講義構成	01. 2009年度試験問題を題材に、履修上の留意点を解説する 02. 試験問題の発表と解説から2010年度の講義全体をレビュー 03. ストレンジャーの空間と文化—自己呈示と「信頼」 04. 〈平等〉をめぐる2つの規範 05. 不関与の規範—真の無関心と儀礼的無関心 06. 緩やかな‘秩序’—相互の信頼と高度な協同 07. ‘個’と‘人’—個人主義という名の宗教の空間 08. 「みる—みられる」空間の快楽と不安 09. 第3の空間と都市的？自我の構造 10. 近代都市—饒舌から沈黙へ 11. 劇場の誕生と2つの分離 12. ‘劇場’の都市への浸透—分離がもたらす2つの欲望 13. 空間の再編・欲望の自律・視覚の特権化 14. 拡散する‘分離’—沈黙の都市へ 15. 都市における近代と反近代、都市と反都市
教科書	使用しない
参考書・資料	参考書籍は講義中随時指示するが、以下のものをあらかじめ提示しておく。資料は適宜配布する。 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』 吉見俊哉『都市のドラマツルギー』 大谷信介『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』 磯村英一『人間にとって都市とは何か』 G. ジンメル『ジンメル・エッセイ集』『橋と扉』『社会学』 和田博文『テキストのモダン都市』 C. S. フィッシャー『都市的体験』 W. ベンヤミン『都市の肖像』『パサージュ論』 そして、都市を唄うおびたしい流行歌群
講義関連事項	「社会調査基礎演習2-2」の受講生は、前半の最終課題「Town Watching Report」と本講義が密接に連動するので、テーマや調査項目の選択、レポートにおける論の進め方・語りの視点などに積極的に参考してほしい。 それ以外にも本講義では、近代史・民俗学・表象論・都市計画論や、現代文化・近代社会論・メディア論の講義を参照し、近代社会・現代社会の一部として都市空間を考察してほしい。また、空間的視点を重視するので、視覚や表象に関わる科目も重要である。
その他	◇欠席・遅刻・早退について ・欠席、早退は自己責任による自己判断にもとづく権利である ・遅刻と私語をしないことは一般的な社会的義務である (うろついたり、チョロチョロ出入りしないのは当然！) よって、遅刻者はコソコソと入室し早退者は堂々と退室すべきなのだが、現状は逆のようである... ◇ケータイについて

	<ul style="list-style-type: none"> ・電源を切れ！とはいわない ・パイプ音は周りに漏れないよう配慮すること ・電話に出るなら、荷物をもち二度と教室には戻らないこと ・メール閲覧は講義終了後に(サイト閲覧やゲームなど論外！)
--	--

授業コード	13048		
授業科目名	ネットワーク領域特論II(前)		
担当者名	宮垣 元(ミヤガキ ゲン)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜4限
オフィスアワー	前期火・水曜の12時10分～13時がオフィスアワーですので、自由に来て頂いて結構です。それ以外の時間については、事前にメールで連絡をしてください。		

講義の内容	<p>本講義のテーマは「ネットワークと組織」であるが、とりわけ近年の新しい動向を主な対象とする。インターネットの爆発的な普及、地域コミュニティの変容、ボランティアやNPO・NGOの台頭など、私たちの周りの「組織」や「関係(ネットワーク)」に新しい動きが生じつつあるが、こうした「新しい(…とされている)組織やネットワーク」をどのように捉え、またそれらがいかなる意義や可能性を持つのかという点を具体的な事例を通して考えていきたい。特に、コミュニティの希薄化が指摘される中で、コミュニティの再編に資する「関係性の変容」を生み出すために、どのような活動や組織が必要となるか考えることが本講義の主題である。</p> <p>本年度に取り上げる事例は、地域メディアやまちづくり活動を担うNPOの立ち上げプロセスとしたい。地域把握、社会課題、組織目的、ネットワークなど、実際に地域にNPOを立ち上げるプロセスについて実践的に考えることを通して、これらの組織の特性や可能性について考える。また、「社会ネットワーク論」「NPO/NGO論」の応用編であり、「ネットワーク領域特論I」の続編でもある。</p>
到達目標	到達目標は2つで、本講義が対象とする組織や活動に共通する「自発性に基づく行動原理の可能性」を概念的に理解すること、そしてグループワークを通してこうした行動原理の重要性を実践的に理解することにあります。
講義方法	1つのテーマについて2～3回程度の授業を行うが、学期を通して「テーマ・ゼミ」のような形式とし、講義形式ではなく、予習、発表や討論など、受講生の参加が主体となる。参加の形態は4、5つ程度のグループによる「グループワーク」で、授業時間の多くはその時間にあてられる。したがって、特別な専門知識は必要としないが、毎回の出席を前提とし、課題や発表など、学期を通して「すべきこと」が多いので、よく注意してください。
準備学習	履修にあたっての前提知識は特に必要としませんが、グループワークの準備や調査、作業などが随時発生しますので、これらを通して準備学習を行って下さい。
成績評価	原則としてグループワークであるため、数回の間レポートとグループワークのプレゼンテーション、及び期末レポートにより総合的に行う。随時行う発表、グループワーク、授業への参加についてもその都度加味する。特に、グループワークへの「参加」が重要であることを理解して下さい。
講義構成	<p>以下のテーマを取り上げる(ただし、順番は変更する場合もある)。また、講義形式だけでなく、グループワークなど、学生による発表を数回行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2-3. 組織の変容: ボランティアやNPOから何を学ぶか 4-5. コミュニティの変容: 地域を知る、社会課題を知る 5-6. 地域メディアの可能性: 関係の結節点としての地域メディア 7-8. ネットワークとネットワークング: 自発性の行動原理 9-10. 実践としてのネットワーク: 自ら企画立案を行ってみる 11-12. 「ネットワーク」をつくる①: プレゼンテーション 13-14. 「ネットワーク」をつくる②: プレゼンテーション 15. まとめ
教科書	教科書は特に指定しません。参考文献などは講義でも随時紹介します。また、必要な資料の配布を行う場合があります。
参考書・資料	<ul style="list-style-type: none"> ・平松・鶴詞・宮垣・星『社会ネットワークの研究・メソッド』ミネルヴァ書房 ・工藤・寺岡・宮垣『質的調査の方法』法律文化社 ・宮垣元『ヒューマンサービスと信頼: 福祉NPOの理論と実証』慶應義塾大学出版会 ・富永健一『経済と組織の社会学理論』東京大学出版会 ・金子郁容『ボランティア: もうひとつの情報社会』岩波新書
担当者から一言	全体を通して、講義形式ではなくテーマ・ゼミ形式で進行する予定です。受講者の出席、グループワークへの参加が強く求められますので、そのことをよく理解して履修して下さい。

授業コード	13028		
授業科目名	比較文化論(比較文化論I)(後)		
担当者名	辻野理花(ツジノ リカ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜4限

講義の内容	この講義ではオランダという国を中心にとりあげ、その社会や文化への理解を深めます。みなさんはオランダについてどのようなことを知っていますか。チューリップや風車、チーズといった観光対象としてのオランダ。小野伸二選手などの日本人サッカー選手が活躍したオランダ。世界で初めて安楽死を合法化した国オランダ。現在日本ではオランダについてあまり多くのことは知られていないようです。しかし、日本とオランダの関係は400年以上前に始まっており、それ以来さまざまな接点が両国間でみられます。そこで、日本との関係も深いオランダに焦点を当て、まずオランダを知り、オランダと日本の関係を知り、オランダ社会への理解を深めていきましょう。オランダを合わせ鏡にし、オランダに光をあてることによって見えてくる世界を探求していきましょう。ひいては私たちが暮らす日本社会についてもあらためて見つめ、考えていきたいと思えます。
到達目標	オランダ社会の成り立ちと諸相について歴史的視点から理解する。 講義でとりあげるトピックについて日本やそのほかの社会との比較を通して、オランダ社会についての理解を深める。 オランダ社会への理解を深めることで、自文化についてこれまでとは異なる視点からとらえ、考える。
講義方法	講義形式、必要に応じて映像資料も利用しながら講義をすすめていきます。
準備学習	新聞やテレビ、インターネットなどで報道されるヨーロッパに関するニュースなど意識的にキャッチするようにしてください。
成績評価	小テストとレポート(複数回実施予定 授業中の提出物も含む)
講義構成	1. オリエンテーション 2. オランダをつくったのはオランダ人(オランダについての概要) 3. ヨーロッパの中のオランダ 4. 日蘭交流 5. 現代オランダの諸相 2-5のテーマを各3-4回ずつに分けて講義します。
教科書	なし
参考書・資料	随時紹介
担当者から一言	講義の順序や進度、内容は変更することもあります。

授業コード	13055		
授業科目名	比較文化論II(後)		
担当者名	辻野理花(ツジノ リカ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜3限

講義の内容	本講義は様々な文化にまつわる諸相や現象を取り上げ、異文化を知り、理解を深めていくことを目的とします。いくつかのトピックを設定し、それらについて複数の文化・社会について見ていきます。この講義を通して新たな関心や視点をもつことを目標とします。講義では大きく分けて2つの側面を中心に進めていきます。1つはグローバル化とローカル化という側面について、もう1つは映像文化やメディアについてです。これら2つの側面を中心にいくつかのトピックを設定して見ていく予定である。
到達目標	講義でとりあげる具体的な現象を通して、グローバル化とローカル化について理解し、説明することができる。映像文化についてクリティカルに読み解き、論じることができる。
講義方法	講義形式 必要に応じて映像資料も利用しながら講義をすすめていきます。また講義内容によってはディスカッションやグループワークも予定しています。
準備学習	受講するにあたって、講義を聞くだけではなく、新聞、TV、雑誌などを通じて世界の状況に関心をもち知ろうとする姿勢が望まれます。

成績評価	小テストとレポート（複数回実施予定 授業中の提出物も含む）
講義構成	住、多文化、移民、言語、映像文化、メディアなどのトピックに注目して、それぞれ数回に分けて講義を行う。
教科書	なし
参考書・資料	随時紹介

担当者から一言	講義中心ですが、ディスカッションなどの際には積極的に参加してください。講義の順序や進度、内容は変更することもあります。
---------	---

授業コード	13056		
授業科目名	表象文化論（集中）		
担当者名	宜野座菜央見（ギノザ ナオミ）		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期～後期	曜日・時限	前期（集中講義）、後期（集中講義）

講義の内容	この講義では、映画の分析を通じて、私たちが日常生活で意識しない、ごく「自然」に受けとめている社会的・文化的実践の前提条件を「疑い」、考察していきます。 ① 娯楽と分類される映画には、政治的・社会的な意義はないのか？ ② さまざまな映画作品が明確に、または潜在的に依拠する価値観は、どのようなもので、どのように表出するか？ ③ 人間らしさとしての理性・知性はどのようなものとして呈示されているか？
到達目標	「これまで娯楽として見ていた映画の社会性・政治性・歴史性を明確に認識する」
講義方法	講義、映像視聴、グループ・ディスカッションを組み合わせる進行します。
準備学習	授業プリントの復習と学生自身のノート整理。
成績評価	学生が毎回出席し、討議に積極的な貢献をすることを重視します。出席(40%)、レポート(60%)。
講義構成	21世紀の私たちは、母国語の読み書き能力（リテラシー）、さらに外国語である英語の能力を要求される時代を生きています。リテラシーがもたらす力、言語に関わるさまざまな問題（人種・階級・ジェンダー・文化）を視覚化した映画を考察しながら、＜娯楽・メディア・芸術＞である映画の社会性を確認します。 ① あなたに識字（読み書き）能力がなかったら？ ② その言語が、正統とみなされなかったり、多数派の言語でなかったら？ ③ 映像作品が社会を風刺したり、問題をアピールする場合、独特の強みと弱点とは何だろうか？
教科書	購入すべきテキストの指定はありません。講読教材としての論文、本からの抜粋などは、授業で配布します。
参考書・資料	できれば、レイ・ブラッドベリ『華氏451度』（ハヤカワ文庫 2008年）を読んでください。

担当者から一言	集中講義は精神的にも肉体的にも過酷です。せっかく全回出席したのに、レポートを出せずに単位を取り損ねる学生もいます。体調とスケジュールのバランスを考えて、参加してください。
---------	---

授業コード	13024		
授業科目名	フィールドワーク研究（社会調査法II）（前）		
担当者名	西川麦子（ニシカワ ムギコ）		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	木曜2限
オフィスアワー	木曜昼休み		

講義の内容	フィールドワークのプロセス、質的調査の技法を具体的、かつ総合的にとらえる。ここでのフィールドワークとは、人と状況とに関わり、情報を集め、第三者に何かを伝える、一連の行為をさす。講義では、現場と関わりながら問いを見つけるプロセスや、マーケティング・リサーチの質的調査など、異なるタイプの調査の取り組み方や、「見る」、「集める」、「聞く」といった情報収集と記録方法について紹介する。また、フィールドワークにおける人と人との関わり方について考えていく。
-------	---

到達目標	社会調査の質的調査についての基本的な知識と技法を習得し、受講生各自が、現場との関わり方について意識して考えることができるようになること。
講義方法	講義形式と受講生のあいだでのディスカッション。
準備学習	社会調査基礎演習Ⅰ、Ⅱおよび社会調査法Ⅰ(社会調査法)を履修していることを前提に講義をすすめるので、これらの講義内容を復習しておくこと。
成績評価	出席(講義時間内の小レポート)と調査レポート
講義構成	<ol style="list-style-type: none"> 1. プロセスとしての調査—企画・実践・発信 2. 構造化される調査、されえない調査 3. 心身をとおして考える—「記録」する、位置づける 4. 道具から調査を考える 5. 見る—何に注目するのか 6. 見る—見えないものとの関係 7. 集める—位置づける、分類する 8. 集める—読み解く、組み合わせる 9. 聞く—音を意識する、場面を設定する 10. インタビュー—どんな聞き手でありたいのか 11. マーケティング・リサーチのグループ・インタビュー:「フロー案」 12. 無知のアプローチ:知らないことから学ぶ 13. 記録と向き合う—整理、資料化 14. 伝える—責任、配慮、戦略 15. まとめ
教科書	西川麦子『フィールドワーク探求術—気づきのプロセス、伝えるチカラ』ミネルヴァ書房、2010年
参考書・資料	下記のホームページ(社会調査工房オンライン)を参考にする
講義関連事項	社会調査基礎演習Ⅰ・Ⅱと社会調査法Ⅰをすでに履修していることを前提に講義をすすめます。
ホームページタイトル	社会調査工房オンライン、社会調査の方法、5-1基本編／フィールドワークを始める人へ
URL	http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/05/frame.html

授業コード	13027		
授業科目名	福祉事業論(生活福祉学Ⅱ)(前)		
担当者名	越智祐子(オチ ユウコ)		
配当年次	2年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜4限

講義の内容	人生にはたくさんのイベントがあります。その多くは、社会と密接に関係しています。ミクロな社会関係もそうですが、社会制度や社会のありようとも大いに関係があります。この授業では、わたしたち個人のライフステージごとの課題を、社会福祉の視点から考察します。
到達目標	社会福祉の視点を理解し、身近な生活課題と社会制度を結びつけて考察できる。
講義方法	講義形式です。新聞記事や視聴覚材を利用します。受講生の意見や感想を求めることがあります。
準備学習	社会福祉の法制度についての知識が多少必要になります。関連科目を受講したり、図書を参照したりして工夫してください。
成績評価	試験により評価します。私語等、他の受講生に迷惑になることはしないでください。
講義構成	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 社会生活の構成:自分たちの現状の洗い出しと展望 3. 働くことをめぐる課題:雇用と社会保険 4. 結婚:世帯と家族 5. 子どもを持つことをめぐる課題(1) 6. 子どもを持つことをめぐる課題(2) 7. 子どもを持つことをめぐる課題(3) 8. ふたたび、働くということ 9. 疾病・障害(1) 10. 疾病・障害(2) 11. 介護(1) 12. 介護(2)

	13. 死をめぐる 14. まとめ
教科書	指定しません。
参考書・資料	適宜紹介します。
担当者から一言	社会福祉は、「特定の人を対象にした法制度と実践技術群」というマニアな側面だけではありません。わたしたちが脆弱性をどうとらえ、対応するのか、という問いとして、考えてみましょう。
その他	授業中の私語はしないでください。

授業コード	13Q11		
授業科目名	文化人類学(文化人類学I) (A)(後)		
担当者名	森田 三郎(モリタ サブロー)		
配当年次	学部学科により異なる	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜4限
特記事項	文学部		
オフィスアワー	授業終了時に予約してください。		

講義の内容	<p>人間行動の謎をさぐる(人類文化の起源と多様な可能性を考える)</p> <p>私たち人類社会は、現在、地球環境やテロの恐怖など、いくつもの解決すべき大きな問題を抱えています。それを解決するためには、もはや理屈ではない、行動することが大事なのだという意見があります。でも、それはやはり短絡的だと思います。オゾンホール拡大がとまらない環境問題のように、たしかに、いつまでも決定できずに、時を空費して手遅れになってしまう危険性が高いのは事実です。しかし、私たち人類は、地球の中で否応なしに共同生活をしなければ生き延びることはできません。そのためには、私たちと、これほど違った発想や感情を持っているように見える人たちとも、共通の祖先をもった兄弟なのだという感覚を全人類がお互いに養うことが不可欠なのです。相互理解と合意に基づいて、改革を進めること。これ以外に、道はないと思います。そして、その相互理解のための基礎訓練をするのが、この文化人類学という学問の役割なのです。急がば回れ。文化人類学的想像力を涵養することは、人類の生存にとって、決定的に重要なのです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ★ヒトって、どんな性質をもった動物なのか？ ★いつごろ、どうやってヒトになったのか？ ★言葉(言語)って何？ 言葉って人以外に使わないのか？ ★人類はこれまでに、どんな言葉をしゃべってきたのか？ ★言葉には、いったいどんなやり方やルール(つまり文化)があるのか？ ★人は何を食べてきたのか？ 食べる、食べないを決定する要因は何？ ★現代人の食生活の特徴は？ 食の世界でも2極分解って本当？ ★豚肉が大好きな人がいる一方で、豚を食べるなんて人間のすることではないと主張する人がいるのはなぜなのか？ <p>等々。この授業では、こういった人類の行動をめぐる謎について、人類学者たちの観察やインタビューに基づく記録(報告書)を材料として分析・考察します。人間を、その可笑しさ、せつなさ、愚劣さと崇高さの幅においてとらえることが、人間性のより深い理解と、異なる文化の共存にとって大切だと思うからです。文化人類学は、私たちの生活にとって、直接役に立つものではありません。しかし、その知識と発想は、地球全体が生活の舞台となり、異なる文化を持った多くの人々とおつきあいをせざるを得ないこれからの時代の人々にとって、もっとも重要な意義をもつのである、と私は思っています。</p>
到達目標	人の行動の違いは、文化の違いに由来することを理解し、国籍や民族の違いを過大評価せず、世界の人類の共通性に目を向けること。
講義方法	<p>授業は、以下の「講義構成」の中で紹介したテーマにしたがって、掲示資料およびパワーポイントやビデオ、DVDなどの映像資料を使いながら説明します。みなさんに質問もします。講義予定は、少し変わるかも知れませんが、そのときは事前に予告します。また、このWEB版のシラバスも改訂します。</p> <p>授業で用いる資料については、原則として講述の「授業支援ページ」(学内からのみアクセス可能)にダウンロードできるようにしておきますが、準備が間に合わないときには、授業時に配布することもあります。したがって、授業の前々日までには、かならず、授業支援ページをチェックしておいてください。</p>
準備学習	国籍、性別、年齢にかかわらず、人間の行動や考え方に関心を持って、メディアから伝わる様々なニュースに関心を持って欲しい。そういう視点で、新聞や雑誌を読むこと。またテレビのニュースを見聞すること。
成績評価	<p>授業内容に関する小テスト(レポートを含む)およびアンケートを加算します。</p> <p>小テストは、My Konan の小テスト機能を利用します。アンケートの場合には内容による差はつけませんが、小テストは、素点評価、レポートについては、5段階(絶対)評価をします。レポートも、My Konan の小テストの中の記述方式を利用します。</p>

	この小テスト(記述式レポートも含む)およびアンケートを合算すると100点になります。受講生諸君の点数は、それぞれ受験した小テストの点数の積み重ねで、自動的に計算されます。
講義構成	<p>講義の予定日時とテーマ</p> <p>第1回 (09/20) オリエンテーション — 文化を持つ異端の動物・ヒト</p> <p>第2回 (09/27) サルからヒトに至る600万年の旅 — 地球の気候変動と人類進化史</p> <p>第3回 (10/04) 人種と民族の形成 — 生物学的適応と文化的適応</p> <p>第4回 (10/11) 狩猟採集社会の多様性 — イヌイットからムブティ・ピグミーまで</p> <p>第5回 (10/18) 農業の登場 — 熱帯地方に始まった根栽農耕と文明を導いた穀物農耕</p> <p>第6回 (10/25) 文明の生態史観 — 遊牧民文化の史的役割と梅棹忠夫の視点</p> <p>第7回 (11/01) 言葉文化を考える — その多様性の価値(言語分類と地理的分布)</p> <p>第8回 (11/08) インド・ヨーロッパ語族をさぐる — 言語年代学事始め</p> <p>第9回 (11/15) 日本人と日本語の成立</p> <p>第10回 (11/22) 食文化を考えるために(受講生自身による食生活チェック調査)</p> <p>第11回 (11/29) ファースト・フードとスロー・フード — ドキュメンタリー「スーパーサイズ・ミー」を手がかりとして</p> <p>第12回 (12/06) アメリカン・スタンダードは、世界標準なのか? — アメリカ食物史を見直す</p> <p>第13回 (12/13) イスラム教徒とおぞましき豚</p> <p>第14回 (12/20) ヒンドゥー教徒と聖牛 まとめとQ&A</p>
教科書	特定のテキストは使用しません。
参考書・資料	講義内容の関係で、必要に応じてビデオやDVD等の動画資料を見て貰います。また必要な教材は、最初のオリエンテーションの時を除き、原則として、講義日を挟んで、およそ2週間、WEB上に掲示しますので、各自授業前にダウンロードして持参してください。

担当者から一言	<p>参考文献や資料は、下記の授業支援Webページで紹介します。予習や復習に使ってください。授業日程の変更も含む最新の授業日程に関しては、WEB版シラバスと授業支援ページを、こまめにチェックしておくように、気をつけてください。講義内容に関連する資料の掲示期間は、講義日を挟んで2週間です。期間が過ぎたら、自動的に削除されるようになっていきますので、ご注意ください。</p> <p>板書はあまりしませんので、授業では私の話をしっかり聞いて、ノートをとって下さい。私の授業中には、必ずケータイの電源を切っておいて下さい。</p>
その他	質問のある方は、下記の授業支援Webページをクリックして下さい。そこに記してあるメールアドレスから、私に連絡ができます。
ホームページタイトル	「文化人類学A」支援Webページ(アクセスできるのは、学内からのみです)
URL	http://www.center.konan-u.ac.jp/~saburo/CultAnthroPage/anth10.html

授業コード	13Q12		
授業科目名	文化人類学(文化人類学I) (B)(前)		
担当者名	渡辺和之(ワタナベ カズユキ)		
配当年次	学部学科により異なる	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	金曜2限
特記事項	他学部(2年次以上)		

講義の内容	文化人類学は世界の民族に関する文化を、フィールドワークによって明らかにする学問である。この講義では、いくつかのトピックに注目しながら、文化人類学の諸問題を基礎から概説することを目的とする。ちなみにこの講義で事例とするのはおもにアジアのアフリカなどに住む先住民の文化である。彼ら、彼女らの文化は、われわれからみると違うものと感じるものであるかもしれないが、よく調べると、われわれと違う文化も、よくみるとどこか通じる部分があることをわかって欲しい。また、この授業では遠い海の向こうにある国々の文化について話してゆくが、それぞれの歴史があり、われわれの社会と似たような問題を抱えることも理解して欲しい。
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 文化相対主義的な視点を身につける。 2. 欧米だけでなく、アジアやアフリカの文化に関心を持つ。 3. 海外の文化を知ることで、日本の文化を見つめなおす。 4. 日本の常識が世界で通じるとは限らないことを理解する。
講義方法	講義形式でおこなう。授業中にその日のテーマに関する小作文を書いてもらうことがある。
準備学習	期間中に一度何か民族誌を1冊本を読んでもらうことがあるかもしれない。
成績評価	定期試験で評価する。

講義構成	第1回 文化人類学とは？ 第2回 異文化におけるフィールドワーク 第3回 狩猟採集民の「豊かな社会」 第4回 カラハリ論争 第5回 狩猟採集民の現在 第6回 住まいの間取り 第7回 漂海民の定住化 第8回 家を化粧する 第9回 親族関係と出自集団 第10回 母系社会と交換 第11回 親族の基本構造 第12回 北西海岸の漁労文化 第13回 トーテムポールと毛皮交易 第14回 先住民権運動 第15回 試験
教科書	特に用いない。配布したレジュメにそって講義する。
参考書・資料	波平恵美子『文化人類学(カレッジ版)』医学書院 スチュワート＝ヘンリほか編『狩猟採集民の現在』言叢社 佐藤浩司(編)『シリーズ建築人類学』(4巻)学芸出版社 岸上伸啓『イヌイット』中公新書
講義関連事項	通年の授業なので、前期と後期を継続して履修することが望ましい。
ホームページタイトル	国立民族学博物館
URL	http://www.minpaku.ac.jp/

授業コード	13U21		
授業科目名	メディア研究(コミュニケーション研究II)(A)(後)		
担当者名	西橋正泰(ニシハシ マサヒロ)		
配当年次	学部学科により異なる	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	月曜1限
特記事項	文学部		

講義の内容	「ジャーナリズムの世界」 私たちは毎日、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌、書籍などのジャーナリズムと接している。そしてそれらが伝える情報によって、意識する、しないにかかわらず、自分自身の生き方、考え方が左右されることすらある。今、私たちが生きている時代を読み解くことは難しい。しかし、さまざまなジャーナリズムが伝える情報から、その一断面を見つめ、考え、その時点での自分なりの疑問や判断をもつことはできる。 そして、ジャーナリズムの情報や論調をうのみにするのではなく、主体的に受けとめ、疑問をもち、ともに考える場としたい。
到達目標	いまより、少し意識的にジャーナリズムと接する。良質なジャーナリズムに近づける感覚を身につける。世論操作の対象としての市民ではなく、主体的に考えるための材料をジャーナリズムから得る市民へと成長しよう。
講義方法	毎回冒頭20分間は、最近の新聞記事の中から一つを選び(配布)、読み、疑問を出しあう。残りの70分間は、新聞記事、番組、ジャーナリストの著作などを核にして、その狙い、論点の整理、手法の分析を行い、疑問を出しあう。 更に、テストに代わる「伝える側の視点体験」として受講生自身が与えられたテーマについて、人に会って取材し、レポートを提出する。人に会っての取材は必須条件である。
準備学習	日々、新聞を読み、テレビ・ニュースを見るときに、その内容について、「なぜだろう」という疑問をもつ。そして、少し考えてみる。
成績評価	毎回の授業で、どのような疑問をもつか(小用紙に記述)によって30%。テストに代わる「伝える側の視点体験」のテーマをどう深めたか、レポートの内容と表現、説得力によって70%を評価する。レポート提出だけでは単位取得は困難である。なお、出典を明記せず、インターネット、書籍、記事などから引用した場合、採点の対象から除外する。
講義構成	1.NHKスペシャル「兵士はどう戦わされてきたか」 2. マスコミは核兵器廃絶をどう伝えてきたか 中国新聞「知られざるヒバクシャ・劣化ウラン弾の実態」

	3. マスコミは核兵器廃絶をどう伝えてきたか NHKスペシャル「調査報告・劣化ウラン弾」 4. マスコミは核兵器廃絶をどう伝えてきたか ETV特集「ピカは人が落とさなきゃ落ちてこん」 5. マスコミは核兵器廃絶をどう伝えてきたか NHKスペシャル「原爆投下・10秒の衝撃」 6. マスコミは憲法をどう伝えてきたか(1)読売新聞社説 7. マスコミは憲法をどう伝えてきたか(2)朝日新聞社説 8. マスコミは憲法をどう伝えてきたか(3)加藤周一著「憲法は押しつけられたか」 9. 磯野恭子さん(元山口放送ディレクター)の仕事(1)「死者たちの遺言」 10. 磯野恭子さん(元山口放送ディレクター)の仕事(2)「原爆の子・百合子」 11. 磯野恭子さん(元山口放送ディレクター)の仕事(3)「大地は知っている」 12. マスコミは「松本サリン事件」をどう伝えたか 13. 石山永一郎著「彼らは戦場に行った」 14. NHKスペシャル「沖縄 よみがえる戦場」 15. BS世界のドキュメンタリー「赦すことはできるのか」
教科書	なし
参考書・資料	毎回プリントを配布
担当者から一言	時に、その時点でのホットな報道を取り上げたい。 より良い社会、より良い世界、より良い地球を作っていくために、ジャーナリズムと私達はどのような関係を持って ばいいのかを考える。その上で、自分にできることは何かを考えよう。

授業コード	13U22		
授業科目名	メディア研究(コミュニケーション研究Ⅱ)(B)(後)		
担当者名	小関道幸(オゼキ ミチユキ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	土曜2限
特記事項	他学部		

講義の内容	この授業のキーワードは「ソーシャルプロデューサー」・「ソーシャルメディア」そして「ソーシャルドキュメンタリー」 です。 あまり聞きなれない新しい用語ですが、今時代が求めている“ソーシャル”な考え方や感覚を持人達を育成する 為のプログラムを展開していきます。 “ソーシャルプロデューサーの元祖”ともいえる坂本龍馬を研究しワークショップで実際の演劇制作を体験しても らう予定です。
到達目標	①今起きているニュースをソーシャルな観点から捉え直す力を養成し、ソーシャルプランナーとして自立してい く。 ②マスメディアの情報を一方的に受け取るのではなく、自らの目で現場の課題や解決方法策うい考え抜く力を養 う。 ③それぞれの適性に応じて最大のパフォーマンスを成し遂げるソーシャルプレゼン能力を高める。
講義方法	一週間におきたニュースを、ニュース番組や新聞記事を材料にソーシャルプロデューサーの観点から解説する。 グループディスカッションやグループワーク・発表などの形式をふんだんに盛り込む予定。
準備学習	・TVニュースや新聞報道を常にソーシャルプロデューサーの観点からチェックする。 ・授業で触れた著作物・DVD・映画・テレビ番組などのモニター/視聴に努める。 ・質問事項等あれば事前に用意して積極的に授業参加する。
成績評価	定期試験(60%)、出席確認を兼ねた講義終了時のミニレポート(40%)。 ※但し10回以上出席しなければ成績を評価せず
講義構成	・①(9/18) オリエンテーション「ソーシャルプロデューサー論Ⅱ」とは？ ・②(9/25)～④(10/9) 時代を拓くソーシャルプロデューサー(現代編) ・⑤(10/16)～⑦(10/23) 維新のソーシャルプロデューサー坂本龍馬研究 ≪メッセージ力・プレゼン力とは？≫

	<ul style="list-style-type: none"> ・⑧(11/6)～⑪(11/27) 世直し劇『出でよ！龍馬 2010』への制作参加(ワークショップⅠ) メッセージスタディ・京都現場取材など ・⑫(12/4)～⑬(12/11) 制作実習(ワークショップⅡ) ・⑭ まとめ ・⑮ 論述テスト(60分)
教科書	未定(授業開始時に紹介予定)
講義関連事項	坂本龍馬研究では、龍馬ミュージカル制作スタッフに実際に参加してもらう予定。

担当者から一言	<p>メディア研究という入口から、日々起きているニュースを縦・横・斜めから分析/解説する。</p> <p>これからの時代は社会と自分との関係を見つめ直しよりよい社会を創造するソーシャルプロデューサーの時代！ そうした能力を身に付け、自己の感性を磨きあげる技術としてこの授業はある！ 志のある学生諸君の参加を待つ！</p>
---------	--

授業コード	13032		
授業科目名	メディア文化論I(メディア文化論)(前)		
担当者名	金 千秋(キム チアキ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	水曜4限

講義の内容	<p>「メディア文化論」は、2008年から2年にわたって地域連携科目として開催されてきた。2010年前期での講義は、この講義開催の当初の目的、地域住民自らが地域の知力と創造力を増し地域活性化のツールとするためのコミュニティラジオ局設立を目前に、ラジオ局における有用な人材を育成することを目的に開催する。現代社会を特徴づけるメディアには、従来からのラジオ、テレビ、新聞、雑誌、そして今はインターネットや携帯が加わり一見情報が溢れているように思われる。しかし果たしてそれは真実であろうか？それらをじっくり観察してみると、東京を中心としたマスメディアからの膨大な情報であることがわかる。しかしてそれらの情報は、地域に生きる一人一人にとって、果たして生活に活力や喜びを与えることの出来る、必要有用な情報なのであろうか？現在一見安定しているように見える日本社会、しかしすべての人々に共通のものは、全体的な景気に対する不安感や政治の動向に関してのなんともやるせない傍観者としての視線が蔓延していることではないだろうか。IT技術の急速な進化を駆動力として、私たちの生活環境は大きく変化した。いつでも、どこでも、どの地域でも、同じものが手に入り、同じような服装をして同じような話題を口にし、同じような生活をしている。日本中駅前には、同じ大手企業の看板が立ち並び、同じような思考をもち、同じような毎日を送る。それは一見幸せな平和な世界の実現のように思えるが、実は自分の住んでいる土地の風土・歴史との結びつきや、近隣の人々同士の結びつきよりも、仮想世界との連携により近親感を持つ状況は、現実世界が大きな力に操られているバーチャル世界化している可能性もあながち荒唐無稽な考えではない。それがさらに進行していくと、地域に住みながら、地域との密着がなくなり、何らかの危機に陥ったとしても存在していながら存在していない人間の危機は見えなくなるという、完全孤立化の危険な状況も生まれる。コミュニティの現実感を持った再建は、現代社会に共通する大きな課題であり、その有用なツールとして注目されているコミュニティラジオのこの地でのあり方を構築する。</p> <p>地域でのコミュニティラジオの有用なあり方、それは地域の力を上げてゆくツールとなるのが必然である。この地域の力アップ、それはすなわち地域経済力アップという単一な方向ではない。これからの時代は、力すなわち経済力という単純なものだけで満足できる結果は生まれない。いかに多様な視線を持ち得ることができるかということに比重が置かれる時代である。流れ来る情報を正しく確実に読み解き、それらの意味や関連を地域に確固として生きてゆくための指針として創造してゆくメディアリテラシーの力、それを育むことが重要である。</p>
到達目標	<p>最初にメディアについての理解講座を行い、メディアとは人間社会においてどのような役目を果たしてきたかを理解、時代の流れの中でどのような変遷を果たしてきたかを知る。その中で市民メディア、設立目前となっているコミュニティラジオの誕生の歴史をたどる。世界の中でのコミュニティラジオの果たす役割とその理念を学び、日本のコミュニティラジオ誕生とそれぞれの状況を検証する。またラジオというメディアだけでなくインターネット通信というものの可能性を検証し、ラジオという耳からの媒体だけでなく、マルチな可能性を検証してみる。</p> <p>グローバルな情報発信を一般特性とする電波メディアであるにもかかわらず、地域に固執すること、やり方によっては世界と繋がる可能性をもつ電子媒体でありながら、受信エリアが限定されるという特徴を持つコミュニティラジオ、その求める意味、「地域に根ざすことこそが、実は世界的な見地に立つこと」それを実験を通じて自分のものとしてゆく。</p> <p>人々が必要としている様々な情報を自ら受信・発信できるコミュニティメディア、そのことが地域において大きな</p>

	<p>役割を果たす意味を実感できる人材とすることを目標とする。</p> <p>業務用機材を使用しなくても、簡単に手に入るIT技術を多用し、情報収集のテクニカルをマスターし、コミュニティラジオ局の新しいあり方に活かせる方法を使って、簡単な取材なども体験する。また音声だけではなく環境が整えばメディアミックス(動画配信、テキスト配信)などもチーム編成で討議、検討、実施する。また開局に関しての広報活動なども、行う。広報活動は地域住民、地域商店街、同じ地域にある学校施設、またマスメディアへの広報なども、グループに分かれ、討議し検討し、どのチームで対応するかなども検討し、実施する。</p>
講義方法	<p>東灘にコミュニティラジオ局が設立、スタジオの一つが甲南大学近辺に作られることを前提として授業を行う。実際に番組制作に関する、ディレクト・ミキサー・エディットなど放送実施の能力を身につけられるようなワークショップを行い、番組企画・取材先コーディネート・取材実施・編集など放送番組制作を実行できるためのワークショップを行い、放送番組のデモを制作し実際にテスト放送を行う。</p> <p>また東灘のコミュニティラジオ局設立を、地域の住民・商圈の方々に広報活動したりマスコミに対する広報活動などを、実際に行うためのプレゼン能力・伝える能力などを開発するためのトレーニングも行う。</p> <p>大学の授業としてだけでなく、社会人となってもこの「伝える」「プレゼン」の能力は大きな力となることを想定している。</p> <p>1日目全体のオリエンテーション。</p> <p>2日目以後の授業の最新情報に関しては、常にWEB版を参照。</p>
準備学習	<p>参考ホームページなどを見て、番組などを見たり聴いたりしましょう。</p> <p>また大学周辺の地域への関心もちましょう。</p> <p>例)地名に対する不思議(変わった町名など)</p> <p>例)なぞのお店を見つける(何を売っているかなぞ・店主がなぞ)</p> <p>例)おいしいと評判の店、親切と評判の店などの口コミ情報に敏感になる</p> <p>FMわいわい(神戸市長田区) http://www.tcc117.org/fmyy/</p> <p>日本コミュニティ放送協会 http://www.jcba.jp/</p> <p>サイマルラジオ http://www.simulradio.jp/</p> <p>(全国のコミュニティFMをインターネットで放送)</p> <p>総務省近畿総合通信局による(コミュニティFM局に関する)情報 http://www.ktab.go.jp/housou/fm/commu.html</p> <p>コミュニティFM 最新開局情報リンク http://www2s.biglobe.ne.jp/~unit973/fmlink.htm</p>
成績評価	<p>授業への積極的参加(出席率)と関与。成果物。提出レポートの評価</p>
講義構成	<p>①4月7日 オリエンテーション 今までのメディアとこれからのメディアのあり方。 なぜコミュニティにメディアが必要か。 (甲南大学で設立しようとしているコミュニティラジオ局の役割と求めるところ)。</p> <p>②4月14日 今までメディアの果たしてきた役割と現在地域で求められている 地域住民が創るコミュニティメディアの役割。 (時代の変遷の中でメディアの果たしてきた立ち居地)</p> <p>③4月21日 多様な視点の形成、自己認識と自己確立の実感。 地域の中にある多文化の顕在化を目指すコミュニティラジオ局の存在意味。 多文化社会の形成のための10年「FMわいわいの映像を通じて」</p> <p>④4月28日 コミュニティメディア 世界の現状・日本の現状。 ゴールデンウィーク期間に課題あり。</p> <p>⑤5月12日 ゴールデンウィーク期間の課題のプレゼンテーションと評価。</p> <p>⑥5月19日 コミュニティメディアが地域に果たせる役割、果たさなくてはならない役割。 グループでディスカッション、そしてプレゼンテーション。</p> <p>⑦5月26日 文化の構成を解析＝マスメディアで自分の中に構成されている文化を自覚・発見。 受け手ではなく、人と人とのコミュニケーションの中で創り上げてゆく。</p> <p>⑧6月2日 受け手ではなく発信者となるメディアの実践(1)「伝える」理解篇</p> <p>⑨6月9日 受け手ではなく発信者となるメディアの実践(2)「伝える」理解篇</p> <p>⑩6月16日 受け手ではなく発信者となるメディアの実践(3)「伝える」実践篇</p> <p>⑪6月23日 受け手ではなく発信者となるメディアの実践(4)「伝える」実践篇</p>

	⑫6月30日 地域発掘の課題制作(1) ⑬7月7日 地域発掘の課題制作(2) ⑭7月14日 地域発掘の課題制作(3) **スケジュール、内容は、講義の進捗状況により変更される場合があります。
教科書	㈱晃洋書房「コミュニティメディアの未来」松浦さと子・川島隆編著 2010年3月中に販売予定 { http://www.koyoshobo.co.jp/ }
参考書・資料	適宜、配布またはこの授業用WEB上で公開。

担当者から一言	最新の授業日程に関しては、WEB版シラバスをこまめにチェックしてください。 座学もありますが、DVD鑑賞・そしてその感想を発表、またワークショップやグループ討議など積極的に自己発信・自己啓発を行う予定です。 しかし積極的な人だけを対象にしているわけではありません。むしろ自分自身の秘めたる能力発見や自分も知らなかった自分自身を知るという機会になると思います。これは担当講師の実体験でもあります。
---------	---

授業コード	13054		
授業科目名	メディア文化論II(前)		
担当者名	田野大輔(タノ ダイスケ)		
配当年次	1年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	木曜3限
オフィスアワー	火曜・水曜・木曜の昼休み、および木曜5限。必要な場合はメールで連絡すること。dtano@nifty.com		

講義の内容	ナチズムに関する様々な映像や映画を紹介し、それらにおいてヒトラーやナチズムがどう描かれているか、そしてそれがどんな意味をもっているかを読み解くことで、現代におけるメディアと権力の問題を明らかにする。
到達目標	講義を通じて、映像や資料の読み解き方を身につけ、メディアと権力の問題を考える視点を獲得することが目標である。
講義方法	講義は毎回配布するプリントと、適宜紹介する映像や資料を中心に進める。映像・資料を用いながら、できるだけわかりやすく解説するが、かなり踏み込んだ内容を含んでいるので、積極的な受講態度が望まれる。
準備学習	必要に応じて指示する。
成績評価	期末テスト70点、小レポート30点とし、講義内容の理解度、および問題意識の深さを評価する。
講義構成	(1) イントロダクション (2)~(3) 宣伝家ヒトラー (4)~(5) 『意志の勝利』 (6)~(7) ヒトラー像の諸相 (8)~(9) 悪の象徴としてのナチズム (10)~(11) ホロコーストの表象 (12)~(13) ナチズムとエロス (14)~(15) 新たなナチズム像
教科書	使用しない。プリントを配布する。
参考書・資料	田野大輔『魅惑する帝国 政治の美学化とナチズム』(名古屋大学出版会、2007年) 飯田道子『ナチスと映画 ヒトラーとナチスはどう描かれてきたか』(中公新書、2008年)

授業コード	13045		
授業科目名	ライフスタイル領域特論I(前)		
担当者名	速水奈名子(ハヤミ ナナコ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 前期	曜日・時限	火曜5限

講義の内容	ライフスタイルとは、時代、文化に応じて異なるものである。日本社会における現状を考えると、それは消費文化の浸透に伴い、自由に自らの好みに応じて選択できるものへと変容しつつあるといえるだろう。本講義では、このように消費文化が浸透し、価値の多様化が進んだ現代社会におけるライフスタイルのあり方を、ジェンダー論と若者論に焦点をあてつつ考察していく。
到達目標	自らが当たり前のように感じているの生活スタイルの枠組みを、客観的に分析するための視野を養うことが目指される。
講義方法	各テーマに沿って講義を行う。イメージを提示するために、DVDやプロジェクターを使用する場合もある。
準備学習	以下に記した参考書・資料、または授業中に紹介する参考書や資料・情報を自ら検討すること。
成績評価	授業態度・小テスト(40%)、そして定期試験(60%)を通して評価する。
講義構成	1.イントロダクション 2.ライフスタイルの変容：近代とポスト近代 3.価値の多様化とライフスタイル 4.ライフスタイルとジェンダー論I：フェミニズム運動 5.ライフスタイルとジェンダー論II：雇用制度の変容 6.ライフスタイルとジェンダー論III：リプロダクティブヘルスライツ 7.ライフスタイルとジェンダー論IV：性同一性障害 8.ライフスタイルと消費文化論I：脱産業社会と消費文化の浸透 9.ライフスタイルと消費文化論 II：日本アニメ・マンガの世界的浸透 10.ライフスタイルと消費文化論 III：おたく論 11.ライフスタイルとグローバリゼーション論I：グローバリゼーションとは何か 12.ライフスタイルとグローバリゼーション論II：格差社会 13.ライフスタイルとグローバリゼーション論III：コスモポリタニズム 14.まとめ
教科書	授業のたびにこちらで作成したレジュメを配布する。
参考書・資料	ゴッフマン、E.、『行為と演技』(1959). ———、『公共空間における関係性』(1976). 大野道邦・油井清光・竹中克久編、『身体の社会学』(2005). リースマン、D.、『孤独な群衆』(1961). リッツァ、G.、『マクドナルド化する社会』(1996) ———、『消費社会の魔術的体系：ディズニーワールドからサイバーモールまで』(1999)
担当者から一言	自らのライフスタイルのあり方を客観的に分析する視野を養いましょう。

授業コード	13046		
授業科目名	ライフスタイル領域特論II(後)		
担当者名	中里英樹(ナカザト ヒデキ)		
配当年次	3年次	単位数	2
開講期別	2010年度 後期	曜日・時限	火曜3限
オフィスアワー	金曜昼休み。火・水・金曜日のその他の時間も、メール等での予約を随時受け付けます。		

講義の内容	この授業は2年次までの社会学科での学習をふまえて、さらに専門的に限定された領域について深く研究するための科目です。 今年度は、「家族と仕事(働き方)の社会学」というテーマを設定しました。 この授業では、家族と仕事(働き方)の相互関連について考察するために必要な、社会学および関連学問分野の研究動向を紹介するとともに、さまざまな資料によって歴史的な変化や国際的な差異を確認していきます。日本の状況を中心としますが必要に応じて国際的な状況にも言及します。
到達目標	家族と仕事というこれからの人生において重要な部分を占める可能性の大きい領域について、ミクロ(個人的)・マクロ(全社会的)両面から現状および将来像を批判的に考察する力をつけることを目的とします。
講義方法	下記「講義構成」の内容について、解説・課題学習・レポート作成などを通じて理解を深めます。また、履修者自身にもさまざまな資料を収集してもらいます。
準備学習	講義中に指示します
成績評価	出席、授業内提出課題(30%)、および最終レポート(70%)
講義構成	1.現代日本における重要課題としてのワークライフバランス-男女共同参画社会および少子化との関連

	<p>2.仕事・労働にかかわるもう一つの社会問題</p> <p>3.近代化過程の仕事と家族</p> <p>4.「近代家族」の揺らぎとフェミニズム</p> <p>5.日本の専業主婦の状況と主婦論争</p> <p>6.家族と労働を結ぶ視点：マルクス主義フェミニズムの成果</p> <p>7.高度経済成長収束後の女性労働</p> <p>8.格差のない職につくために</p> <p>9. 男性の働き方</p> <p>10.働き方をめぐる体制(regime)の国際比較</p> <p>11.現代日本における取り組みの現状と課題</p> <p>(それぞれの内容への時間配分は履修者の関心や理解度に応じて決めていきます)</p>
教科書	テキストは用いず、適宜資料を配付する。
参考書・資料	熊沢誠『女性労働と企業社会』(岩波新書、2000年)、森岡孝二『働きすぎの時代』(岩波新書、2005年)、木本喜美子『家族・ジェンダー・企業社会』(ミネルヴァ書房、1995)、石原邦雄編『家族と職業——競合と調整』(ミネルヴァ書房、2002)など、テーマごとに授業中に紹介する。
講義関連事項	家族社会学I・II、ジェンダー論、社会人口論I・II、ライフコース論などを履修しているといっそう理解が深まります。
担当者から一言	現在進行形のテーマですので、私を含め参加者みんなが共同研究をするつもりで、授業を進めていきます。相当量の課外学習が必要となりますので意欲のある人の参加を期待します。
ホームページタイトル	MyKonanの講義関連ページ